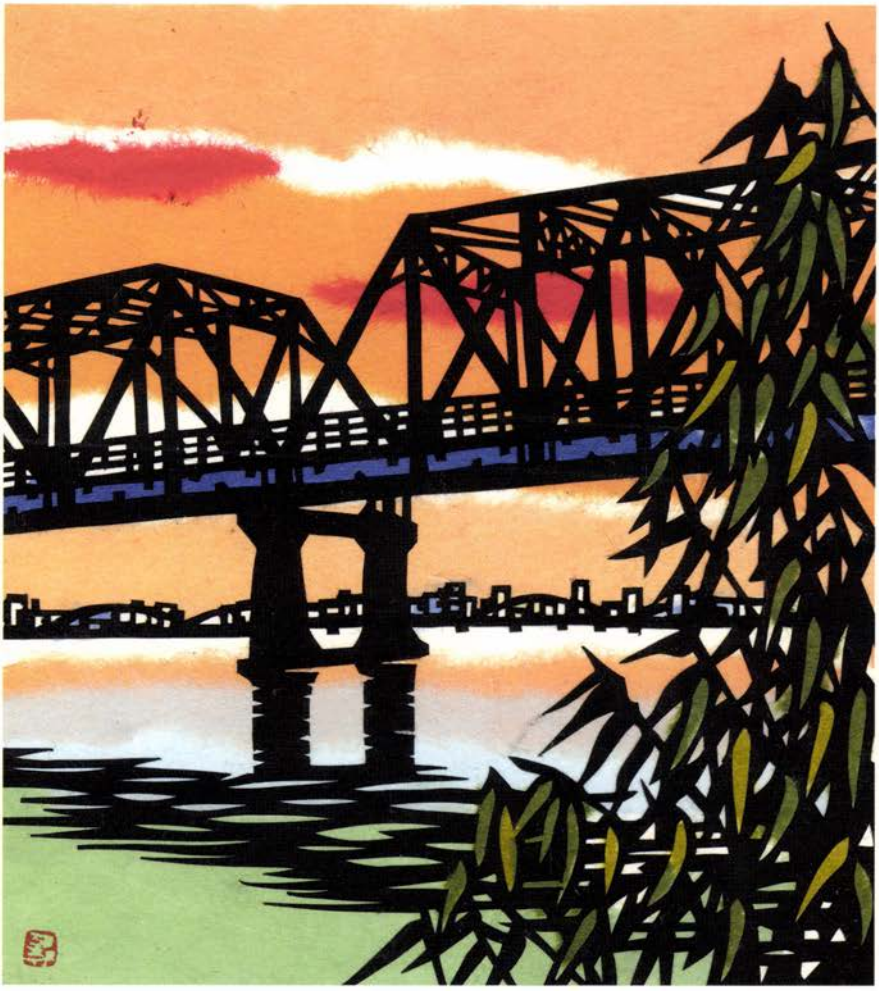
川柳塔

昭和四十二年一月十日 第三種郵便物認可
平成十八年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九五四号



日川協加盟

No. 954

第12回川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個　人　一口1/9頁　二、〇〇〇円
　　1/6頁　三、〇〇〇円
　　（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月23日

〒545-0005　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル　202号室
TEL06―6629―6914
川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。
■締切　11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時半。

平成十八年（二〇〇六年）
十一月七日（火）アウィーナ大阪
十二月八日（金）アウィーナ大阪

平成十九年（二〇〇七年）
一月八日（月）アウィーナ大阪
二月七日（水）アウィーナ大阪
三月七日（水）アウィーナ大阪

再任挨拶

主幹　河内天笑

二、〇〇〇年十月、つまり二十世紀の最後の同人総会に於て川柳塔社主幹として承認され、爾来二〇〇六年九月まで任期の六年が経過した。これまでは前任者の指名により次期主幹が決められていて、私も例外でなく橘高薫風氏に推挙され、前述の同人総会で承認されたが、今年度から主幹並びに理事長の選出方法が改正された。

昨年の同人総会に於て参与の田中正坊氏より提案があり、主幹、理事長の選挙制度をとり入れることに決定した。

同人十五名の推薦を得て立候補者となり、投票は、代表・執行役員、常任理事、相談役、参与等合計六十数名が行い、選出もしくは信任をするという制度に変った。

ご周知の通り主幹に私と、理事長に西出楓楽さんが殆ど満票に近い支持を得て信任され、私は再度主幹の重責を担う運びとなった。

魅力あふれる川柳作家集団の「川柳塔」へ皆様とひたすら前進して参りたい所存です。新理事長西出楓楽さんともどもご支援、ご鞭撻をよろしく御願い申し上げます。

黒川紫香氏のご逝去を悼む

九月二十三日早朝に訃報が届く。明治四十年八月十二日生まれで満九十九歳と四十日、享年百歳の立派な生涯で、百歳を目指している後進に希望と勇気を与えられた。

大正十一年より昭和三十八年まで阪急電鉄に勤務され、社長の小林一三氏の身近かに仕えて厚遇を受けられた。後新阪急ホテルに勤務、女子寮の寮長を務められた時期もあった。寮生の面倒見もよく、相談相手として寮生にしたわれたと言われる。

昭和八年、正本水客、丸尾潮花と共に麻生路郎に師事、以来七十余年に亘り、川柳活動を続けられ、川柳塔社副主幹、後相談役として貢献、信頼を集めて居られ、今年五月号まで投句をなさっていた。

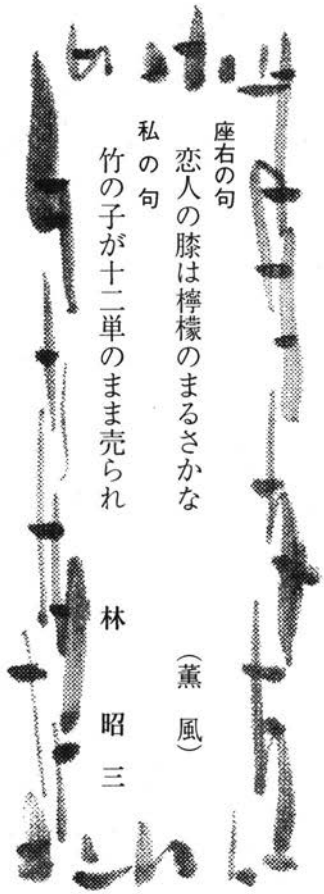
旅好きの紫香さんはよく地方の句会に出向かれ、地方の柳友との交流を深められた。中でも鳥取県から、孫のお嫁さんが来られた御縁もあって親しく往き来をされ、自称鹿野町の勝手名誉町民と言っておられたエピソードもある。

控え目ではあったが柳人の心に深く深く残るやさしく温かいお人柄であった。　合掌

◆

自選句

常識を超えると未知が拓けそう　天笑
アルミ缶満載自転車凱旋す　〃
お荷物になるまいと皆思ってる　〃
治安よき日本国よどこへ行く　〃
サスペンス怖いところは目を瞑り　〃



座右の句
恋人の膝は檸檬のまるさかな　（薫風）

私の句
竹の子が十二単のまま売られ　林昭三

川柳塔　十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「淀川・赤川鉄橋」

■巻頭言　再任挨拶……河内天笑…（1）
阿修羅の世界……波多野五楽庵…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌㉓……木津川　計…（51）
自選集……（52）
水煙抄……奥田みつ子選…（56）
愛染帖……新家完司選…（78）
第12回　川柳塔まつり……（82）
同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親宴
誹風柳多留一一篇研究 15……（94）
相談役　黒川紫香氏を悼む……（96）
土橋　螢・永田俊子・中原諷人・阿萬萬的
桜井千秀・春城武庫坊・奥田みつ子

阿修羅の世界

波多野　五楽庵

ある現代川柳の本を読んでいたら次のような句が頭の中に飛びこんで忘れられない句になってしまった。作者は失念したが、

胎動す　この子誰の子　阿修羅の子

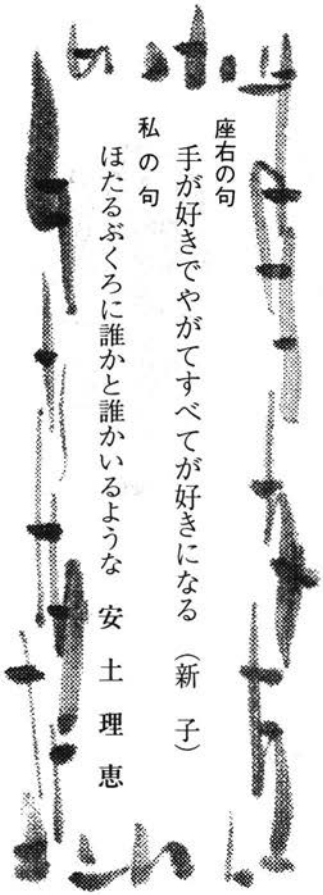
阿修羅とは、阿修羅のように暴れる、と言って一般には醜悪かつ粗暴な鬼神の事を言う。

青森県人がよく知っている阿修羅に十和田奥入瀬渓流にある（阿修羅の流れ）という急流がある。この句は、あたかも阿修羅のように愛し合った男の子を宿した女のストーリーを詠っている。母のお腹で足をふんばっている胎動はさすがに激しく私を愛した人の子だ、と感動しているのだ。

「修羅の世界」というものは私達のなかに厳然と生き残っている。現に中東で揺れる今の時代こそ「修羅場」そのものであると言えるだろう。

川柳の世界の「修羅の世界」は敗者の苦しさと滅びゆくもののロマンを描いたものが多い。一途な恋に破れ、殺意を失い、荒んだ心で安らぎをじっと待っているときの苦しみが描かれている。そして余りにも激しかった恋へ震えおの

檸檬抄「シングル」……川上大輪・松本文子共選……(102)
一路集「鼻」……銭山昌枝選……(104)
「チャイム」……左右田泰雄選……(104)
「痛い」……有沢せつ子選……(105)
初歩教室「柿」……三宅保州……(106)
秀句鑑賞「同人吟」……安藤寿美子……(108)
「水煙抄」……柿花和夫……(110)
閑人閑話　私のふるさと……田中正坊……(111)
■エッセー　私の畑へいちどいらっしゃい……太田扶美代……(112)
各地柳壇（佳句地十選／石堂潤子）……(115)
柳界展望……(129)
十一月各地句会案内……(130)
■編集後記（ひとこと／吉田幸子）……希久子・恵子……(132)



座右の句
手が好きでやがてすべてが好きになる　（新　子）

私の句
ほたるぶくろに誰かと誰かいるような　安土理恵

のくのである。

今は少子化時代で子供は大事にされているが一世紀前の社会では、口ベラシのために子供を間引く事も往々にしてあった。生まれたての赤肌の小さな生命の塊が、産衣を着せられぬうちに、だれかの太い手によって間引かれる。そんな修羅場が存在した。

「これはこの世のことならず、死出の山路のすそ野なる、賽の河原の物語。十にも足らぬ幼児が、賽の河原に集まりて、峰の音すれば父かと思いよじのぼり、谷の流れをきくときは、母かとおもい馳せくだり、手足は血潮に染めながら……河原の石をとり集め、これにて回向の塔をつむ。一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため、兄弟わが身と回向して、昼はひとりで遊べども、日に入りあいのその頃に、地獄の鬼が現われて積みたる塔を押し崩し……」

この子等は「和讃」の調べによって救われるのである。

考えてみると子を殺す母、母を殺す子、繰り返される災害の数々。前の首相は卒業旅行に忙しくわれ関せずの発言をしていた。

いつかまた「修羅」がふりかかれば防ぐのは一人一人である。時計の針が修羅の世界へ進むのも間近かもしれない。

川柳塔

河内天笑選

松江市　津川紫晃

渋いお茶話の種も入れ替える
笑いしか残っていない負けいくさ
本とじたあたりで切れた思考力
言い張った胸に孤独の風が舞う
取皿に分ける夫婦の句読点
鈍行に乗りかえ触れる風の色

米子市　政岡日枝子

誰を待つ訳ではないが花を活け
ポスト今鳴ったようだと待つ手紙
カーナビが怠けてカーブ教えない
ぐうたらで終わらないぞと顔洗う
錠剤ころころ私から離れる
身辺整理とてもうるさい小引き出し

鳥取市　武田帆雀

日焼けした顔の美人に逢う日なり
寄らば刺す蜂が構える草の鎌
好き合うて過疎を承知で花の馬車
立ち話から座り込む第二幕
ひつこい男でもったいない美点
焼き鳥の串上品に食っとれず

吹田市　山本希久子

秋の風古稀の自転車押してくれ
役に立ちたくて雑草背伸びする
短日へ約束ばかり溜まり出す
はね返す力を妻は溜めている
透明な壁を作って古稀夫婦
二人の仲何故かよく知る他人様

河内長野市　村上直樹

脳幹をガツンまさかのガン告知
判決は減塩節酒つき無罪
箍ゆるめぐんにゃりしたい日曜日
おーいお茶怖くてとても言えません
ときめきのスリル　カルチャーはしごする
深呼吸秋がからだに染み渡る

京都市　高島啓子

母の背骨と父のしっぽを受け継いで
傘ひらく場所さえあれば生きられる
絶不調今日は大根乱切りに
スーパーと本屋はちょっと寄ってみる
愛していると波は何度も繰り返す
石ひとつ飛んで来たので自重する

鳥取県　蔵本悦子

完熟の私今なら御買得
Tシャツに香りを残し夏が行く
この暑さたちまち汗が底をつく
ポケットに入れたい好きな人がいる
夏食べてすくすく伸びるひまわりだ
曲がりたい方へ曲がっている胡瓜

出雲市　佐藤治代

私の自由を奪うギックリ腰
後悔を重ねて生きるそして秋
転ばない計算をして転んでる
繋ぐ手を伝わってくる思いやり
淋しさを埋める真っ赤な秋のバラ
人ごとと思ってた尿漏れパッド

富田林市　藤田泰子

空襲を思い出させる大花火
夏バテを笑うが如し百日紅
不眠症海をみた日はよく眠る
独りでもおいしいものはおいしいよ
独り旅チョイ悪バーちゃんしています
来世の事など思う暇がない

鳥取市　有沢せつ子

十二歳嗜好が少しずつ変わる
老いて子に頼らぬ意地を通し詰め
早発ちヘアラーム二つ任を負う
大ジョッキ楽しい会話続いてる
お向かいのピアノはジャズがよほど好き
ニューモード横目に探す特価品

松江市　川本畔

力ずく搾るレモンの阿の叫び
逆流をするものがあり救急車
急がねば花の言葉を聴き洩らす
移ろいを湖の色にも感じとる
仏飯を茶碗に移し秋の水
ちちろ鳴く自問自答を繰り返す

鳥取市　倉益一瑶

やっかいな火がチョロリチョロリと燃える
写経して無になることはむつかしい
本音など吐かない貝の卑怯者
言いたくてアサリは砂を吐き続け
ちぢかんだ脳へびっくり水を打つ
君もわたしもやがて童になるのです

東かがわ市　池内かおり

お隣もそのお隣も老い二人
お返事はなくても良いの紫香さん
何もかも話してほしい茶を淹れる
いざと言う時の妻には勝てません
欲得がからめば視野が狭くなる

東かがわ市　原賢

臆病な男は妻にだけ吠える
去る者は追わずに横の輪を広げ
満点でないから先に夢がある
ご破算にするには事が大きすぎ
母の胸大きな海に一寸似て

東かがわ市　伊勢八重子

残照へ明日の天気を確かめる
日に焼けた心を秋がノックする
チャレンジに老いの力を試される
旅の宿一息入れるフルムーン
並べたて自慢の部屋へ誘われる

東かがわ市　清川玲子

一匹の金魚と孤独わかち合い
見ぬ振りをしてくれている友の情
飛び乗ったエレベーターが恐くなる
怪談より恐い子殺し親殺し
ランドセルに道を聞いても怪しまれ

東かがわ市　成重放任

三十五度うだる暑さに身を余し
風鈴のメロディー端居の子守唄
悪性と聞いて動揺治まらず
期待した異動今回見送られ
宝クジ買うてあれこれ皮算用

東かがわ市　川崎ひかり

子を抱く娘が母の目に変わる
私も最後はじゃあねと別れたい
誠実を売りものにして不誠実
うれしい日やたらおしゃべりしたくなる
謎かけのように突然花が散る

松山市　髙橋宏臣

聖典の滝が描いてしまう戯画
残照燦々少しニヒルに生きてみる
くすぐると泥を吐き出すきれいごと
望遠鏡の倍率嗤う大宇宙
褒められてオシャレごころが踊り出る

松江市　古手川光

台風がスキスキスキと来る日本
モッタイナイを忘れた資源無い日本
首横に振られんようにドック入り
腰低い男に油断してしまう
お宝が出そうな蔵が家にない

松山市　宮尾　みのり

選択肢も罠もたっぷりある都会
バーゲンの中に見つけたいいセンス
勢いのある方へ向く風見鶏
体重も立場も妻が重くなる
あの頃のメモを見つけた愛読書

大洲市　中居　善信

月冴えて街で住む子の事をふと
いい風が吹いてる白樺の下で
義理欠いてそれから遠い人となる
背負いきれぬ物を背負っている遍路
浮いた話の一つや二つ男だぞ

西予市　黒田　茂代

かげろうの揺らぎへおんな消えて秋
追うでない砂漠の虹は蜃気楼
一握の砂と詩人を真似ている
小さい絵を選ぶ小さい部屋だから
秋夜長ひとりわくわく新刊書

高知市　小川　てるみ

ほっとするたびに心が風邪を引く
はちきんのパワーが欲しい六十路坂
本物の味を忘れている味蕾
腹立てる事をやめると腹が減る
自己主張過ぎるカラスへ威し銃

高知県　小澤　幸泉

またひとつハードル越えて六十路坂
子の料理下手で間に合う夕の膳
孫の受験より心配は金のこと
野仏の涙がみえた秋の路
人恋し独りの秋をかみしめる

高知県　赤川　菊野

直線を歩いた道にうそはない
猜疑心強い男のにごった眼
人並という幸せに気付かない
十人十色人それぞれの物差しで
一ランク下げて気楽にやってます

唐津市　久保　正剣

伝統に老舗の家訓正座する
明日の空暗く彩る長寿国
一族の遠景に置く団子鼻
太陽のエキスは要らぬ土竜の巣
失って知る相棒のありがたさ

唐津市　市丸　晴翠

軸足の年金揺れて夢も揺れ
母逝った歳に並んで知った老い
ストレスも生き甲斐と祖母若返る
ぽろぽろとこぼして食べる母看取る
ほろほろと祖母の角煮は胃に馴染む

唐津市　樋口輝夫

初耳のニュースまわりに撒き散らす
退陣の総理最後の武者震い
相談役だんだん萎んでゆく余生
鼻の下伸ばす歳でもありません
夏痩せでベルトの穴が一つ増え

唐津市　坂本蜂朗

深読みの選者作者のしたり顔
姑が感謝しだして後がない
両隣空き家向いは老い一人
児に還る母と次第に合う呼吸
膝小僧無理だ無理だと笑い出す

唐津市　井上勝視

色鉛筆みんな大事な色ばかり
汚れても私の色に自惚れる
妥協して私の色が溶けてゆく
混ざり合い助け合ってる風の色
いろいろの色に目覚める青い春

唐津市　山口高明

民は飢え糖尿病の独裁者
誕生日陛下と同じ気が咎め
同情はしても所詮は他人ごと
棘一本刺さり人間大騒ぎ
子が惚れた嫁を憎がるはずがない

唐津市　宗水笑

十日余の寿命悔いなし蝉の殻
セクハラがエッチで済んだよき世代
漬けものの味をご近所競い合い
労られ更に火が付く泣き上戸
三合で天下を盗った酔い心地

熊本市　永田俊子

天命を知る伸びきったゴムの紐
この齢で手のひら返すことはない
世を嘆き糠みそ臭い手を洗う
クラス二次会コーヒー一杯でねばり
白菜まっ二つ芯まで白い真実

熊本県　岩切康子

電池換えたテープコーダー活気づく
留守の日は留守の仕事が待っている
障子貼り出来ることから冬仕度
大雨に溶けてる畝を立て直す
決意まで遅くそれから慌て出す

熊本県　髙野宵草

乱麻断つ剃刀朝の新鮮さ
いたずらな風がアデランスを揺する
厨房に入らずで困る妻の留守
パンツまで濡らした汗に満ち足りる
頷いてやる言い訳の下手な嘘

砂川市　大橋政良

まだ生きるつもり禁煙した噂
自己過信打ち忘れたか句読点
掴まれた尻尾縄抜け考える
売れる日も売れぬ日もあるアーケード
いい女ネズミ花火が追ってゆく

黒石市　相馬一花

好きだからじわりじわりとネジを捲く
寿司飯にこだわるトロの自己主張
七色の媚に堅物骨抜かれ
でたらめを疑いながらまた嵌まる
ゆるやかに腰振りをするアロハオエ

弘前市　高橋岳水

軽く見たシコリに死命握られる
良薬の苦さとへつらいの甘さ
紫の袱紗に包む自尊心
放縦と自由違えているニート
風下でスキャンダラスな噂嗅ぐ

弘前市　櫻庭順風

悪戦苦闘素人の鋸薮を切る
きつい作業雨に託け午前中
関節が痛みはじめて捗らぬ
早朝出ても目まいする暑気当り
一家団欒バーベキューのたのしさ

弘前市　髙瀬霜石

お見舞いへやむなく買って行くメロン
願わくば風に舞いたい外れクジ
源泉徴収正直者が多すぎる
4WDだと思う妻と僕
夕刊のおじさん花を見て帰る

弘前市　福士慕情

雨音を聴いて布団を掛けなおす
雨の日もピイピイピイッと炊飯器
雨しとど今日の予定が狂いだす
一雨ごとに冷たくなった蛇口
秋雨や柳誌一冊読み終える

弘前市　相馬銀波

温度差に赤いりんごは仕上げられ
大根も太いと言えば角が立ち
自制するつもりの酒に酒土産
もとよりの浅学非才よく遊び
テスト前みたいな僕の一夜漬け

弘前市　今愁女

グローバルになったもんです国技館
地球の裏の少年相撲に憧れる
里山を熊がうろうろ散歩する
驕慢なヒト科が熊を討伐す
少年の悩み放火魔に変貌す

弘前市　岡本花匠

タンス預金ゼロ金利解け動き出す
生き過ぎたと義母の愚痴聞く秋彼岸
くしゃみして一抹の不安付きまとう
晩秋の冬に備える町の音
甘味料に慣れて体はむしばまれ

弘前市　宮崎ヒサ子

暑過ぎた夏足早に去っていく
鰯雲天の高さを見せて秋
早生りんごたわわに実り秋の詩
山はごめん熊と蜂には弱いから
部屋整理本の扱いままならぬ

弘前市　須郷井蛙

日本にいるのに英語の文字ばかり
高くても石油が買える有難さ
三人を生んで国家に貢献し
直球で帰りなさいとランドセル
寄付をしたつもりで金を貸してやり

十和田市　阿部進

ひびき合う友は言葉を飾らない
早春の妻が化粧に念を入れ
塾通い遊び知らない子に育ち
いい出合い探して北の旅にでる
普段着で語る一句が喜ばれ

平川市　小寺花峯

地酒から演歌がトロリ舌を這う
肝臓が五時から笑う斗酒の酒
満タンに入っています小銭入れ
使い道寝返り打った宝くじ
唾をつけ数えるほどでない財布

さいたま市　星野育子

それぞれの思いで男児誕生聞く
今戦後また戦前になる不安
おをつけてビール運ばれ正座する
言い訳を聞いてないのに捲し立て
ゴミの日があるから曜日忘れない

さいたま市　八田敏

父逝きし八十路私の路となる
誕生日あのおぞましきテロ画面
九・一一もう忘れない誕生日
ウォーキング体力老化目に見えて
友は減り医者の知り合いばかりふえ

日高市　根岸方子

人込みをはぐれぬように風の盆
虫の音にテレビの音も掻き消され
配給のカードが義母の遺品から
献血へあの手この手のピーアール
検診へ友も誘って安堵する

佐倉市　岡井　やすお

テポドンも利かず次の手思案中
外交より武力で押して来る時代
開発が進んで自然怒り出す
進学を止めん札束プロ野球
団塊の世代野山に溢れ出す

千葉県　永峰　宣子

渡米半年言葉の壁が解け始め
雨続き味方は風呂場乾燥機
来客に蚊取線香準備する
ストレスがどろどろにする血の流れ
増水を濁りで知ろう川遊び

東京都　小川　賀世子

逆縁を耐える二人にカンナ燃ゆ
甥の友へ悲しいメール駆けめぐる
絵手紙にカボチャの器量定めする
祝親王誕生紀子さまに拍手
カーテンを開ける音から今日となり

東京都　長谷川　康子

知らぬ間に秋虫の音が入れ替わり
草分けてかそけき音の元探す
好きなもの食べて夏バテから抜ける
五十肩無情に高い荷物棚
掃除機を出すと夫は雲隠れ

東京都　清原　悦子

蝶結び今のしあわせ包み込む
残り香が漂っている不意の客
綻びをファッションにする世に変わり
子育てを終えて静かな風が吹く
路地裏にまだ人情が生きている

東京都　岸野　あやめ

満ち足りてセレブ夫人も鬱になる
お見舞いはベージュの服が無難です
珍しいこれは陽気な歯医者さん
年齢なりの自由もいいな傘寿過ぎ
叔母さんのあれが欲しいと形見分け

国分寺市　野﨑　勝

明日咲くぞ朝顔ネジを巻いている
たまたまが幸か不幸か今の妻
打ち上げは頂度お酒が終る頃
同期会だんだん次が早くなる
一人住む息子の暮らし妻は知る

八王子市　播本　充子

秋風が吹いてお化けも暇になる
皺くちゃなお札でごめん募金箱
筋肉の若さを知ったマッサージ
下駄履いた足を靴屋にほめられる
昨年のカップも混ざる不燃物

横浜市　小野　句多留

濁流の早さ自然を越えてくる
合併の一致団結する祭り
冷や奴お前と飲める晩になる（夏係去る）
明日の運ぼんやり学ぶ仕舞風呂
共白髪お色直しをする遍路

横浜市　菊地　政勝

この俺が父親ですとしゃしゃり出る
二度とない人生をいま光らせる
不揃いの粒だが真珠の自負がある
モーツァルト聞かせ発酵させる酒
切れ者が虎視眈眈と狙う椅子

富山市　島　ひかる

スリッパを替えて今年も終る夏
ポイントに動くもの書く白い画布
検索へ小さな夢を膨らます
望郷の念が深まる友の文
カーナビに頼り遠道させられる

可児市　板山　まみ子

象潟を歩く昔は海の中
水音は芭蕉も聞いた月の山
若者のようには行かぬ登山靴
田を渡る甘い香りの米どころ
健脚も年なみとなり痛む脚

可児市　鶴留　百合

村育ち揺れる稲穂に安堵する
好況の増員見知らぬ顔が増え
熱戦に家事放り出し甲子園
ヒーローの青いハンカチすぐヒット
今年またお花畑へ登山靴

静岡県　薗田　獏沓

あの世にも肩書きがあり居士信士
涼風が立つとあちこち縁ばなし
甲子園勝負終った爽やかさ
ふる里の景色が見える宅急便
花火師の暗い夜空は晴舞台

犬山市　吉田　幸子

満月へ届く童話の虹が消え
キャベツにはご法度虫の転居先
無理するな万能薬となる響き
スパイスが効いて方向見失い
やきもきはするが娘の歩む道

犬山市　金子　美千代

切り捨てにやっぱり出来ぬ義理の数
五年目のガンの完治へありがとう
もったいないであふれてる母の部屋
夢を追う不安も少し連れて追う
酔っている訳ではないが滑る舌

犬山市　関本かつ子

終電車着物美人も舟をこぎ
茄子きゅうり器量好しから人にあげ
言い切った言葉忘れぬ嫁姑
リフレッシュ夫の留守もあと二日
正札になってお店も秋の柄

愛知県　早川盛夫

親バカで良し年金の使い道
百姓の真似事をして定年後
集って喋るだけでも気が紛れ
誰にでもできて出来ない菊造り
十五年暮したネコが死んじゃった

滋賀県　中宗明

親介護スープの冷めぬ距離に住み
プロポーズ開幕ベルの鳴る前に
こけし買い旅のロマンス一つ増え
油断すないきなり出会う悪魔かも
駐車違反承知で買った子の車

京都市　都倉求芽

的確な一語求めて辞書を繰る
薬の恩忘れて酒の席にいる
ゆっくりと歩けばなんでもない迷路
仁王さん高血圧に気をつけて
マンションの見知らぬ人と一つ屋根

亀岡市　井上森生

古稀期して行くかホノルル ウォーキング
ポリープが出来てわが身を可愛がる
辿りつく先を描いて観る希望
溜め込んだ過去より今朝の風が良い
熟年のこころ休まる花の寺

長岡京市　山田葉子

小心でカードが使いこなせない
思い入れまだ捨てられぬ赤い服
こだわりを捨てたらわたし見えてくる
遺伝子とまだ繋がらぬ点と線
蟻の列前がとっさのまわれ右

八幡市　結城君子

家庭内の暴力知らぬ福寿草
やぶ椿安住してる裏参道
もっとくつろいで桔梗よ今日はクラス会
矢車草君はきっとO型だ
ひまわりの疲れ果てたる秋日和

大阪市　前たもつ

千八百回でんぐり返りうまくなり
少年の叫びは風に打ち消され
朝食六時仕事はみんな午前中
極楽はソファーで眠る小一時間
ビルに出る月もやっぱり美しい

大阪市　神夏磯　典子

したいこと諦めさせぬ生きる欲
あべこべは絶対出来ぬお茶の席
枕元耳かき孫の手肩叩き
赤とんぼ杖を案内してくれる
納豆を食べて明日へ身構える

大阪市　川原　章久

へそ曲げて私に挑む妻の顔
試し曳き早や泉州に秋がくる
新宮に男子誕生大事件
酒に文句誰も言わない一人旅
ゆっくりと絵から聞こえる虫の声

大阪市　鶴田　遠野

母の皺父の背中に教えられ
靴の紐締め直してる八合目
あの頃に戻り妻との恋メール
神棚に夢だけ残す宝くじ
ワンマンも朝は合掌して出かけ

大阪市　古今堂　蕉子

極楽とんぼ磨きがかかる歳ととも
浪費家に始末屋の妻縄電車
今日一日うつになっとこ寝といたろ
春夏秋冬　秋はかけ足が上手
宮中に嫁がせなくて気が楽だ

大阪市　岩崎　公誠

頂点は紛れなんかで手にできぬ
不愉快に耳の鳴る日の不整脈
行列のない弁護士はいつもヒマ
反対の数に手段が浮かばない
天童の顔見ただけで頬ゆるむ

大阪市　川端　一歩

おだやかな人になれずに古稀の橋
石段を数えて欲がまだ消えず
曙の光が見えた彬の碑
九条が大手を振って歩く世に
遺言は飲酒運転だけするな

大阪市　井丸　昌紀

嘘をつく事にも飽きてきておとな
人生に八分休符も交ぜてみる
何色にでも染まります今の僕
辛口の批判をくれる友ひとり
競走馬悟り開いたような顔

大阪市　津守　なぎさ

電飾のマンション目立つ上高地
川床で舞妓交じえてなごむ夜
梓川鴨の親子にいやされる
藤十郎花道で観るあでやかさ
よく育つニガウリパワー貰う夏

大阪市　津守柳伸

携帯とデジカメ持ってホイサッサ
台風が避けるを願う三朝橋
川床に浴衣風雅に夏謳歌
塩焼の鮎と瀬音を聞く夕餉
虫の声ふとお化粧がしたくなる

大阪市　小泉ひさ乃

神さまがくれた試練か痛む膝
ぽたぽたと働く汗は生きる音
それ言えばもう昨日には戻れない
冷凍保存した愛少しずつ老後
生きること食べることまだ飽いてない

大阪市　板東倫子

今日の電話株屋に墓屋金貸し屋
老母へは心の届く文を書く
ユーモアのない漫才はけたたまし
かきまぜて騒いで総理退場す
よき昔お化けが一番こわかった

大阪市　奥村五月

同権と吠える女が専用車
反抗期柱のキズを忘れてる
雷もちょっとたじろく臍ルック
拳骨が飛び出しそうな父の墓
今日もまた酒が目的趣味の会

大阪市　近藤正

おむすびの腕競い合う嫁姑
百生きてやっと注目される歳
九条もユニバーサルになってきた
箱入りの娘に虫が二三匹
そんな人居たか小泉とかブッシュ

大阪市　小糸昭子

この離婚もう少し待てば値が上がる
団塊の世代がニート育ててる
もったいないとつい口に出すダイエット
大切なもの大切にする教え
近所から茗荷をたくさん貰い過ぎ

大阪市　熊代菜月

一年の早さが恐い歳になり
七曲りして人生に味がでる
土手の道よけて通れと豆の花
三秋の日めくりめくり冬仕度
熊野路に遍路の鈴が語りかけ

大阪市　津村志華子

花畑わたしひとりの小宇宙
自分史のどの頁にも悔いがある
空っぽの金庫にもあるスペアキー
使い捨て儚すぎます紙コップ
ふる里を偲ぶこけしの細い眉

大阪市　大川桃花

いっしょいっしょと言ってほしさにこぼす愚痴
ハネムーンと同じ駅からフルムーン
漆黒の海を見つめて待つ日の出
不祥事が起こって裏の裏を見る
口紅を真赤に変えて消す弱気

大阪市　岡本久峰

空っぽのポストを覗く阿呆らしさ
乳母車にお乗り遊ばすお犬サマ
漁民射殺かつての悪夢蘇える
畜生以下こんな日本に誰がした
新首相国の洗濯してほしい

大阪市　松尾柳右子

忘れ物また忘れ物恐くなり
当世は傘とバナナが安くなり
傘立てにいつも誰かの傘があり
砂浜のパラソル家族の笑顔満つ
停年を楽しみにして仕事する

大阪市　渡部さと美

新宮様誕生民は湧きに湧き
元気くれて斎藤君よ松井君
お前よう寝るなあほんまお互いに
七十のさっと開かないビンのふた
前歯抜け鏡は見ない見たくない

大阪市　清水絹子

夫の年忌いい事ばかり子に伝え
風呂上がりの鏡に今日もご苦労さん
元気でいるただそれだけの子孝行
四肢フルに使ったあとの缶ビール
抽選機の米の五キロに大あわて

大阪市　榎本日の出

惚けるより始末の悪いミス続く
好きな花喋りつかれておじぎする
日の丸を燃やす顔みて恐くなる
誰だってころり逝けたらありがたい
恩返し出来ないままの通夜迎え

大阪市　榎本舞夢

生きて来た証作品残しとく
どん底で抱きつづけた希望の火
失うもの無くなってからめちゃ楽し
スーパーで顔売れ出したお父さん
入院で遊ぶ友だちまた増える

大阪市　伊藤博仁

どっと寄せさっと引き去る盆の波
エアコンがつぶれデパートはしごする
女難とはこれだったのか認知症
忘れ場所思い出すだけまだましか
かき氷食べにわざわざ地蔵盆

大阪市　町田達子

毎日を首長くして待つ秋彼岸
気候の良い時は少しで長い冬
暑さ負けにプラス足も弱くなり
鉢植の木にもたっぷり水をやる
すれすれに通る車に肝冷やす

大阪市　中村叡子

昨夜の月が氷のような顔をして
じいちゃんがチャングムの誓い大ファン
今日は不調自転車乗るのやめておく
年寄りが呑まぬ薬を溜めている
地下街が怖い大雨大地震

大阪市　中村れんげ

面面が違うて人間好きになる
今晩は脳がさわいで眠つかれず
エアコンを使いまくって飲むビール
難題をこなした時の爽やかさ
擂鉢の底にも秋がやって来た

大阪市　池上清治

力任せでゴキブリ叩き姿なし
刑務所はとても賄賂の効くところ
乗り継いで来た荒磯で鯛一尾
里帰り二日きびなご攻めに遭い
動脈瘤騙しすかして鰻食い

大阪市　福岡末吉

腹の内ふと覗かせる言葉尻
愛の鞭怒る心も見え隠れ
逃げの手に命運口にする脆さ
教え子を鑑に余生引き締める
超太古地球誕生吾も継ぐ

池田市　栗田久子

幸せな時は絆を忘れがち
華やかな色はうつさぬ影法師
大漁の前触れだろういわし雲
しのび寄る秋を感じている背中
人生のセカンドステージへ挑む

和泉市　横山捷也

あなたなどスペアでしたと軽く言う
良い日だった手足を伸ばす仕舞風呂
七変化しても鏡は知っている
廃線の駅の鎖に蔦がはう
満員の電車で川柳考える

和泉市　西岡洛酔

蝉しぐれ聞かなくなって秋は其処
前進の一歩が遅い昨日今日
老いふたり満足無くとも達者です
星占いもう信じ無い歳となり
一ケタの昭和真面目を背なに負い

泉佐野市　山本蛙城

それ聞いてからはゴーヤを食べてます
娘の対話だからさあ対だってさあ
丸い背に理路整然は苦手なり
時代劇見てはうっぷん晴らすなり
敬老日幼稚園から招き状

茨木市　藤井正雄

出勤のナースに出会い見違える
悠遠の風紋千里ゴビ紀行
一日の機嫌をトラに左右され
台風接近喋り続ける窓ガラス
妥協案胃薬一緒に飲んでいる

大阪狭山市　矢野梓

二人してさんま一匹焼いて食べ
気のゆるみ背がだんだん丸くなる
黙ってる方が血圧上がらない
妥協してすっきりしない胸の内
気乗りせぬけれど夫に家事教え

交野市　山川日出子

王さんの目をうるませた斎藤君
ピカドンは人が落さにゃおちてこん
体操の着地に似てる句の終り
フラットとシャープな夫婦似合わない
大阪に落語ロボット初登場

交野市　森本弘風

年金の口座は妻が握ってる
八月は多忙年金足を出す
国債を刷り増税考える
骨太の改革格差生んだだけ
虫さえも食わぬ野菜の並ぶ棚

交野市　田岡九好

選挙カー自分の都合ばかり言い
セールスとイデオロギーはお断り
三時間待合室のやけっぱち
胸騒ぎ検査結果は明日出る
テポドンは将軍様の断末魔

河内長野市　植村喜代

喜寿が来てきびしい坂も一歩から
気が付けばだんだん人に頼ってる
こんな世に誰がしたかと言いたなる
金の世で贅沢ばかり見聞きする
前向いて走りつづけて来た人生

河内長野市　水谷正子

秋祭九月に提灯もう並び
雲は湧きハンカチ王子現れる
息子より若い総理が生れそう
鶴よくぞ親王様運び
栗饅をふふんと孫は振り向かぬ

河内長野市　坂上淳司

苦瓜を最初に食べた向こう見ず
希少価値西瓜のような妊産婦
下戸でして奈良漬食べて出来上り
継続は力貧乏しています
家捜しの鍵が鍵穴にぶらり

河内長野市　井上喜酔

旅の雨ぼんやり見てる窓の外
裏通り甘い誘惑するネオン
豊作を守る案山子は派手なシャツ
平成を手探りで追う高齢化
血統が騒ぐ名馬の勝ちっぷり

河内長野市　山岡冨美子

皺の数みなそれぞれに一家言
それぞれが薬持参のパスポート
爪丸く切って出陣するナース
説明書に振り回されるメカ音痴
招待券ばかり目につく美術館

岸和田市　井伊東吉

ぶり返す暑さに老いの嘆き節
夏疲れ取れない内に秋多忙
手分けして見に行く孫の運動会
通勤の精気欠く顔月曜日
辟易の化粧の匂い満つ車内

岸和田市　岩佐ダン吉

君が代でたかが愛国心などと
辛辣な言葉笑顔で返してる
心の闇性善説を信じたい
ひとことが多くて釘をさされてる
隅っこのニュースに心晴れてくる

岸和田市　林力子

期待した割にはぱっとせぬ総理
皿洗う夫と溶け合う古稀の坂
お互いに頑固になって老い二人
辻褄を合せる舌がもつれてる
占いの奇跡ないまま陽が沈む

岸和田市　雪本珠子

医者嫌いだった子供が医者になり
さりげない言葉の中に刺出てる
群れてても心の中はロンリネス
カラフルな薬ペットも飲んでいる
メモ帳に心の呟き書き留める

岸和田市　堤楢代

やめてんか車内の化粧恥ずかしい
胃カメラがノックもなしに入ってゆく
人間が好きでやっぱり群れに居る
カラオケで私は愛を訴える
バーゲンに日頃のうさを捨ててくる

岸和田市　原　さよ子

球根の中に詰まった春の夢
閉めかけてもう一度見る丸い月
ピーポーが話の腰を折って行く
回復のきざしを動く箸に見る
母の顔見ればやっぱり言えぬ嘘

岸和田市　土橋房枝

師と仰ぐ人の体調気に掛かる
いつまでも弟子でありたい師に出会う
弟子は皆褒めてもらって成長す
懐の大きな師から知識盗る
さしあたり笑顔でかわす恋敵

岸和田市　森元ふみよ

お若いと言われ本当の歳言えず
税金を捨てた燃やした真実よ
風呂敷が日除けスカーフ見直され
孫達が去り行き祖父母抜け殻に
時間には余裕が出来た古稀の坂

堺市　村上玄也

流行を追って失われる個性
お互いの過去には触れず友でいる
CTで見れば隙間の多い脳
モデルには美女はいらない抽象画
仲裁に入って事をこじらせる

堺市　矢倉五月

負け犬の遠吠えそれも一理あり
軽トラの露店トマトは完熟で
目ざましを夫婦で押え旅の朝
陽だまりのような絵手紙ありがとう
独り言傍の夫が咳き込んだ

堺市　近藤豊子

朝顔もほっとしている秋の風
すずしさに昼寝からさめまたねむる
くらがりにしかけいろいろ夜店の灯
参道のひとなみしずか万灯籠
燈火会へ鹿も夜ふかししています

堺市　加島由一

小さめのサンマがよろしワンルーム
生きてれば母は米寿の誕生日
詫びることあって仏の水を替え
悪ぶっているがさみしい金曜日
子の留守にしか覗けない子供部屋

堺市　石堂潤子

秋うらら明日香路謎の多いとこ
馬鹿の付くほどの真面目さ当てにされ
尼さんになろと思うた事がある
こんにちは返事無くてもいいのです
鳶が鷹生んで予算が狂い出す

散歩道あの子この子と犬のこと
痩身の骨まで焦がす炎天下
のびる爪減る脳みそで恙がなし
内緒です句の裏側にあるウフフ
水の音火の音ひびく陶器展

堺市　西村りつえ

不幸かな不幸知らずに生きている
よこしまな道へハンドル切りやすい
来る時が来ました父の認知症
ありがたい陽より詩的な月が好き
感動と義には男も泣いてよし

堺市　和田つづや

飲酒運転駄目押しのメール打つ
勇壮なダンジリ囃し宮の森
久久の親王さまに旗が揺れ
テストより部活にファイト燃やす孫
みーつけた蟻が道草するところ

堺市　源田八千代

古稀すぎて小春日和の子沢山
年金も貯金のクセが直らない
喜んで行かなくなった同期会
やりすごそ鼻息荒い馬だから
帰れない空気も水もよい在所

堺市　志田千代

涙見てほだされたのが甘かった
大いなる賭けとも知らず妻娶る
凭れると妻はときどき肩すかす
喋らない人と食事の咀嚼音
大阪弁出張先で憚らず

堺市　奥時雄

老老介護敬老の日を如何にせん
古里では運動会といまだ呼ぶ
コウノトリも聞耳立てた呱呱の声
涙腺も財布もゆるむ子のたより
巡礼の気分で見てる彼岸花

堺市　柿花和夫

子とビール飲んでる時はパラダイス
どうせなら共に百まで手をつなぐ
ひっそりと雨につゆ草咲いてます
カルチャーで元気なパワーもろてます
酒飲んでいいかと夫低姿勢

堺市　齋藤さくら

パリパリと食べるサラダに今日の幸
そうっと開けるうしろ暗さのドアの音
ふと涙やさしい嘘を聞いている
割り切れぬ心を急かす風の音
満月が夜の墨絵を光らせる

堺市　宮本かりん

四條畷市　吉岡　修

家族って三色あれば描けそう
薄情なことしないだろ介護法
お客様などと言われてらしくする
五年間干されてましたチャンスです
誘ったらほんとに来るという誤算

吹田市　穴吹尚士

リハビリに妻とワルツを踏んでみる
気取っても所詮は中の下の暮らし
年金も預金も妻が取り仕切る
コンビニとメールで生きているヤング
事あらば反骨の血が騒ぎ出す

吹田市　太田　昭

道草を食う暇もない老いの径
黒日傘ただ黙々と月曜日
銃を捨て水鉄砲に持ち替える
惚け二人仲睦まじく同居する
饒舌家舌のスペアを持ち歩く

吹田市　早川棲世

パリの夜へ出るのがこわいユーロ高（旅の思索その十三）
パリ場末バーテンもったいない美男
美術館掠奪の史を誇るよう
長城延々この国負かせるわけがない
訪中を原罪意識の中で終え

吹田市　木下敏子

緩やかな一日でした土踏まず
好きだから諦めないで墨を磨る
転ばずに手の鳴る方へついてゆく
五十年演歌のような夫婦舟
使い捨てそんな時代はとうに過ぎ

吹田市　大谷篤子

奇麗すぎ食べるに惜しい秋の菓子
駄菓子屋でつきぬ想い出選んでる
糠漬の味を守った母恋し
指十本広げて守るものがある
咳込んで真夜中の月眺めてる

吹田市　瀬戸まさよ

エステする九十歳の心意気
算数で若さを計るとは笑止
心ブラの辛さ老舗は泣いている
実らない寅さんの恋だから好き
おビールと言う彼が嫌さようなら

吹田市　須磨活恵

山肌に抱かれて熟れる烏瓜
有頂天になる人間の嫌な癖
古希の坂そろそろ仮面外さねば
お祈りが仰山おますあかね空
小芋でも煮っころがそうかいわし雲

増税に何故か好かれるお年寄
女房を探しています特売場
女房に立ち読みされた日記帳
欠点も隠し遂せて美人です
この顔に見覚えないか迷い猫

吹田市　野下之男

戯れのジョークに本音しのばせる
待つ人のない故郷で侘び住居
知りつつも無駄な抵抗してしまう
叫んでも呼んでも誰もこない夢
見逃したサイン今頃悔いている

高石市　浅野房子

土の香へ妻と一緒に汗を撒き
人生は無駄ムラ無理も楽しんで
悟ったか老いたか妻が怒らない
何時か死ぬ当てにしないがほんとだろ
怖いのは怒る妻より低い腰

高槻市　富田美義

ブランドをはりこんだけど肩が凝る
改革は増税とのこと知らなんだ
どう工夫してもどうにもならぬ髪
社長には謝り上手な人が良い
八種類飲んで効くのかこの薬

高槻市　西谷治三郎

洗っても消えぬ古傷背に残る
疑った心盥で揉み洗う
魂を洗いに遍路旅に出る
財布からっぽ両手お土産エアポート
認知症の父が嫌がる紙おむつ

高槻市　瀧本きよし

有頂天になった男に見えぬ罠
嘘少し話に混ぜて和ませる
追伸の小さな文字が胸に沁み
かち割りが溶けて延長戦続く
夏が来てめくる暦がやせてくる

高槻市　佐甲昭二

酷暑なり右脳にアイス当ててやろ
バースデーも白髪に薬増えて秋
専用車アレコレ塗って憚らず
曖昧な返事で時を稼いでる
虹色の子等の風船空を翔け

高槻市　執行稲子

缶ビール逆さに振って雫切る
一切れの西瓜を睨み合う二人
変り身の早さ手を換え品を換え
怖ごわと血圧計を覗く日々
明後日の方を向いてる好奇心

高槻市　左右田泰雄

高槻市　生田義一

久方の朗報国中沸き返る
候補皆二世三世お坊っちゃま
湯の宿に親子三代揃う幸
宿の窓映る大山富士のよう
家族旅砂丘バックにはいチーズ

高槻市　傍島克治

わが老いに合わせて老いる影法師
気が知れぬ夫が嫁の肩をもつ
鴨川の水での産湯忘れられ
静けさに落着きなくす都会っ子
父の背に領土拡げる湿布薬

高槻市　乙倉武史

悠ちゃんの名前氾濫する予感
芸術だ文化だ秋は花盛り
脳の錆落とす句会を梯子する
お隣に救急車来た夜の動悸
酒飲んで乗れば自縛の縄が待つ

高槻市　杉本義昭

秋風はお酒と人を恋しがり
秋風に乗って一つの恋が来る
人恋し秋がのれんをくぐらせる
乾パンを見るたび戦後思い出す
イラクの児カメラに写る目が光る

高槻市　大崎侑子

華奢な友力仕事もやってのけ
弱腰の日本世界に見縊られ
陰日向なく勤めあげ賞もなし
ひと押しの力が足らず負けた恋
着く前に消えてしまった小火騒ぎ

高槻市　井上照子

孫が嫁く喜ぶことか考える
丘の家坂を覚悟で移り住む
同窓会八十路を歩く気をもらう
バッグにはまだ忘れないコンパクト
半世紀会えた喜び片想い

豊中市　岸田知香子

しみ込んだ境遇強い女となる
新宮を待たるる姉妹その笑顔
紀子様にあやかりたいと妊婦増え
少子化もこれでとどめて三人目
涼しさに蝉どこへやら虫の声

豊中市　安藤寿美子

蚊をたたく般若心経誦しながら
この写真私の遺影にええやんか
膀胱も直腸もカラ安眠す
人工骨頭出るよ私のお骨上げ
生きている証拠ころんで足も折り

原爆の昔を昔にはしない
税金に汗の臭いをつけておく
原節子似というけれど通じない
半月のドラマは実話甲子園
愛してるとはっきり言った記憶なし

豊中市　江見見清

電化製品無かった日から生きて来た
戦時下の暮しを孫は笑い出す
この先の遠さを神は教えない
米を研ぐ今日も生命のある証
生きる価値言い訳なんぞしたくない

豊中市　吉田あずき

この暑さ地球の悲鳴だと思う
聞きとない言いつつ耳がよって行く
我が都合人も都合でまとまらず
処世術むつかし過ぎるアホになろ
算術で一人世帯は事足りる

豊中市　山門タミ

目に見えぬ他力に今日も生かされる
恨めしい気持も分かる魚の目
甲高い声がけじめになる会議
一日を終えた証しを影に見る
同期会またもトイレで鉢合せ

豊中市　藤井則彦

万歩計エスカレーター使用せず
冷蔵庫酸いも甘いも同居する
花時計針ものんびり午後三時
心にもSMLのサイズあり
洗剤のCMほどの白い嘘

豊中市　水野黒兎

必ず儲かるの必ずは嘘だろう
防犯意識の稀薄反省しいられる
悪友のひとこと落ちる胸の底
勲章に見向きもしない雑魚の群れ
間の抜けた古時計からもらう愛

富田林市　片岡智恵子

青春へ賭けた蹉跌がほろ苦い
口惜しさに左遷の椅子が軋みだす
出張へ夜の穴場を聞きまわる
脂汗天下りには分かるまい
サイフォンの香りに負けて床を抜け

富田林市　稲川惠勇

ピリオドの先に転がる僕の首
夢一つ見果てぬままに黄昏れる
慰めてくれるお酒に礼を言う
欲みんな捨てた素顔が美しい
人形になって旧家の嫁になる

富田林市　大橋鐘造

寝屋川市　坂上髙栄

甲子園若さの華の満開だ
靖国へ若者どっと押し寄せる
身を愛す家族を愛す国愛す
蝉時雨短き命地に晒す
思い出は心砕いた片思い

寝屋川市　太田とし子

酒盛りの賑わいひとりウーロン茶
嫁姑仲をとりもつめし茶碗
大正の婆ちゃんマンゴー食べてはる
稔り田の案山子意気込む顔になる
漂うて藁を掴んで黄昏れる

寝屋川市　冨山ルイ子

たくさんの思い出胸にありがとう
ボロボロの体酷使のつけがくる
膝や腕痛い痛いと悲鳴あげ
戦中戦後食べたことない芋の蔓
命より大事な人が出来ました

寝屋川市　森茜

無花果が男世帯に熟れたまま
来し方のご縁つくづく梅と紫蘇
箱入りのペットで吠えること知らず
くもの巣に夕日光っている宴
黄昏の絵に溶けている影法師

寝屋川市　籠島恵子

コスモスや初秋のころに咲くように
挨拶をしそびれているわだかまり
アナログからデジタルついていけようか
開き直り布団をしいて昼寝する
真剣なふりも出来ない影法師

寝屋川市　江口度

クーラーにタイマーかけて寝ることに
たまに見る時計きっちり合っていた
テレビさえあれば退屈などしない
子供より朝寝している老夫婦
入院と言われ保険の有難さ

寝屋川市　平松かすみ

鬼門などやはり避けたい風呂トイレ
若くなる鏡がほしい古希の坂
決断の時は娘が頼りです
地球儀に描く疎らな緑地帯
モチの木を植えて小鳥をよろこばせ

羽曳野市　安芸田泰子

父の忌を忘れさせない曼珠沙華
奥の手はかくしひとまず敗けておく
奔放に流れ女の浮き沈み
恥じらいを忘れた女が姦しい
試食して買う気なかったものを買う

羽曳野市　吉川寿美

立ち直るけじめをつけた句読点
正直に馬鹿がつくなとほめ殺し
阿呆になるコツも身につけ和を保つ
背伸びする空しさを知る足の裏
ライバルに腰の竹光みせられぬ

羽曳野市　徳山みつこ

夕ぐれの風が秋刀魚をのせてくる
爽やかな空気ともかくさあ助走
グレーゾーンやめ真っ白にしませんか
まなざしに蕾がポンとひーらいた
規制緩和から国中のネジゆるみ

羽曳野市　三好専平

半分はペットフードで占める店
あやまると水にながしてくれる国
好きですと舞妓に一度言わせたい
上下左右煩悩だらけ愚痴だらけ
ビフテキの試食の味のうまいこと

羽曳野市　酒井一壺

ライバルの笛の聞こえる距離に居る
生れつき意志薄弱の木偶の坊
意地っ張り始末の悪い口達者
シングルは気楽でいいと第三者
国境のない鳥たちにある自由

阪南市　森村美花

かけ足の秋に行事が天こ盛り
食欲の秋にストップ検査表
冷奴を湯豆腐にする秋の冷え
御無沙汰にペンを持たせる今日の雨
黄金色日本の米が食べられる

枚方市　伊達郁夫

太陽を飲み込むように欠伸する
良く耐えた夫婦茶碗が欠けている
伸ばす手で何んでも触れる独り部屋
少子化に腕白少し許される
満月をバケツに入れて持ち帰る

枚方市　二宮山久

夏ばてを今年も知らぬウォーキング
秋風が吹いてさわやか夫婦旅
秋まじか妻はねんいり化粧する
ふる里に帰ってみたい空の青
朝食がこんなにうまい妻の顔

枚方市　丹後屋肇

武運長久の文字懐かしい展示室
同窓会案内も来る村まつり
ふとん太鼓担ぐ地下足袋宮の入り
ゴキブリを追い詰めている厚化粧
歳聞けばもみじの指を二つ見せ

暑い夜の友ですミニの扇風機
モーツァルト一曲聴いてしまい事
梨葡萄いちぢく今日はどれ買おう
掃除機を慌ててとめて蜘蛛逃がす
ベランダに出て秋の蚊にねらわれる

枚方市　森本節子

柏手で明けてなむあみだで暮れる
乾杯へいちばん高くウーロン茶
生きざまの見本が集う老人会
熱下がり看護の妻とハイタッチ
肝臓をアジトに細胞癌ゲリラ

枚方市　宮川珠笑

誰が聞いてもよくわかるありがとう
正論に反対論が常にある
自分の意志で生年月日決められぬ
若い日はすぐに昨日になっていく
時計の針は現在だけを刻んでる

枚方市　寺川弘一

どたん場で妻はいつもの底力
ライバルを見ると余計に力みだす
力では敵わないから技みがく
河豚ちりへ死んでもいいと吐かすなり
煮凝りへちびちびすすむ一人酒

枚方市　安達忠央

冷房の適温違う妻と僕
クマゼミへ経をあげるか法師蝉
野沢菜がうまい山また山の旅
里に出るクマに責任ないのです
どんでん返しないまま終る苦い酒

枚方市　海老池洋

三人の娘等の会話に入りかね
頼りない私こんなに頼られる
本物の私が写るウインドウ
助っ人の子が来て元気出る夫
近かった駅がだんだん遠くなる

東大阪市　笠井欣子

面差しが母と似て来た鏡見る
万華鏡回せば動く未知の国
一日花ハイビスカスに別れつげ
庭の草バッタのために抜かずおく
指からめ母と遊んだ日の影絵

東大阪市　米田水昇

悪手だがどんでん返し期待する
通り抜けこんなもんかと走り抜け
惚れられていたとは知らず同窓会
心からすみませんとはよく言うよ
新生児何処をとっても柔らかい

東大阪市　西村哲夫

東大阪市　北村賢子

住めば都もはや浪花のオバタリアン
生きて来た証誇れるしわたるみ
たそがれて世間のぬくい風を知る
人生は細くて長い綱渡り
ほどほどのところで満足して生きる

東大阪市　佐々木満作

皇子生まれ名月までが祝ってる
惑星を外れ冥王かくれんぼ
ともかくも青いハンカチ買い求め
実技より口上可笑し曲芸師
昔日の面影はなし太鼓腹

東大阪市　中岡妙

忘れ物幾つしたやろ指を折る
生きてきた証手の筋顔の皺
朝顔が咲かないままに夏終る
来年にしたい事だけ数え上げ
充電の切れた携帯淋しすぎ

東大阪市　安永春

雑音に弱い女の病み上り
念力で狙った的は外さない
猪の親子街まで出稼ぎに
わたくしをそっと見送るお月様
図書館で見付けた本に癒される

東大阪市　谷口義

一病息災他の病気は探さない
四季報は大して役に立ってない
鏡とは話が通じなくなった
あの風はどこに行ったんだろう 秋
ホットケーキ焼く風がくる賑やかに

藤井寺市　鈴木いさお

頭から足の先まで浪華っ子
何をして過ごそか週休七日制
虚と実の狭間を生きて古稀の坂
ふかそうか焼こうか試し掘りの芋
大根の種蒔く背なへ笛太鼓

藤井寺市　楠昭子

札束を持ったら羽根が生えてくる
落した鍵が変なとこから見つかった
雨嵐止んで夫婦に温いお茶
どうせとも思うやっぱりとも思う
親王誕生世界の空気変り出す

藤井寺市　若松雅枝

だんじりの音にデジカメ走り出す
祭り好き父の遺影も微笑んで
家事手抜き妻いそいそとカルチャーへ
傘寿まだお出かけの服選っている
クラス会シングルばかり寄って来る

藤井寺市　中島志洋

相手次第鬼にもなれば仏にも
もうと未だ使い分けする年の功
心変わりしたとは知らぬネックレス
体力の衰え口でカバーする
直ぐそこにある幸せに気が付かず

藤井寺市　太田扶美代

打楽器が鳴ったら恋はもう終り
溢れ出る思いを描けば赤い色
汚れそうで君から少し離す愛
何をして下さったのかサービス料
偏屈と頑固は少し違います

藤井寺市　鴨谷瑠美子

パンの耳人は薄情にもなれる
夕茜ロマンチックな顔になり
ほっときはしないとわたし積み残し
もののはずみで殺し文句が出てしまい
記念樹と雨の上がった雲仰ぐ

藤井寺市　髙田美代子

明日やれることだのんびりしていよう
使用後の姿は見れたものでない
一途一途一途これ以外に無し
神様の瞬間芸に気が付かず
歌舞伎座の幕間に並ぶお手洗い

箕面市　出口セツ子

停電が都市の脆さをさらけ出す
母失格子を守れないことばかり
笑ってはいても血圧正直だ
意地悪をされると強くなってくる
心無にしたくて花をいけている

守口市　井上桂作

平和ボケ座して死ぬのもご免です
歯に衣着せぬ愚かな大人です
うす白髪指先だけは桜色
悔いのない人生なんて冗談を
贅沢はできぬ百超す血糖値

八尾市　吉村一風

かみしめて静かに旅の朝の酒
トゲのある話はみんな聞き流す
今日より明日へ元気落さぬ竹を踏む
世渡りのうまいお人と酒を酌む
ゆずられた席しばらくはちさく掛け

八尾市　山本宏至

グルメ旅朝昼晩の魚づけ
ママ荒れて姿を消した子供たち
おのろけを聞かせただけで茶も出さず
晩めしに毒が毎日欠かせない
遊んでる時は腰痛忘れてる

八尾市　長谷川　春　蘭

土間涼し祖母が居そうな台所
枝豆の笊に仲よしこよしかな
虫時雨ふと途切れしは君悼む
飼う自信なく鈴虫を貰い来ぬ
電話より手紙が好きで爽やかに

八尾市　髙　杉　千　歩

三合の米で四五日生きられる
ミリオネア脳が働く晩ご飯
間違いをそのまま運に任せよう
ポイントへのどあめ一つ予備にもち
謎々の答え本気で腹をたて

八尾市　村　上　ミツ子

勝ち馬に乗り大臣の椅子を呼ぶ
大根の安い日秋刀魚買うてくる
決心がゆらぐ悪魔のささやきに
毒舌の友を頼りにしています
一歩退いたらはるか向こうがみえてきた

八尾市　宮　﨑　シマ子

金でくれたら好きな服買えるのに
悟り切った顔で昼寝の猫と僕
負け嫌いの友であの世へ先に逝た
卓袱台が机であった時育ち
国訛りのコクをふくんでいる地酒

八尾市　生　嶋　ますみ

コスモスの海で気紛れほぐされる
ダイエット御座候を半分に
眠ってる衝動買いに責められる
コツコツと働く蟻で競わない
赤トンボ山から秋を告げにきた

大阪府　籾　山　隆　盛

紅葉の寺で仏縁深くする
惑星を人がいじくり回してる
松茸が申し訳ほど土瓶むし
宿坊に酔った羅漢は見当らず
占い師あたまごなしに弓を引く

大阪府　桑　田　ゆきの

アメリカの牛肉またもキナ臭い
少年法壁が厚くて触れられず
豚丼に慣れて牛肉拒む舌
よく笑う娘といて痛さ忘れてる
露草の花でハンカチ染めた母

大阪府　野　田　栄　呼

温室が育てる季節ない野菜
青空に出番今かとコンバイン
健やかに老いるソロバンはじいてる
生ゴミを焼却場へ出す農家
兼農家農業機械に食われてる

週刊誌噂とホント混ぜて売る
本心で話せる友の居て嬉し
平凡な幸せであれ娘の挙式
ここに来て産めよ殖やせと言う勝手
今さらに道徳欠如くにの憂

大阪府　前田ゆい

ライバルに煽てられやる気湧いてくる
リハーサルで見せた笑顔が出てこない
ユーモアが部屋の空気を入れかえる
同居して愚痴も小言もしまい込む
あいまいな返事へ妻の檄が飛ぶ

大阪府　澤田和重

そば好きに待つことなどはいとわない
今さらに九ちゃん味のあった歌手
冥王星あなたのことは忘れない
満月を並んで見てる君と僕
無為の日はオールディーズを聞きながら

神戸市　田中章子

近すぎて大きな愛に気付かない
幸せになる予言なら信じます
空も見ず風も感じずメール打つ
感性も情緒もパソコン奪いゆく
犬だってエサが欲しけりゃ芝居する

神戸市　木村貴代子

恥ずかしながらまたまた探し物をする
お彼岸を忘れていない曼珠沙華
新米を送ったとうれしい国訛り
萩芒小さな庭へも秋が来た
プランターで出来たとピーマン分けて食べ

神戸市　山口美穂

還暦のガードで古希が登山する
八合目息調えて仲間待つ
サングラス外しジジイの顔になる
入れ歯完了料理番組梯子する
コウノトリ役目を終えて皇居去る

神戸市　伊勢田毅

脇役に徹した顔の深い皺
真っ直ぐな道しか知らぬ父の靴
愚痴こぼす母をさらりと躱す父
農の手に手抜き誤魔化し妥協なし
ちょっとだけ太めの人にある魅力

神戸市　山口光久

子の前で達磨になっている親父
失敗の中に真実見つけ出す
立ち塞がる壁のむこうに何がある
明日がない今日も真剣勝負する
寛容さ持って大事な人と住む

神戸市　山田婦美子

相生市　中塚礎石

ストレスを飲み込む器小さすぎ
友達はたった三人指で足る
先生のしっぺ返しは通信簿
赤とんぼ一番すきな藁帽子
ちびた靴履いて楢山まで歩く

芦屋市　黒田能子

今にして母の古さが懐かしい
ギーギーと思案の椅子が鳴りつづく
グルメ旅ふたりで太り旅終る
問いかけた風の言葉を聞きもらす
楽しくてキャッチボールが止められぬ

尼崎市　林昭三

付き添いはどちら通院寄り添って
肝腎なところが緩いお人よし
バス停にふと火の元と鍵のこと
ラーメン村に元祖と名乗る店二軒
木曜日午後休診の医院まえ

尼崎市　軸丸勝巳

一年をかけて一夜で散る花火
看板はいらぬ焼き立てパン匂う
値上げせぬソバ屋の麺が泳いでる
もったいない箸は崩せぬ京料理
町まちに笑顔いただくご誕生

尼崎市　長浜美籠

脳裏から消えない星の降る故郷
美観地区風しなやかに通り抜け
平凡とスリル味わう現在地
一日の重さ軽さにある迷い
飾らないメールに喝を入れられる

尼崎市　松下比ろ志

幸せなんて探すと見えぬものである
底辺を下げると暮らし楽になる
相手見て声のトーンを考える
花も木も四季それぞれの衣替え
血圧も祭り囃子に煽られる

尼崎市　田辺鹿太

花道はないが父権の座を降りる
影までが水を欲しがる炎天下
出し抜けはしません僕も男です
町内に目立ちたがりが一人居る
うっかりもがっかりもして老いてゆく

尼崎市　春城武庫坊

巡る八月中支終戦の日を懐古
芋南瓜好きなビールがはずむ味
生命線いつも信じて眺めてる
茄子胡瓜夏に欠かせぬ日本人
神不在あっちこっちで自爆テロ

尼崎市　春城年代

手の中に小さな秋が蹲る
木の肌をつるりと見せてさるすべり
宇治川がプール代りの女学校
ながいふん連れて金魚の立泳ぎ
風鈴も夏の終りの音で鳴る

伊丹市　山崎君子

百歳がゼロ歳を抱くやさしい目
秋茗荷無農薬だよ文そえて
遠花火ビルの谷間に夏終る
花の名の和菓子ずらりと秋に入る
夏風邪のなおらぬままに今日白露

川西市　西内朋月

車庫入りの電車で肩を叩かれる
幻になってしまった二人旅
気のおけぬ男同士の露天風呂
焼香の順序でもめるお金持
小走りに苦手な女から逃げる

川西市　米原雪子

親の夢ふくらませてる子の育ち
遊んでる気分にさせて教え込む
お見合いは淑女らしくと念押され
無洗米無視していたが便利だナ
店頭のブランド米に迷う秋

三田市　石原歳子

お互いに気ままに暮らす一つ屋根
返信に一言好きと書いて出す
説明書読まずに使う電気器具
積ん読の本を読んでる秋の夜
秋の日に惑星の減るニュース聞く

三田市　久保田千代

海外に出ると日の丸好きになる
信じてた人から聞いた寒い嘘
言い勝って優越感と孤独感
洋々と社歌歌ってたその昔
一計が浮かんだらしい箸止まる

三田市　北野哲男

これ食べに帰って来たと喜ばす
屋台ではしっかり反対論をぶつ
弥陀の声もう七人も敵がない
包装で正体変る訳でなし
ご近所とくもりガラスのおつき合い

三田市　堀正和

イケメンじゃないから笑顔忘れない
よく喋る男が掘っている墓穴
ツーアウト満塁なのに電話鳴る
二番手にいたから出来たゴールイン
ちょっぴりと脚色をした後日談

西宮市　片山　忠

残高が減ると意固地になる老後
よく笑う人から貰う処方箋
拝金を子等が身につけUターン
威勢よくおならもできる夫と居る
えげつない話になると目が冴える

西宮市　秋元てる

風通しよい有難さ隣とも
間合長いが故郷の花火はそれでいい
ポッポッと白い灯のよな花みょうが
猫の手よりましと草取り吾が出番
目に見える借りがないのでしたり顔

西宮市　菊池トミヱ

占師ズバリ言うわと予言する
安全と信じたプール子供の死
水に流すことが苦手で生きにくい
禅僧が頭で砕く滝の水
夏ばての喉にやさしい冷やっこ

西宮市　井上松煙

散歩にも近道をゆく癖がでる
無口だがたまには笑顔作ります
出世頭逝き長生きは雑魚の意地
ひまわりに元気を出せと励まされ
鰯鯖妻の気合で旨くなる

西宮市　坪井孝一

絆の字親子で解く堅結び
我慢の道父の歩いた土ふまず
頑固でも妻子愛する夫である
武骨な父手品に種を入れ忘れ
妻の球カーブばかりの憎らしさ

西宮市　亀岡哲子

地区講座酷暑に揃う頭数
勝ち組の幸せごっこクラス会
工夫する種は尽きない歳重ね
ご近所の気くばりもあり一人生き
返信に秋の便りの一句あり

西宮市　緒方美津子

定年で妻の翼が気にかかり
だんまりも三日となれば苦行なり
新涼や花が活けたくなりました
いかり肩とんぼも蝶も止まれない
女ですうぬぼれ鏡はなせない

西宮市　牧渕富喜子

歩が止まる久方ぶりの法師蝉
散水へ子どもかまきり鎌を上げ
黒雲の期待はずれの通り雨
洪水マップすっぽり入る現在地
目のせいにしてメカからは遠くいる

西宮市　西口いわゑ

すぐそばに咲いているのに気付かない
はっきりとノーと言えずに流される
熱帯魚ひらひら人間なぐさめる
たわむれの予言に胸をふくらます
一言のジョークその場を晴にする

西宮市　門谷たず子

やっぱりと納得してる癌告知
酔芙蓉明日があるからあきらめぬ
ネパールの孫に会うまで米を研ぐ
雨季乾季花は忘れず咲いてくれ
弱音など吐かず運命線をゆく

姫路市　古川奮水

団欒に犬も一座の数になる
五時からのテラスに揃う大ジョッキ
松茸の産地気にせず鍋つつく
廃屋の庭に名月明るすぎ
カメラ好き襖を引くと現像場

兵庫県　大谷幸次郎

鏡では理容師みんな左利き
懸命一途つくつく法師秋を呼ぶ
さらさらと波打つ稲穂黄金色
念入りな合せ鏡の中に居る
腹八分言葉七分で抑えたい

奈良市　米田恭昌

一晩泊りだけど嬉しい子の招き
不釣合と言われ続けて五十年
みーつけた姑の意外な少女趣味
逆縁の心が痛む夏が逝く
イッツ ア ボーイ紀子様出産笑顔満ち

奈良市　天正千梢

傷うずくたしかに僕は生きている
小さなしあわせトイレに花を入れ
ありがたい目ざめ手足がよく動き
空白を埋めるか波は打ち返す
加太の海うまい酸素に深呼吸

生駒市　飛永ふりこ

この先は無口を通す保身術
親切の隙間にあった落し穴
ケンカしてステーキをやめ秋刀魚焼く
口に出すことが出来れば悩みなぞ
おっとっとその手に乗らぬ喧嘩腰

香芝市　大内朝子

特価日へお隣さんも秋刀魚焼く
はらはらと人間ドックの結果待つ
幾山河越えて来たのにまた山だ
さめざめと泣いて心の大掃除
百均で物欲満たすショッピング

橿原市　安土理恵

造りものの愛などとうに捨てました
金太郎飴だんだん歪んできたあなた
やわらかい瞳をして老いはしのび寄る
大根洗うわたしもこんなもんやろか
魂と諍い眠れぬ夜になる

橿原市　居谷真理子

機を見るに敏とコウモリ褒められる
苦笑いできない雑な目鼻立ち
親よりも手足の長い子のお古
才媛が孫の話をしてあきず
代代の墓と刻んでダムの底

大和郡山市　坊農柳弘

コスモスの誘いにひとり萩の寺
妻ひとり年金暮らしのパートナー
褒め言葉単細胞を手なずける
エピローグせめて月見の差し向い
懐の深い親父にある度量

奈良県　渡辺富子

月下美人一夜の恋に溺れんか
行間から恋しい吐息聞こえます
末席から核心を突く石礫
こっそりと妻の抱いてる不発弾
不機嫌な妻へたこ焼買うてくる

和歌山市　福本英子

落ちこぼれではありません冥王星
台風の進路にいつも脅される
頃合いの台風雨を連れてきて
暗いニュースをすぱっと切った王子さま
子供でも飲んだら乗るなと吠えている

和歌山市　川上大輪

生きているうちに贅沢しておこう
座禅組んでしばらく時計止めてみる
音色が時どき変わる二枚舌
鉛筆の転がる先に僕の運
素直さが足りない喉がよく乾く

和歌山市　木本朱夏

アッチャンと呼べば必死に振る尻尾（愛猫を見送る）
今生を惜しみ虚ろな目がすがる
仔猫送るいまわの花は百日紅
空蟬とお香を添えて送り出す
十二年遊んでくれてありがとう

和歌山市　喜田准一

腹割った話に風も凪いでくる
機が熟し探り合ってる妥協点
強がっているから弱さ透けて見え
もうあかんアカンと言うてのし上がる
目を凝らし読唇すればありがとう

和歌山市　田中みね

またゴロリわたし夏バテにて候
元気ない友を何とかしなければ
ニュース速報口に泡ため告げに来る
おへその位置ずれて冗句に会う電話
怨念が根雪となってこりゃいかん

和歌山市　古久保和子

台風情報まずは鉢植から避難
市民課に抜てきされた聞き上手
街灯の下で割り勘する財布
マンションニョキニョキ稲刈りは真っ盛り
ああしんど　どこかで空気漏れている

和歌山市　松原寿子

醒めた瞳でわたしのさだめ見直そう
ドクターのひとこと迷い癒される
頑固だがなさけの深い人である
綻びを母の笑顔が包み込む
信頼の壁が今にも崩れそう

和歌山市　楠見章子

せせらぎのリズムに乗ってくる歩幅
十指みな動いて欲を追っかける
老骨に鞭はやっぱり無理が出る
気楽だがやはりひとりの夜は寒い
アルコールわたしの脳の潤滑油

和歌山市　武本碧

太陽をたっぷり奪うゴッホの黄
生き上手二足のわらじ履きこなす
親の背をしっかり映すおままごと
自己主張せずひっそりとかすみ草
夕立が晴れたら挑む山がある

和歌山市　玉置当代

受賞したとたん階段踏み外す
嬉しい日少し濃い目に紅を差す
欠き氷舌もつれだす暑気払い
道草をする者もなく蟻の列
リモコンの所為にしている皮下脂肪

和歌山市　山口三千子

気紛れな風が運んだ茶番劇
天秤に掛けるに薹が立ちすぎる
終止符を打とうか秋の絵の中で
自画像に明るい彩を足してみる
輪廻転生いつかは花の土になる

和歌山市　上地登美代

登下校見守る愛の目が光る
父さんを越す子になれと送る駅
十年日記まだ書けそうで買ってみる
台風をうまく躱して共白髪
午前三時エンジンかかる小商い

和歌山市　宮本三喜夫

余りにもヒヤリハッとの事故多い
プールあるも安全の不備恐れ入る
議会無視身からでたさび悔いてます
大臣も解散間ぎわ外遊す
若者がマナー守らぬ事故起す

和歌山市　細川稚代

こともなく二百十日の朝が明け
不調風とばしてほしい秋の季よ
秋の夜はムード歌謡に酔いしれる
市政決行ぬくい方言消さぬよう
仏にも神にも会える行者道

海南市　三宅保州

アウトとはわかっていても滑り込む
同じなら直球投げて打たれたい
穴からの距離を計算尽くの蟹
都会の真ん中で人目を避けてます
お茶漬けはないのでしょうかフルコース

海南市　堂上泰女

小宇宙揺らして孫が駆けてゆく
フライングものともしない現代っ子
寅さんが叫んでそうな秋の市
虫の音が集く残暑はもう少し
竜胆も白百合も活け待つあなた

鳥取市　山宮愛恵

置き場所を決めているのに其処にない
大切なものほどいつも見失う
礼と節昔話にしてきかす
貧乏な耳がおどろく保釈金
老いるほど弔費ばかりがかさみだす

鳥取市　下田茂登子

外観で人の品格きめる癖
八十路坂切札一つまだ隠す
九十の叔母がよちよち逢いにきた
焼くほどの金があるのに何故隠す
悪口を楽しんでいる鬼女である

鳥取市　永原昌鼓

大手術にわか信者が経唱え（夫心臓手術）
ありがとう命拾いの手術終え
幾本もの管につながれ夫眠る
麻酔から覚めた夫のいとおしさ
大丈夫医者の言葉に救われる

鳥取市　平尾菜美

ぶつかったボールにもらうこの元気
しょんぼりの神をみんなと祭り上げ
車座の笑顔に引かれ仲間入り
血や肉になるまで汗を紡いでる
私欲ない貴方火渡りお上手ね

鳥取市　冨山　檳榔樹

地球力命育むエネルギー
秋風に落葉しぐれのセレナード
前向きに生きる考え老い日和
時々は喧嘩刺激の老春譜
金婚時怪しみもせず妬きもせず

鳥取市　春木　圭一郎

だめもとで動けば勇気わいてくる
私も言われる通りしていない
悩んだら見知らぬ町を散歩する
どうしょうもない日酒飲み寝てしまう
何事もプラス思考で考える

鳥取市　録沢　風花

道連れにファイトを貰いバスに乗る
鈴虫の声が恋しい熱帯夜
雨よ降れ畑の野菜熱中症
少年の心が愛に飢えている
ひと月振りの雨が大地を喜ばす

鳥取市　山本　益子

地産地消岩ガキ食べりゃ元気付く
マル秘書く暦の余白スリルあり
太鼓打つ祭主の手先舞う如く
オレオレのあやつり言葉テープ取る
頂点を目指す精進おこたらぬ

鳥取市　土橋　はるお

足湯してラーメン出前してもらう
生まれつき目付きが悪いのも運命
玄関のベルが風雲急告げる
年金を浮かれて歩くほどくれぬ
マネキンにうっかり触り叱られる

鳥取市　土橋　睦子

趣味多忙毎日ペダル踏んでゆく
声たてて笑った頃の夢を見る
息継ぎの下手な蛙を飼っている
気疲れにちょっと弱音を吐きすぎる
欲の皮張って引き算には弱い

鳥取市　加藤　茶人

二番ならそう敵はない知恵袋
裏切らぬ金は持っとけ持っとけよ
ダイエット女はダイヤより光る
鈍感な方が時には事丸め
出る杭を善人面の顔で打つ

鳥取市　杉本　孝男

へそくりを鬼に見られてうろたえる
うろたえて見せる演技も堂に入る
嘘つきの涙振り向く間に乾く
郵便受け素通りされた淋しい日
ほめてからしかしで叱る親の愛

鳥取市　田中憧子

主婦だから日に三回もシャワー浴
生きている証か病次々と
キレル子の心はきっと裂けている
早起きが自慢の母は超早寝
花の蜜あげたのに蜂刺しに来る

鳥取市　田村邦昭

欲という魔物にいつも負けている
カレーにも一味加え我が家流
調子いい歌に眠りが落ちつかぬ
いい夢を見ているのだろう笑ってる
明日がある心怠惰になってゆく

鳥取市　鈴木公弘

改装をして還暦の始発駅
枯れ山水まだまだ描く気ありません
もう一度アタックしたい山がある
出直しを恥だと思わないことだ
叩かれぬ程度にわたし主張する

鳥取市　林露杖

生垣を刈ってすっきり秋の風
相寄りて老いの会話に艶がない
長話相槌打てば終らない
掌に乗せて小さな蛇の息づかい
人が死ぬこの頃あまり無雑作に

鳥取市　西川和子

種まいて一雨待っている残暑
三兄弟そろい厨は大騒ぎ
焦るほど足がもつれてまた焦る
抱きしめてやっと笑顔を取り戻す
出不精の友の背中を押しに行く

鳥取市　福島庸二

欲しかった困った時の助け舟
十人で十色を放ち知恵しぼる
鈴虫の冴えた音色に奮い立つ
ときめきが行き来している我が心
かず数え苦境乗り切るがまんどき

鳥取市　福西茶子

悪ふざけ許すとうねり高くなる
父か母選べと子どもへの踏絵
愛着の庭木の枝葉切る猛暑
暑いのも寒いのもイヤ引き籠る
異変だな入道雲が顔見せぬ

鳥取市　徳田ひろこ

モナリザの笑みは外出用にする
運転をしながら歌うリハーサル
年金に聞こえていない労働歌
カメラアイ微笑む癖がついてくる
いつまでも謳っていたい相聞歌

鳥取市　垰　寛子

来た道は私の命譲れない
天皇って王様なのと孫娘
スーパーの味になじんだまま育ち
我が村の郵便さんはもう来ない
窓口で詫びるしかない局長さん

鳥取市　宮脇道子

友の老い鏡に映し襟正す
念じても叶わぬ糸が絡み付く
血液も疲労困憊焦ってる
青蛙ゴルフの球で目を覚ます
急速に過ぎた人生荷は重い

鳥取市　植田一京

私を今日もチラシが呼んでいる
気疲れの後のお酒が腹にしみ
まんまるい月に心を見透かされ
背のびして明るい景色見ていよう
触れるもの皆散りやすき秋の風

鳥取市　福田登美

重いもの持てなくなって老いを知る
体裁を何度も直すのし袋
正直に生きて小さい灯をともす
ふる里の追憶青いまま光る
秋風に濃い目のお茶がほしくなる

鳥取市　奥谷彩子

喜怒哀楽刻む父の背潮やける
春は母冬父想う日本海
紅葉旅彩を映して染まる影
趣味という句に今燃えるものがある
上を向き下に眼の無い議員の眼

鳥取市　中村金祥

ヨン様に飽きて王子を追っかける
更年期越えて人生やり直す
駐車違反恐れて街に空っ風
相槌をうってもらえる幸がある
宝くじ当たった後のペナルティー

鳥取市　西村黙光

小説家目指して炎えた青春譜
老人をけらけら笑う均等法
ペン先のお陰傘寿の峰踏破
傘寿機に運転免許離縁状
生きる限り角力取ります陶冶の詩

鳥取市　近藤佳子

傘寿たのしや人生四コマ目
八十年など束の間の大宇宙
宥めつつ一緒に泣いてくれた兄
臍ピアス死生観など如何です
コスモスに埋れ童女に還る旅

鳥取市　吉田弘子

ホルモン剤いのちの限り終の友
持ち歌は慶事の時と決めてある
国技館揃い踏みする多国籍
たっぷりの暇が覗いた入門書
痛みある改革もろに格差受け

鳥取市　夏目一粋

この世には神もいないの母は逝く
正直に話して心なごみだす
隙間からしみ込んでくる母の風
秋晴れに肩の荷おりる心地する
母の死に素直にありがとうと言う

鳥取市　岸本孝子

鼻唄は金のかからぬ常備薬
値打ちなどどうあろうとも家宝です
ナツメロが耳にすんなりなじみ出し
幸せは大地が踏める足二本
ＤＮＡ辿ると子供叱れない

鳥取市　岸本宏章

丹精を込めた花には笑みがある
飾らない笑顔も武器になってくる
僕の歌ママさんだけが聞いてくれ
居眠りのときも悪口なら聞こえ
考えておくと言うから駄目らしい

倉吉市　米田幸子

平凡なくらしにあきたホームレス
平凡な男に七味とうがらし
天国と地獄の此処が折り返し
厄介なお荷物なんて言わせない
車間距離守る夫婦で恙無い

倉吉市　松本よしえ

貝殻節哀調帯びて歌い継ぐ
遠花火音があとから従いて来る
懐が肥えて大きな顔をする
愛されて今やペットの肥りすぎ
ひっそりと恋猫怪我をして帰る

倉吉市　最上和枝

あれこれと百均コーナー買いもせず
ちょっと耳貸せと噂の種を撒く
島と島繋いで走る高速路
皇族の気品溢れる婦人帽
詫び言も水もたっぷり墓洗う

倉吉市　山本玲子

門前の蝉は読経に協和する
勿体な賞味期限に目をつむる
あき缶が風にからころ追われてる
茶断ちしてコカコーラ―を飲んでます
不都合か携帯電話切っている

倉吉市　牧野芳光

百貨店僕をあざけるものばかり
最低のものは揃えてあるホテル
鍬ダコが消えて寂しい手になった
人が居て灯りの消えぬ窓がある
森の形になるまで森の中にいる

倉吉市　猪川由美子

飢餓感が少々あってよい句出来
省エネをもっとしてよと地球泣く
モーツァルト牛や酒にも聴かせみる
カウントダウン男児予想で幕が開く
安倍安倍と群がる人よ哀れなり

倉吉市　山中康子

さじ投げたタバコをやめて飴とチョコ
いつの世もかかあ天下でご安泰
生前葬　飲み食い出来るときにする
どう推理されてもありのまま明かす
天井を仰いで眠るこの平和

米子市　青戸田鶴

親王を迎える朝の陽が光る
背をのばし今日の体操始めよう
オシムさん古武士のようでなつかしい
ハガキ届く熱い思いがふきあがる
一列に並んで彼岸花狂う

米子市　白根ふみ

ついに来た敬老会の招き状
通過点次の節目が追ってくる
黒揚羽百日紅をはなれない
返品の時は家内に頼んでる
神様を探しつづける豆の蔓

米子市　林瑞枝

鶴を折る貧しい気持和ませる
モーツァルトの曲に珈琲美容院
百本のブナ林の里百の天
緞帳が降りても母子道がある
さりげなくお医者のこぼす褒め言葉

米子市　門脇晶子

両の手に味方のもてる果報者
窓開けて世間の空気吸って見る
他人からもらったことば壺にため
結び目がとけてきたのか花が散る
再起する足に似合った靴探す

米子市　木村春枝

耳鳴りが今日の計画変えさせる
野仏に耳打ちしてた赤とんぼ
石けんの泡の向こうに子等の顔
美しく生きたい私の持ち時間
うつ飛ばす川柳という守り神

米子市　野坂なみ

回るたび視界広げる観覧車
嚢の中の居心地いかがカンガルー
棘のある言葉耳から胃にささる
停退のあとの芝居が宙に浮く
私の芝居あとでも欲しい赤い丸

鳥取県　山下節子

思い出を語る友来て活気づく
言い訳が下手です貝になりたいよ
さくら貝引き出しのすみまだピンク
百本の薔薇に言葉はいらないよ
差別などできぬおんなじ空の下

鳥取県　盛田夢路

孫という駅で乗下車くり返す
干涸びた脳をいたわる虫の声
名もない星でいいのゆっくり輝こう
二度とないチャンスの扉ノッキング
お日様の機嫌伺い布団干す

鳥取県　山本正光

ご出産男児万歳日本晴れ
コーヒーが美味い今日のスケジュール
香を焚き仏と対話小半時
限りある命へ無駄が多すぎる
次に取るのは長寿税かも知れぬ

鳥取県　佐伯やえ

散り際の美学教えてくれる花
よいことはみな子どもらのせいにする
かなわない理屈だまって聞いておく
控えめな方の言葉に光るもの
夏のいじめものともせずに野菊咲く

鳥取県　深田倶久

今一度顧みてみる八十年
物忘れ歳のせいでは済まされぬ
この日照り河童の皿も水不足
うましこの国ハンカチ王子親王さま
クールビズ終り上衣はモカ色に

鳥取県　竹信照彦

菜園も僕もカンカン照りに負け
本堂はさすがに涼し盆法事
長月の雨に畑が活気付く
真夏日がいきなり十度落ちて秋
サロンパス畑にらんで腰に貼る

鳥取県　太田幸枝

ミサイルの一発地球大さわぎ
年金で財布の口もかたくなり
長生きはいやと言いつつ黒酢飲む
老いらくのそれほど一途になれぬ恋
ときどきはお酒で傷を洗ってる

鳥取県　石谷　美恵子

川底のまあるい石よ旅の距離
味方にはつい甘くなるペナルティー
肉ぶとん残暑の中でもて余す
熱心な信者が狂気じみてくる
腰低く何を企む恐いひと

鳥取県　谷口　次男

日本は企業戦士が戦死する
婆さんのちょっとが長い立話
誰を見て監視カメラは何を撮る
いいお湯だみんな揃ってサルの顔
イメトレも入れて楽しい散歩です

松江市　銭山　昌枝

斜めから見ると人間隙だらけ
身に覚えないのに煙立っている
深酒をしては古疵懺悔する
金のあるうちは大事にしてくれる
黄昏れて波長の合わぬまま妥協

松江市　安食　友子

気晴らしと虫除け横に見る星座
負けん気の闘士は何処に隠れんぼ
醍醐味は眼下見下ろす睥睨だ
水色のハンカチ野球でも流行る
おいたでも待ち兼ねてますおちび様

松江市　小川　注湖

百貨店エスカレーター休まない
ギャル神輿色香いっぱい撒いて行く
輸入品僕もペットも食べてます
恋してるそれが顔にも出てる二女
共働き少子化社会つくってる

松江市　佐野木　みえ

運勢欄思いあぐねて石をける
とうもろこしかじりいい案考える
ごきぶりのように夜半に水を飲む
救急車遠くに聞いてビール飲む
絵手紙展大作前に立ちつくす

松江市　三島　淞丘

瘡蓋を剥がし我が身をさらけ出す
帰ろうかちょっと寄ろうか縄のれん
サンマ焼く臭いの染みた妻の髪
思春期をそっと見守る親心
同じ世に愛される虫憎い虫

松江市　松本　知恵子

百年を立ってる杉の黙秘権
風は秋雨は斜めのもの思い
スマートに見せる斜めのハイポーズ
じいちゃんの小玉すいかを食べた夏
うっかりで疲れ度数を知らされる

耳打ちの話を風が膨らます
笹百合が私の孤高をたしなめる
無防備な脚庇い合うギャル神輿
遠花火自棄に追慕が深くなる
娘の文がかしこで結ぶ苦笑い

出雲市　園山　多賀子

そろそろに酒とつき合う季に入る
根っからの酒好き悪女かも知れぬ
ひとりのむ酒にまぐろを買ってくる
いいじゃないたまには気分変えてのむ
一合の酒でこんなにいい気分

出雲市　吉岡　きみえ

朝が来る夕べの影を引きずって
生まれてからずっと斜面に立っている
泣き笑いそんな人生捨てられず
指と指固い約束だとしても
加茂茄子のたった一つを持て余す

出雲市　城多　喜

一生にあと何回ぞ八一五
靖国に祀られた神どちら向く
蝉の声耳に納めて孫帰る
原爆も敗戦も季語そんな国
夏帽子黒だ白だとゆずらない

出雲市　森　茂美

もつれ糸じっくり老母の膝でとく
徳利がめでたい話酌ぎこぼす
総入歯ふっくら女の薄化粧
満月を仰ぐ湖畔の灯に宿る
晩じまして日暮れを戻る老母の声

出雲市　小白金　房子

哲学の臭いせめよる大花火
子の御輿あしたを信じあの威勢
くよくよを捨てて七つの洋向かう
しっかりと背骨のばして周りみる
八十路でも好んでテスト受けてみる

出雲市　富田　蘭水

選ばれて西瓜抱かれて店を出る
あと一人遅刻乾杯待たされる
脚色をされた噂がせめてくる
子のくれた汗の匂いのするお札
若い樹が歪になってゆく不安

出雲市　岸　桂子

晩秋の愛はひたひたと寄せる
せめて一日私を先に歩ませて
突然に立方体の謎が解け
何時でも私上がってしまうシーソーゲーム
ひそやかに進む女の曲り角

出雲市　石倉　芙佐子

出雲市　持田多輝子

すき腹に何よりうまいにぎりめし
オレオレに見透かされてるお人好し
父祖三代山の手入れを語りつぐ
野仏も立退きとなる高速路
我が胸の魔性仏性向かいあう

出雲市　小豆沢歌子

五本の鉛筆平等には減らぬ
ころころと弾んだ毬を見失う
始めたら背中を押してくれる風
立ち直る私を急かす秋の風
今日の日はいい日だったと眼を閉じる

出雲市　小玉満江

腹減って食べるたこ焼ああうまい
頂上に立って万歳するカラス
つらい事忘れビールをもう一杯
お金にはならぬ仕事がまだ続く
降る雨は橋をななめに越えて行く

出雲市　多久和敬子

三面鏡覗き自分を確かめる
寝て起きて日々平凡に感謝する
酔いまわりちょっぴり本音しゃべり出す
おっとりの私に似合う花が咲き
子には子の孫には孫の好きな色

出雲市　伊藤玲子

足早なお金なかなか追い付けぬ
お金には目がある追えば逃げていく
ストレスは笑い飛ばして元気です
嘘つけぬ鼻の頭が汗をかく
頬ずりの髭の痛さを待っている

雲南市　毛利幸

堰切って胸のヘドロを吐いている
過疎の町花火うつろに天を突く
むしむしと肌にじんわり汗が浮く
後一つ心の着衣脱げ切れず
保護色の模様で生きて今がある

島根県　伊藤寿美

ゲルニカの絵もちひろの絵にもある戦火
残された者の悲しみ雲を追う
亡夫に似てきた義弟を見舞う癌病棟
秋の恋ベートーベンよりショパン聞く
紗の帯に二十歳の頃が眠ってる

岡山市　井上柳五郎

無為徒食起きて寝たふり老いわびし
ヒトがヒト殺す星の名地球です
見ていてもドラマ納得せぬテレビ
好転の神頼みだが裏目出る
通院も欠かさずできる有難さ

倉敷市　撰　喜　子

目分量計量スプーンいらぬ母
愚痴言えば仲よくなれる縄のれん
侘住い豆に追われた鬼が来る
境内に遊ぶ子もなく蝉時雨
欠けたとこ補いあっていい夫婦

真庭市　国　米　きくゑ

繰り言を全部おさめる広い胸
忘れてたゆとりの心花がくれ
探られているとも知らず軽い口
歯科の椅子コチコチの肩疲れ出る
空全部キャンバスにして大花火

真庭市　福　嶋　智恵子

盆の客積もる話に刻忘れ
空元気憎まれ口を言うてみる
浅はかな智慧で吾が首締めている
アイディアに体力気力ついて来ず
宇宙には星の数ほど謎がある

美作市　小　林　妻　子

花火なら良いがテポドンでは困る
万歩計も五千歩を越す秋の風
稲刈りの済んだ田圃で秋祭り
大人ばかりの獅子笛が鳴る秋祭り
むさしまつりも地元に任す市制です

美作市　大石　あすなろ

産地直送母が直接持って来る
手持ちの仮面時代おくれがいとおしい
そのうちに自己責任の重さ知る
俎板で秋のコントを練り直す
実る日を信じて母は飴と鞭

美作市　山　本　玉　恵

わだかまりまだ解けぬのに夏去りぬ
この想い一途カンナの朱にも似て
外来語脳のスパイスとして学ぶ
いろはからまた出直そうペンの路
主役にはなれずじまいのモーニング

美作市　福　原　悦　子

巣立つ子は独立独歩空の青
大それた願い賽銭箱笑う
日本一母の音痴の子守歌
努力する汗が実った車椅子
古日記小さな風の跡がある

竹原市　森　井　菁　居

物言わぬ岩と二人っきりの夏
欲望を満たすと次が欲しくなる
雑魚ばかり釣れてもやはり海が好き
人間の業かも顔に出て困る
スランプが続きやけくそにもなるさ

竹原市　時広一路

休肝日どうする決めるのは私
花は花なりに自分の季を覚る
お疲れさまと鏡の顔に言ってあげ
病む妻に倣い七キロ痩せました
手を振ろか防犯カメラ僕に向く

竹原市　岩本笑子

コスモス畑で迷子になったのは私
歩くのは好きですあなたいなくとも
記念写真自然に笑うまで待とう
咲き急ぐまいぞ故郷の彼岸花
飲めぬとも毎年梅酒だけは漬け

竹原市　石原淑子

白萩のこぼれて庭の風清し
残り火を大事に挑戦続けます
仏になりたいと私の魂
このあたりお札はさんだはずなのに
喧喧諤諤平行線のまま

美祢市　安平次弘道

ほめ殺しになれば女は弱いのよ
信じてた神がわたしを置いてゆき
未練まだあって一言多過ぎる
愚を重ね世辞を重ねて注ぎこぼし
早過ぎる羽化へ芝居が追いつけぬ

宇部市　平田実男

鏡台とパントマイムをしてる妻
生まれたらオムツ死ぬ前にもオムツ
金バッジ国益二の次三の次
熱戦へまたまた水を差す誤審
偏差値は低いが会社では上司

川柳塔のぞみ 12月句会

日時　12月19日（火）13時～
場所　銀座区民館（地下鉄東銀座③出口）
宿題　「ラッキー」「閉める」「良心」各2句自由吟1句
欠席投句　12月16日必着　播本充子 宛
〒193－0832 八王子市散田町2－31－3

平成18年　尼崎ザ川柳

と　き　12月2日（土）　午後1時開場
ところ　尼崎市総合文化センター
7階第2会議室(阪神尼崎駅より立体遊歩道にて5分)
会　費　1000円
締　切　午後2時
挨　拶　尼崎川柳協会会長　長浜　美籠
宿題と選者　各題2句　席題なし
「ゆっくり」　松下比ろ志　選
「会　う」　西山春日子　選
「白　」　長島　敏子　選
「実　る」　前　たもつ　選
「乱れる」　谷垣　郁郎　選
「まさか」　長浜　美籠　選
お　話　木本　朱夏
懇親宴　2階レストラン
男性3000円　女性2000円
主　催　尼崎川柳協会
連絡先　尼崎川柳協会事務局
房安　志激　TEL.06-6422-6164

川柳塔の川柳讃歌㉓

木津川　計

惚れるとは惚けることだと気がついた

堀　正和

参りました。僕も「惚れる」と「惚ける」は別の字だとばっかり思っていましたから。

なるほどどちらも似た症状を呈するのです。ですから「恋は盲目」と言い、「恋は思案の外」とも申してきたのです。色恋に気をとられ夢うつつの状態を「惚れた腫れた」と揶揄してもきました。中には岡惚れする男もいて、「海で惚れて、岡惚れとはこれ如何に」「岡に居ても海（生み）の親というが如し」ですから可笑しいやらアホらしいやら。

シャボン玉浮かれた順に消えていく

都倉　求芽

むろんそんな人間になぞらえて求芽さんは軽佻浮薄をいましめたのです。

小沢昭一さんは劇団「しゃぼん玉座」を82年に結成されました。たった一人の劇団はたちまち消えてなくなるだろう、の洒落でもありましたが、野口雨情の「しゃぼん玉」は、「屋根までとんで、こわれて消えた」の後、「風、風、吹くな。しゃぼん玉、とばそ」と結ばれました。その思いに託して一座の旗揚げ、もう二十四年も消えずにとんでいます。

いつの日も予約不要で待つ貴方

鶴田　遠野

しかし、ご同輩、貴兄にいつでもいいわよ、と遠野さんは言うのではありませんぞ。たった一人の「貴方」に予約なんぞ要るものですかと媚び、夜毎待ち侘びているのです。そんな遠野さんを不憫というか、憎いあんちくしょうを羨ましいと思うか、浮いた話と無縁の僕はただ切歯するのみであります。悔やしまぎれに飲み屋で歌う「よさこい節」が「よさこい晩に来いと言わんすけれど、来てみりゃ真実来いじゃない」とはなんだあーっ！

風情ある言葉に感電してしまう

佐伯　やえ

仰る通りです。俳句歳時記の季語の風情にやはり感電するのです。十六夜、そぞろ寒、秋時雨、末枯、蘆刈、柚子、稲扱（いねこき）……。

外来語の訳語にも風情がありました。ハネムーンを山田美妙は「甘露月（はねむうん）」、川上眉山は「初契月（はつネーむーン）」、内田魯庵は「蜜月（ハネーむーン）」と綴り、ルビをふったのです。明治になったばかりの天皇の詔書は「朕今万機ヲ親裁シ、億兆ヲ綏撫（スイブ）ス」という具合でした。これは御免蒙ります。

まだともう使い分けして世を渡る

岸本　宏章

なるほどなあ、そんな世渡りがありましたか。「もう十日も経ってるじゃないかっ！」「申し訳ありません。まだ十日しか経ってないと……」という使い分けですか、宏章さん。

株式相場では「もうはまだなり、まだはもうなり」と言ったそうで、底値や高値の限度かと思うとまだ先があり、まだ変動するかと思うと限度だったり、予想は難しく、ものごとは思い通りにはいかないのです。そんな世の中をこの二語で泳ぐとはえらい人ですね。

また一軒潰れて町はモノクロに

木本　朱夏

木本夏になんの風情がありましょう。朱夏と名付けたところがこのひとの言語感覚、その文学性であります。

葡萄を食べ終わると「友達が一人も居なくなったような気がする」と言った詩人がいました。商店街もそうです。一軒潰れると並の人は「ここもか」と呟き、中の人は「寂しいなあ」と嘆き、上のひとは、「モノクロになった」と詠むのです。

（『上方芸能』誌代表）

自選集

老眼鏡要らぬ八十路の幸せを
海静かテトラポッドが陽に乾き
盆の地蔵新しよだれかけもらい
まだ一つ丸いポストの残る町
年金をどっと崩してくる政治

宮口笛生

勿体ないこころが過ぎた賞味期限
生活の乱れを見抜く皮下脂肪
一本のビールで脆く愚痴を吐く
寂聴の風が背を押す行きづまり
秋のドア開くと本当のこと言える

宮西弥生

手のひらの感情線にゆらぐ闇
座っても寝てても独り侘び住まい
秋風にけらけら笑う曼珠沙華
風鈴も黙秘権かよ酷暑だな
美しく生きる鳥花の夢を積む

森下愛論

我が窓に焦がれて死んだ蝉ひとつ
空蝉のことばを汲みとろうとする
蝉のむくろのあたりに咲いた彼岸ばな
この炎は蝉の転生だったのか
蝉は一途に鳴いて真っ赤な火になった

八木千代

プレゼントのネクタイ僕の首しめる
ペアルックあなたも喧嘩してますか
あったあった小躍りしてる小引き出し
両耳で聞くと噂もちぐはぐで
制服の父に気ままな時が無い

八十田洞庵

戦火です飢餓ですイラク地獄です
ライバルよ恋もいくさだ負けとれん
裏付けは流した汗の量だろう
一期一会の風と握手がしとうなり
善人を演じ切れずに逝く古稀よ

両川洋々

過去ばかり追って眠れぬ昨日今日
昔はの話がふえる老夫婦
スッパ抜く一言意外な波が立つ
手加減が意外の方へ向く不覚
一徹な僕に不満のつのる妻

阿萬萬的

感激が涙となった優勝旗
南無遍照私は観光遍路笠
だとしてもお金嫌いいるかしら
不足分国と言っても税である
恩讐の鑿洞門の岩削る

石川　侃流洞

あの日から枯山水に花を活け
紅葉を憎しと思う日の懺悔
私ですねたっぷり水を水中花
雑草の如く生きよと教えられ（嗚呼黒川紫香先生）
緞帳が静かに降りて旅支度

板尾　岳人

淋しさに風もカーテン揺らすのか
秋風に心のねじを巻き直す
思い出も怪しくなって秋深む
ひとりの椅子高からずまた低からず
あるがまま歩いた道にちさい花

奥田　みつ子

日記帳書くこともなく今日も暮れ
明日のため今日も離さぬ万歩計
閃いたアイディアそっと温める
健康寿命越えたい夢を持ち続け
耐えること身に付け人生観変わる

河井　庸佑

無位無冠風の当らぬ処で棲む
木枯しが空の財布に吹きつける
年金は下がりタバコはまた上がり
空晴れて今日絶好の紅葉狩
冬眠に備え風垣作ってる

木村　あきら

黒揚げ羽ひらりと淋しさを撒いた
白い帆は白く嵐の中にいる
間違い電話が二つ淋しいではないか
カウントダウンが私の中で始まった
天の声地の声ふわりふわりいる

小島　蘭幸

金運を掴みそこねた穴がある
蛇になる髪一本が川に浮く
作り笑いで疲れてしまう水中花
続編に息をつないだ炎の破片
さざ波に似ていた母は夢の中

小西　雄々

似合います鏡が返事してくれた
よく絞る先輩だったよく飲んだ
がまんした涙一粒だけきらり
ハンカチが足りぬ三十五度の汗
立て板に水さわやかな弁舌だ

小林　由多香

触角はまだおとろえぬかたつむり
白菜の芯に表裏はありませぬ
稲の穂が素直に垂れてゆく安堵
イーハトーブの森で師の樹を抱きしめる
ひまわりが平和を願う顔で咲く

斉藤　姦

九条が世界に大事だと分かる夏
全国の好意で鶴の句碑が建つ
ナガサキの宣言が出て夏終る
戦争を知らぬ人に知らせる平和展
夏風邪を引いてビールだけ通す喉

塩満　敏

窓もこころも水玉模様雨上がり
赤信号　充分注意して渡る
あらぬほう見詰め駄作をひねり出す
仰向いて平らになって眠りつく
全自動消化吸収排泄機

新家完司

美しい国より平和守る国
喜びの電話で声が弾んでる
同病の人との電話長くなる
設計のとおり五年で故障する
人生はなるようにしかなりません

田中正坊

生きていて地獄極楽よく判り
引き金は引くなとささやいた理性
汗の量ノルマがひとつ消えました
凭れあう命いとしいマグカップ
からみ合う義理が重たいのし袋

玉置重人

栄枯一代表札も褪せている
酒一合退院指導受けて秋
記事にまだこだわる気力持っている
退屈はしない余生の日記帳
よせばいいのにまた声を高くする

恒松町紅

雨雨雨太平洋が引受ける
わらべ唄老人ホームで生きていた
お盆には帰れぬ祭りには帰る
花咲いてごめんごめんと水をあげ
キュウリナス味噌汁老いの夏終る

遠山可住

愛されていないと認知症になる
雲の行方へ動いて働かず
紙よりも筆だ腕だと競い合う
死にに行く道理を推理して死なず
この道をまっすぐ迷うことはない

土橋　螢

大阪弁のぬくさを田辺聖子から
あひびきと書くと切ない恋になる
スローフード新聞読んでテレビ見て
エプロンをするとやさしさ取り戻す
仲のよい夫婦の店で買う野菜

西出楓楽

その邪宗格差社会のすきをつく
まずもって無念無想の寺社めぐり
宗教の人訪れるご飯どき
さい銭に公費の人もいるらしい
六曜を株式会社忘れかね

仁部四郎

弛緩剤飲んで夢から出て来ない
悔しさにキリキリと歯が浮いて来る
旅ひようひよう仏法僧も私も
自信過剰やはり深爪してしまう
夕日燦々生きとし生きる人の顔

波多野五楽庵

うっかりと茶あかをふいた九谷焼
宣伝でプラス生み出す缶ビール
ふるさとの名産がある地下売場
畳屋がマシンでふちを縫っている
二枚目は冗談言えぬ顔をもち

芳地裡村

ご挨拶

理事長　西出楓楽

十月八日の同人総会の承認を得て、理事長という大役を担わせていただくことになりました。

伝統ある川柳塔社の理事長としては、浅学菲才で力不足ですが、せいぱい務めさせていただく所存です。

執行役員である理事長の職務は、川柳塔社の運営をスムースに進めることです。先輩諸兄姉はじめ同人誌友の皆様には、何卒お力添えとご指導ご鞭撻を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

顧みますと、平成八年十月に小出智子さんが女性としてはじめて理事長に就任されました。しかし、翌平成九年六月に他界され、その無念さは察するに余りあります。

不肖、私は智子さんの力には及ぶべくもありませんが、少しでも近づきたいと心から願っております。

不安いっぱいではありますが、スタートをした以上前進あるのみです。皆様が〝いのちある句〟を作られるための、環境を整えるお手伝いが少しでも出来れば、これ以上の喜びはありません。皆様のお力添えを重ねてお願い申し上げます。

奥田　みつ子　選

高望みしない傘寿のシャボン玉
指切りにゆれるトレモロ鳴りやまず
てのひらに包み切れない義理の数
嘘一つ混ぜてナースの温い指
古寺巡るゆとり絵になる老い二人
ケータイも親子おもちゃにして平和

奈良市　乾　春雄

勝った日はスポーツ欄を先ず開く
生い立ちは語らぬ回り寿しのネタ
ケイタイで喋ると言葉軽くなる
女独り心にセコムつけて住む
本番になるとメッキの剥げる音
ゆっくりと時間を食べて一人旅

岐阜市　平野　あずま

欲張らず生きて至福の暮らし向き
雑魚は雑魚なり拘りの色を出す
世渡りの下手な夫に逆らえぬ

大阪市　三浦　千津子

無い振りも有る振りもして内助の功
言い勝った驕りへ雨が降り止まぬ
少しずつ自我を捨てつつ老いの道

日立市　加藤　権悟

お日様の笑顔に稲穂頭たれ
芋煮会天に赤トンボのエール
二学期の登校日焼けぐんと伸び
くるたびになぜなぜ孫の好奇心
叙勲には遠く大地に父の鍬
振りすぎることを反省する尻尾

和歌山市　柏原　夕胡

もたれ上手なおんなひらひら色っぽい
饒舌な顔だ泣いたり笑ったり
泳ぐのが下手な河童もいるのです
知っているかぎりを並べてる愚か
温い眼に触れてこころが溶けてゆく

和歌山県　たむら　あきこ

懸命にさぐるわたくし発の道
慢心を挫く台風待っている
ともだちごっこどこかで栗のはぜる音
たましいが抜け出しそうな風の盆
文集の頃は未来にあった道

八尾市　松葉君江

弱音など吐けぬ人生今が花
どんどんと言葉の遺産消えていく
かたくち鰯骨年令を引きのばす
衝突をさけてほどよい車間距離
病む妻に初めて炊いた三分粥

大阪府　神野千恵子

カタツムリ走りたい時きっとある
星座からはじき出された流れ星
約束をするエネルギー涸れてきた
キリギリス　アンデルセンに文句あり
正直な写真は破り捨てている

香南市　百田　幸

風よけに時には杖になり夫婦
先輩を越せばきびしい風当り
酔っぱらい名刺の顔はどこへやら
思いきり割ってみようかこのお皿
あなたには聞こえて欲しいひとり言

香南市　桑名孝雄

一笑に付したが的を射抜かれる
褒め殺し乗りたくなっている弱さ
ドライアイ直視がつらい社会記事
老人性ついたカルテに負けないぞ
はちきんを増長させてくれた千代

大阪市　中井　萠

名水で車を洗う過疎の贅
多忙でも暇でも愚痴が出る私
戦慄が走る新聞ひらくたび
甲子園平成生まれ走り出す
いつの間に強化ガラスになった妻

堺市　藤井一二三

もう母と聞けぬ故郷の祭り笛
花火師のいのちが咲いた祭りの夜
靖国の神にすまないあれやこれ
我が町の誇り一番山車かつぐ
ちちははに済まぬお盆の薬瓶

大阪市　原田すみ子

憂うこと何も無い日の茶のうまさ
背負うものいつしか軽く小皺ふえ
折り返しここから先はまずわたし
胸奥が透けて見えたら生きにくい
平穏が続く保障は何も無い

改憲論日毎に軍靴近くなり
カレンダー重い一日メモを消す
嘘おいて帰る見舞に足重く
掘り下げてみれば己の浅はかさ
スマイルを絶やさぬ裏で牙を研ぎ

堺市　大久保　伸子

ブランコを又三郎と漕いでいる
恐竜も見ていたらしい銀杏の木
窓際の月下美人と二人きり
六十の老いと若さが見えてくる
髪染めて小さな嘘をまたひとつ

大阪市　森田　明子

森と小鳥と風にだんまり続かない
一病息災医者に行こうか行くまいか
匙加減で毒にもなるというクスリ
ほころびを綴り綴りつ六十年
決心を足腰に聞く旅プラン

八尾市　赤木　妙子

群集の心理へ墜ちた倫理観
人間讃歌生き死にの修羅忘れよう
波風を夫唱婦随で防ぐ蓑
思春期のないまま昭和史の疼き
半歩退き静かな笑みにある気品

相生市　村木　信子

よく食べてよく寝て痩せる訳がない
ケンカ相手居る幸せに気づかない
ごて出した孫の躾は子に任す
気の利いた答咄嗟に出てこない
とっておきの笑顔で飾るウエルカム

横浜市　川島　良子

学歴の効き目が切れていた人事
ウィンクをしたけど誰も気付かない
気が付けば独りぼっちの数え唄
共犯を一人増やしている内緒
欲に目がくらんで的に当たらない

神戸市　両川　無限

無料ほど用心のいるこの時世
美しい言葉に靡く癖があり
海上に目印欲しい国境線
どちらにも勝たせたくなる名勝負
掘り下げてみれば言葉の罪深く

橿原市　藤永　実千代

旅に出てやっぱり家の指定席
横風を無言でかわす独楽の意地
単調な日々が幸せ知る歳に
想い出をひとり占めする古時計
夫婦なか芯がぶれずに半世紀

八尾市　脇　俊子

札幌市　三浦強一

ワンマンの孫に振り回されている
子の部屋にビックリ箱が置いてある
脱線の話が俄然面白い
先見えぬ世で占師儲けてる
貧乏神が椅子にふんぞり返ってる

草加市　飯土井健夫

想い出は妻のシャネルの膝枕
戦犯を怨む片脚もぎ取られ
謙遜も過ぎれば自慢らしく見え
経験で鍛えた明治動じない
赤紙を知らない人の平和論

昭島市　野口忠

過疎の村猿熊鹿で数合わせ
飼い犬に咬まれ心に穴が開き
脳味噌が頼まれもせず老い支度
主治医との相性よくて元気です
また逢おうその気もなしに舌が言う

立川市　柏野遊花

褒めことばヘポンと答えて蓮開く
鉢植えの紫蘇とひと夏凭れあう
継ぎ接ぎのことばで救えない心
普通ってどんな性格なのだろう
生きるパイプを繋ぎ直している転居

東京都　井上つよし

丸文字の手紙の主の丸い顔
口喧嘩してもわが妻二重丸
甘露甘露禁酒がとけて生ビール
も一人の自分が抱く不発弾
薄墨の筆もかすれる御霊前

東京都　やまぐち珠美

切り口を朧ろに見せて快男児
熱風こそ淋しひんやり虚が混る
逢いにいくおんな高架を乗り越える
球形の微笑へまわりだす疑心
浅草やいらかに褪せた悲がにじむ

横浜市　長島亜希子

娘がくれたチケット若い仲間入り
三千メートルの小屋で檜の風呂に入る（木曾御嶽山　2句）
出がらしで迎えられてもああ甘露
モーツァルトおなかに聞かせ期待する
おつきあいだからと今日も出かけてく

横浜市　中尾哲代

高級魚だから鰯を食べている
満月が不法投棄を許さない
いよいよか仕舞忘れと置き忘れ
長寿会還暦などはまだ子供
アイシャドウつけて病気と間違われ

横浜市　巖田　かず枝

我が家にもやって来ましたコウノトリ
終末は笑い薬を頼んどく
老母元気同じせりふが二度三度
バッカスも飲酒運転嘆いてる
雷が恐いと犬に起こされる

横浜市　金森　徳三

最高のドラマ感動甲子園
前線の文字に戦地を思い出す
こだわりは夏も燗して飲んでいる
老いの夏ただただ堪えて共白髪
女子ゴルフへそも大事なアクセサリー

藤沢市　加藤　スズコ

柳誌着く影に師の顔友の顔
孫三人下手な英語に手をたたく
流れ雲乗って古里のぞきたい
孫が言う落ちこまないで手をにぎる
孫みやげ百人一首なぞり書き

佐渡市　高野　不二

死ぬ時は無冠の大夫になるつもり
介護保険世話にはならぬ気の元気
孫のない不満ペットが埋めている
肩書きはあやまる役にされている
株でもうかる世の中に腹が立つ

静岡市　中西　雅

働いて玉の汗する神は知る
ブランコの風と話のできる過去
胸の奥湿気が邪魔で晴れぬ夢
あの星は手がとどきそうきっと母
甲子園黒い汗して夏終る

京都市　桝本　宏子

肝っ玉の母に育てた息子達
少しなら天使のこころ持ち合わす
雑談を説教にする酔っ払い
山小屋の雑魚寝で同じ夢を見る
法よりも義理が大事なおらが村

京都市　清水　英旺

盆休み隣家に客の声騒ぐ
首に重しニトロ納めたペンダント
法師蝉小さな秋をまとってる
打ち水に一瞬風が湧いて吹く
活断層の上しょうがなく住んでいる

京都市　三宅　満子

法改正見ざる聞かざる民の声
荒物屋名前も店も消えて行く
冥王星リストラに会い浮いている
18切符で命洗いに一人旅
渋団扇七輪秋刀魚秋の贅

悲惨さは語らず友のキノコ雲
レントゲン胸にも雲が浮かんでる
枕辺に母居て母のみずまくら
幾たびの苦笑か夜が長すぎる
胸襟をひらき闇まで見せられる

京都市　中野六助

おやじより長生き親爺呑まなんだ
敵は上下げた頭が笑ってる
言うなれば木綿豆腐のようなひと
嘘泣きを続けたひとに泣かされる
火の車だけは免許の夫婦です

大阪市　尾崎黄紅

引き潮が人目にさらす隠しごと
親でさえさじ投げた子が親を看る
懲りもせずばれた手品を繰り返す
丸投げの工事に浮いたあぶく銭
札束で抉じ開けられた堅い口

大阪市　伏見雅明

少年の心悪魔に負けないで
平凡な一日だった良しとする
一人居て楽しい事をふやさねば
体調を整え明日出かけます
意地悪をしてくるきっと好きなんだ

大阪市　平嶋美智子

親友のような同志のような亡姉
亡母と亡姉星で好物つつき合い
父母に急いで会いに逝きました
無人島置いていかれた胸の内
この曲は亡姉とデュエット月の下

大阪市　岩崎玲子

数百万死なさぬための九条を
押し売りより恐い電話でだます奴
ちっちゃいとリストラされた星が居た
道真さん落語を聞きにいらっしゃい
児童手当産めよ増やせよ言わんけど

大阪市　平井露芳

雑草も熱いと死んだ原爆忌
どんどんと溜まる脂肪の高笑い
由緒ある橋が粗末に見える国
橋の下子供拾いに行きたいが
じっくりと煮こんだ豆と独り居る

池田市　多田契子

敬老の日も占拠する長い脚
秋風に試されている夏の傷
秋めいて止まらなくなる妻の愚痴
子が巣立ち夜長の所在ない夫婦
聞いてやるつもりが先に愚痴り出し

池田市　上嶋幸雀

泉大津市　助川和美

生きている暑い寒いと言える幸
人よりもペットの病気高くつき
掃除下手パソコン上手家の嫁
テキパキと家事こなす母もう米寿
六十路でもバラの花束欲しいもの

泉佐野市　稲葉　洋

夏空は今日もあの日も同じ青
冥王よ同じ年だよ枠外れ
満腹で見る秋空の高きこと
月も出た実りも豊か胃も確か
根性なし意見も言えず缶を蹴る

門真市　矢阪英雄

酒の名は長老とあり里守る
瀬越しには川底の苔身につけて
鮮魚には酢味噌梅肉地の素朴
魯山人たたえた鮎がいま口に
山くずれ自然のなげき声ときく

河内長野市　木太久正一

日記書く昨日を忘れないように
芸術の秋においしい団子食べ
糠漬の西瓜の皮に母の味
もっともっと料理の腕を磨きたい
ラジオから料理のレシピ書きとめる

岸和田市　坂口英雄

体には異常がないが物忘れ
起きて寝るだけで年金逃げて行く
絶景を只で見られるローカル線
老いに老いの役目があって生かされる
神様が日にち薬をくれました

堺市　荻野像山

喉で飲むビールへ舌の応援歌
個性があると煽てられてる下手な文字
泣く場面笑う場面も出る涙
話すより見る電話器になっちゃった
鳴っては怖い防犯ベルを持たせてる

堺市　羽田野洋介

さあ行くぞ初めて歩く老いの道
挑戦する十年日記古稀の意地
都合よく忘れた振りも三度まで
高齢者昔はもっと老けていた
気配りを減らして晴れる胸のうち

吹田市　二宮栄子

迎え火に照れくさそうに夫帰る
天国の夫に感謝の日を過す
親ゆずり自信の足がよく歩く
老いなりの夢があります古希の坂
明日抜く歯ですきれいに磨いとく

吹田市　早泉早人

ときどきはキャンパス歩き若返る
前を見る何かが欲しい老いの坂
神様の道案内で生かされる
嫌なことみんな忘れて生きられる
秋深しこころに染みるひとり酒

高槻市　峯村勲弘

食欲に待ったをかける体重計
ほとぼりは心に秘めて風の盆
停車する度に残暑が乗って来る
問題を先送りする処世術
脱線があって男に味が出る

豊中市　神野宇乃子

松茸にヨン様はお元気かと聞く
目も舌も秋を楽しむ御懐石
歌い食べ休まず口は動いてる
味よりも喋って終る食事会
笑わせて酔わせ上手な幹事さん

寝屋川市　岡本勲

この歳で魔法効いたかチョコがくる
連休にわが身一つをもてあます
ぴったりと歩幅合わぬが仲はいい
誕生日何もいらぬがくれぬ妻
淀川の水辺で風と語り合う

寝屋川市　北田ただよし

今年のムクゲ咲き惜しみしてました
青柿を先食いしてた鳥がいた
退屈で昨日のアリを呼んでみた
仰向けに死ぬのが蝉の姿です
加速がきかず等速で歩いてる

寝屋川市　長濱賢山

沈黙にサイレンの音終戦日
八つ当り出来る女房がいてくれる
揚げ足はいつでも取れる聞き上手
静かなるファイト明日へ種子をまく
呼ぶときはオイとチョットですむ夫婦

羽曳野市　吉村久仁雄

種明かしすれば男が持つ嫉妬
生き様の甘さへキムチばかり食べ
懸命に生きると当たる流れ弾
性善説まだ人間をあきらめず
今日生きるスリルに老いの覇気もらう

羽曳野市　永田章司

丁寧語下手に使ってぼろをだし
ミス責めず笑い合ってる老夫婦
無意識にDNAの癖がでる
無病だと自慢の友が先に逝く
合意書が玉虫色に光ってる

羽曳野市　森下一知

たまに来て老母を労る世話上手
プロセスに理屈こねても負けは負け
感情を押さえ切れずにフライング
背負い込む荷物にあえぐお人好し
雑学のエキスを拾う回り道

枚方市　二宮紫鳳

秋色に模様替えしてティータイム
萩の花優しく揺れて二人旅
ダイエット秋は宣言ひかえとく
虫の声ＢＧＭで夫婦酒
夏バテも夏やせもなく六十路坂

枚方市　小林和子

灯り消し夜を楽しむ秋が来る
負けるまいいつまで続く反抗期
旅は楽しや知らぬ人にも声かけて
海鳴りの向こうに好きな人が待つ
百科事典奥が深過ぎ飾りもの

八尾市　西川義明

腕白がいた懐かしのよき昭和
政治家の誠の顔と嘘の顔
考えを変えれば溜るかもオカネ
腹割って話せば許しあえるのに
笑い声絶えぬ　おもろい夫婦です

八尾市　田邊浩三

ダイエット開始が延びて秋となり
孫入試茶断ち塩断ちまではする
先ず飲んで酔った力で河豚の肝
泡盛で胃の消毒をしてみよう
橋渡し役がはずした恋の橋

八尾市　前田紀雄

教育は法律でなく心です
高齢化空家が目立つ屋敷町
虫の音へ時を忘れる万歩計
忘れ物鍵かけてから二つ三つ
人生はそれぞれ脛に傷を持つ

尼崎市　小池幸子

口チャックつい綻びて臍をかむ
気掛かりが色々あってぼけられぬ
変化ない日々で余生がまた楽し
八月の祈り不戦の終戦忌
パーフェクト主義は何処かに捨てました

三田市　阪本藤朗

まじないの傘が効かずに雨の旅
懐かしい国訛り聞く宿の風呂
遠足に爺腕まくりタマゴ焼き
法螺吹きの友が寂しい話して
少子化に墓の行方を子らに聞き

三田市　臼井二英

放し飼いではあるけれど棚がある
古いメモ捨てたとたんに用が出来
個人差か感動する人しない人
思いやる心の底にある余裕
亡き人の出てくる夢に声がない

西脇市　七反田順子

短編は半ば区切って読んでいる
親友に趣味の器でお持て成し
米を研ぐ手ざわり今日は少し変
プリクラに少うし目線注ぐ祖母
エレベーター社名確かめ乗っている

三田市　上垣キヨミ

安堵する子等総勢の墓まいり
追伸の意味もう一度読み直す
月光に八等身のシルエット
モナリザを真似て大事な写真撮る
心地よい眠りを乗せて帰路のバス

宝塚市　丸山孔一

電話口俺だにトーン変える妻
虹を見てああと思った頃もあり
無防備は日本全国平和ボケ
見合いより犬がいいわという娘
それぞれが自由に生きて夫婦かな

奈良市　矢野良一

負けてなお笑顔さわやか甲子園
どちらにも勝ちをやりたい早駒戦
秋知らす白露がキラリ散歩道
シャリポリとそうめんカボチャ乙な味
妻の愚痴してみてわかる家事よろず

奈良市　尾畑なを江

褒められて飼主ポーズ決めている
かけ寄れば恋はふたつに割れていた
決断は早いあきらめまだ早い
真っ先に笑ったのには訳があり
大道を芸人が行くカメラゆく

紀の川市　木村徑子

生き様を晒し来た道光らせる
極く自然同じ道行くＤＮＡ
呱呱の声世界に響くのもさすが
もりもりと脳活性の詩を食べる
手拍子で歌ってくれたバースデー

和歌山市　根田よしこ

颯爽と別れたはずが振り返る
台風も農閑期には暇らしい
病癒えさあ出発と紅を引く
村の名が消えふるさとも遠くなる
うば車押して日課と老母散歩

和歌山市　田中すず

仕来たりの一つ破れぬ世間体
オブラートの中で疼いている痛み
逆らった流れ一筋光っている
いつかいつかへ私をおいていた不覚
綻びを繕い切れずいる惰性

和歌山市　土屋起世子

炭焼きの秋刀魚に喉が鳴っている
最高の料理我が家で差し向い
ぬか漬の茄子姑と同じ味
フルムーン主婦の目になる朝の市
母の道に天辺はなし鰯雲

紀の川市　宇野幹子

赤ちゃんの微笑感電してしまう
胃袋を掴んでゲットする心
手八丁口八丁が譲らない
帰巣本能忘れた金は戻らない
秋風に持っていかれた忍ぶ恋

和歌山県　森下よりこ

聞かなかったふりして今日も丸く住む
面倒で右へならえをしてしまう
何でだろう金持だけが骨太に
腰ポキと鳴った私のイナバウアー
それでもね明日信じれば生きられる

紀の川市　辻内次根

寝ころんで棚に不用のものがある
お互いに庇い合ってる老夫婦
マイナスの思考へ熱い湯をかける
捨てるには惜しい自信を持っている
バーゲンの値段ぴったり足に合う

和歌山県　村中悦男

副作用だけがよく効く薬ふえ
弁解の話に主語がかすれがち
笑顔消え真顔になって出る本音
ストレスをお捨てなさいと妻の笑み
聞きたらぬことが気になる診察後

鳥取市　山岡紀子

母さんは涼しい顔で愚痴を聞き
曲り角魔女がウインクしています
さりげないカーブが返る仲直り
弁解の汗は無言のままでいる
ばあちゃんもやっとメールの輪の中へ

倉吉市　酒井芙美子

胡座からぽろり本音がころび出る
べとべとの人間模様ややこしい
焦るほどこんがらがってしまう脳
くろぐろと書かれた墨の香り立つ
しっかりと結んだ絆千切れない

老い二人地球儀まわし夢旅行
そわそわと集う広場の老い仲間
カーブミラー映る私は三等身
五七五頭で遊ぶ待合室
断絶は出来ぬ絆の親子像

倉吉市　前田　喜美子

我が城は次代へ譲るまで磨く
御先祖に集まる盆の青畳
祖父の汗地に染み込んだ杉林
コスモスが真夏の愚痴を遠ざける
人情と空気がうまいおらが村

米子市　猪森　スミエ

スケジュール去って安堵の青い空
悲しみは食べて鍛えよ強く生き
うさばらし福祉バス待つ顔なじみ
紀子さまがこうのとりから授かって
我が余生うやむや去ってマイペース

出雲市　荒木　英子

効くらしいバナナナットーヨーグルト
九条の軍靴の音が高くなる
孫が去にそよ風部屋を通りぬけ
米寿まで目指していたがこの暑さ
健康のためだ二人の口げんか

雲南市　福間　博利

萎びても母のふところ温かい
軽そうに二階を降りる若い音
息子から電話うれしいバースディー
蟷螂の食い入るような大きな目
遠い日の恋この町に根を下ろし

雲南市　菅田　かつ子

平和主義押し通してる小さい嘘
ひと夏が足踏みしてる間に終り
一日を笑って心地良い眠り
傷ついた昔も今は語り草
諸々の事には触れぬ茜雲

雲南市　武島　ちよえ

夏炉冬扇そしる輩に負けまいぞ
盆終えて意欲が涌いた大根蒔く
叙勲から悟り開いた好々爺
体温が伝わるハガキ手紙から
子や孫に送る夢あり野菜種

安来市　原　煩悩児

夢たべてひたすら歩く父母の道
記念日に空に花咲くあかね雲
土と生く誇りを風とわかち合い
ささやかな若さが戻る薄化粧
淋しさに本音吐き出すひとりぼち

府中市　馬場　利子

今治市　塩路よしみ

柄になくセンチにさせる秋の月
好きになりそうで振り向くのが怖い
みの虫は糸の情けにただすがる
店頭に物はあふれて愛に飢え
朝焼けの神秘はまさに陽の恵み

今治市　渡邊伊津志

斬新な家でとっても住みにくい
文芸の至宝に挑む五七五
苦しんだから見えて来た人の愛
柔らかな心が見方変えてくれ
ピンチこそチャンス心に受けて立つ

大洲市　花岡順子

動かせぬ位置に私のパートナー
残り火を吹けば青春よみがえる
札束で心を尋ねたりしない
瞬間に対応出来ぬ脳になる
顔を見ていると不安が消えちまう

香南市　近森功

まだ米寿白寿へかける虹の橋
肩書きの名刺で決まる指定席
世間体飾る仮面は別に持ち
離農した息子に送るこしひかり
お賽銭やっと見付けた五円玉

山鹿市　松岡純子

雨足とかけくらべするにわか雨
野良がえり足元照らす月あかり
母が逝き野菜畑に空地ふえ
母植えし愛でる人なき庭の百合
思いやりイコール愛と信じてる

シドニー　坂上のり子

雑用も雑務と言えば価値が見え
霜降りにさせる和牛のＤＮＡ
梅干の薬効もろに知った旅
白昼の静かな庭を動く猫
植え替えた梅に蕾がぽっと付き

シドニー　森本クックバラ

天嗤う魑魅魍魎の棲む地球
パソコンにのめり込んだら足が萎え
中流はいっときの夢いまプアー
靖国に歴史音痴が列をなし
売りもせず売れもせぬ絵で狭く住む

シドニー　三谷たん吉

生きてるか密漁船の捨てたカニ
他人だまし心痛まぬ奴ばかり
人の死とゲームの区別つかない子
外交も景気もあとだまず人道
学識や理論などより自尊心

視野狭窄語り口から風に触れ
炎天の真下に意志を刺して置き
風は綺羅なにかが満ちる人の世に
平和とは何ぞや親亀子亀人を殺す

田辺市　大峠可動

対向車気合い負けして渡らせる
本能はどこか少女を捨て切れず
七十代滲み出てくる意志を持つ
夏競馬入道雲が鞭を打つ

八尾市　平川幸枝

完璧を目指せばきっと落し穴
余裕ある生き方自信ある証し
八割の力で生きる心地好さ
可哀相おふくろの味知らぬ子等

富田林市　古田千華

寄り合うて厨にぎわう敬老日
供花提げ律儀に彼岸詣りの子
手鏡に母かと紛う我れの居り
裏窓に浮世のゆとり月冴えて

泉佐野市　備後三代子

誰がために汗水たらし身を削り
つまずいた段差のなさに歳を知る
夏太り痩せる季節はありません
ハナ垂らし袖を光らす子が消えた

山鹿市　栗川四代目

相槌を迂闊に打って引き出され
ポケットが多すぎ物が捜せない
騙すより騙された人輝いて
地球儀の尋ねた国の数かぞえ

愛知県　三浦きぬ

結果オーライ失なうものが多すぎる
ごぼう抜きされまい肩を組む屋台
ああ夫婦中間色という絆
対流が起こってほしい最下層

和歌山市　山田侃太

電気代今年の夏のつけが来る
次の次奥ゆかしげに待つ気合
テレビからビッグなニュースあきれはて
ミント入れ今朝の食事は美容食

境港市　遠藤那珂子

車椅子と杖を頼りに生きている
失敗の数を肥やしに生きてます
大人でしょうそろそろタバコやめなさい
体育の日から足腰痛くなり

藤井寺市　西村栄一

ひとつまた一つと願い消える老い
喜びの種一粒を見落さぬ
躓いて明日へのゆとり見えてきた
みんなより下手でも明日はがんばるよ

鳥取市　横田春名

昨日から味方が一人二人減り
七人の敵はどうしているのやら
何の日と妻に聞かれてはっとする
何かある奥歯に何か挟んでる

河内長野市　宮守正博

身の丈に合わせた鍵を一つ持ち
ほめ言葉先ず拾い込む地獄耳
叩いたら渡れなくなる橋ばかり
肩書が取れて本音の友ができ

八尾市　田中トシエ

あくせくの指示に悲鳴を洩らす靴
手助けをするタイミング考える
何回もフィルターくぐり生きてきた
心込め介護で親に恩返す

鳥取県　岡村孝明

雨上がりほのかににおうなつかしさ
雨雲よ平等に雨降らせてね
ケセラセラ母と私の合言葉
十年ぶり弾く曲指が覚えてる

シドニー　内山佳代子

身に染みてその一行に朱線引く
散ることも一期の花よ黄の銀杏
草花の首かざりして跳ねた日よ
若者に席ゆずられて老いを知る

大阪市　吉田富美

歳かさね失うものと得るものと
雨だれを無言で聞いているひとり
勘違いした者同士のくい違い
私を道づれにして深む秋

府中市　藤岡ヒデコ

停年後プランばかりが先行し
ひと粒の種の成長待つつもり
辛い時本音を吐いてシャンと生き
菊の苗育て仏壇にぎやかに

松江市　松浦登志子

みな揃い祭のように稲を刈る
連作をさけてパズルの苗植える
金はない健康だけが宝です
一ぷくをするひまが無い農婦です

大阪府　小栢こずえ

秋風に何をそんなに悩んでる
大声で泣けたらいいな蝉しぐれ
あんな坂こんな坂越え共白髪
問診に見栄を張っても出る結果

藤井寺市　伊藤アヤ子

最後のトマト採ってお礼の油かす
髪染めて気分も顔も余所行きに
南座へ招待されて舟をこぐ
言いたいこと言えるお人がうらやまし

京都市　西村益子

消費税次にペットも標的に
子は呼捨てペットはちゃんで差をつける
孫去って想い出ひたる老い二人
一病を抱いて初老の一里塚

北海道　小沢　淳

葉の陰で何を祈るか蝉の殻
安売りの老舗のちくわ背が短か
雨戸閉めつめたい今日を終らせる
バーコードに頭下げてるレジ係

取手市　葛西　清

子の声が聞けぬ不思議な夏休み
靖国は今日も静かに眠れない
洒落てても歳は隠せぬ足はこび
貸金のチラシばかりが元気いい

北名古屋市　片岡文男

甲子園球児の手本学ばねば
この夏も元気で越せて朝寝する
若返り半パン履いて夏を越す
年一度おさない頃の話盛る

大阪市　吉内福世

うまそうな富有柿が食えない入歯
刈り取られしょんぼり一人案山子立ち
香が誘う奈良に多くの仏たち
体より先に松茸入る家

大阪市　吉川弘泰

世界史を血で塗り替えた鉤十字
悠久の大義の果ては死あるのみ
知らしむべからず依らしむべしの記事
賛成を渋ると非国民にされ

池田市　北出北朗

盆踊り浴衣の君に惚れなおす
蟻の道切磋琢磨と冬支度
安全を無視したツケが大惨事
磨かれたガラスに当るあわて者

河内長野市　黒岩靖博

花粉症ティッシュの安売り飛んで行く
命ほしい抗がん剤でがんばってる
一ヶ月寝た立つの大変ヒザ踊る
ハンカチ王子宣伝効果ばつぐんね

河内長野市　内海綾乃

裏切りは心の中にもうひとり
情熱があまり敬遠されショック
いちずさが紙一重の差ストーカー
人生の赤字を埋める定年後

岸和田市　中岡香代

この娘にもやがて来るんだ嫁ぐ日が
だんじりがゆらりとわたる稲穂原
新米にゃ熱い秋刀魚があればよい
マスコミに魔女裁判の匂いする

堺市　阪井智之

待合室人さまざまを楽しめる
過労の娘の話を聞いていて疲れ
医師と吾の二人三脚闘病記
前向きに闘病の日々蝉しぐれ

吹田市　元田さとえ

次の世へ語り継ぎたいありがとう
水を得た魚のような孫を追う
釣りたての小あじ肴に夜の宴
ゆっくりと哀しい踊り風の盆

高槻市　安田忠子

安楽死今のうちから頼んどこ
シンバルが起こしてくれるコンサート
クラシック拍手しどきが難しい
お洒落でしょ結ぶスカーフしわ隠し

高槻市　笠原乃りこ

無為徒食送る余生の有難さ
ミッドウェー戦記を曝す八月に
銀河の下寮歌に酔った日は遠い
竹槍とバケツの水で戦した

豊中市　源田啓生

僕のことわかってくれる枕ある
雷に臍でも売るか職がない
少年の消ゴム削る自己破棄
解決は明日にしようと大人言う

豊中市　谷川勇治

父と子は酒の量さえ競い合う
欠点を曝して友が一人ふえ
人生訓どれも立派で手が出ない
その昔蝗芋づる食べた日も

豊中市　荒巻夢

床に就き出来たあの句が出て来ない
品性と教養滲む詩の道
早世の友に号泣別れの日
新世界一度は行って見たいとこ

寝屋川市　小嶋みさと

朝どりの無花果届けくれる友
秋がくるうれしいような淋しさも
亡き母の好きなコスモスゆれている
真剣に取り組めばこそ出る結果

羽曳野市　松本静子

平和には亀の歩みの努力いる
私にも天国に椅子ありますか
どんどんと日本力士減っていく
暑い夏ハンカチ脚光あびて去る

羽曳野市　仲谷真一

子供らに素手で蝉捕り鼻高く
ゴギブリを追いつめた妻夜叉の面
腹立ちの性を抱えた影法師
隊長の涙の訓示敗戦日

枚方市　小川良吉

想い出は楽し海辺の夫の里
天の川見上げた夜もありました
湯の宿も夫を偲びて悲しがり
妹のお下り白髪に似合ってる

東大阪市　大塚　サキ子

この坂のお陰足腰まだ丈夫
わっと来て帰る疲れと寂しさと
夜明けまで月下美人と二人酒
名月にこころ洗われ仲直り

藤井寺市　俣野　登志子

孫十五今開かんとピアス揺れ
子が巣立ちいつしか冥王星になり
ストレスをいっぱい詰めて不燃ゴミ
親王が日本中を明るくし

藤井寺市　増井　ヨシ枝

ダイエットこの秋去って始めよう
胃の中でかすかに動く踊り食い
マイカーも車庫で冬眠原油高
登り下りいくつもの坂越して今

藤井寺市　津田　シルク

鈴虫も特訓重ね良いリズム
なつかしい訛りに会った道の駅
燃え尽きたまつりの後の肌寒さ
ダイエット病み付きになるフラダンス

藤井寺市　吉田　喜代子

戦争の記憶遠のく熱帯夜
爆音に怯えた壕に終戦日
ふるさとの祭へ逸る遠花火
目のやり場困る巨乳が揺れている

箕面市　寺井　柳童

万能が一つの結果出しきれず
都合でと便利な二字を使い分け
賞味期限とっくに過ぎて毒がない
やがて来る介護の話そっと聞く

八尾市　寺川　はじむ

夏大根辛味好みし父偲ぶ
叱ってくれる人の無い子の不幸せ
若き日の野心はいずこ好好爺
何げないその一言が火種とは

八尾市　中島　春江

振り出しに戻りわが子を育てたい
増税で社会の隅へ年金者
今日の汗あしたの意欲掻きたてる
消臭剤つけて淑女の仲間入り

八尾市　笹倉　ひろし

介護日々尊大になる自分いや
台風も格差がお好き世のならい
放浪記過去の自分が懐かしき
戦争のおろかさを知る終戦日

大阪府　大屋敷　婦美子

賑やかに浴衣のギャルが夏祭り
散歩です朝夕孫の護衛兼ね
犯人の刑が余りに軽すぎる
創刊号川柳のせて体をなす

大阪府　若月祐作

淡い影ゆれて風船かずら浮く
たしかめて産地気になる肉野菜
御詠歌の鐘は雨音遊ばせる
稲妻が遍路の足を急がせる

大阪府　畑中節子

事故車見て案じてくれる孫がいて
澄んだ眼の秋刀魚と出会う秋となる
待合室野草で癒す松葉杖
寝返りに手助けほしい長い夜

大阪府　西川冷子

読み過ぎた風は偏西風になり
福耳が迷惑しているイヤリング
笑うたび健康法だと思う日々
傘寿母もったいないの袋持ち

大阪府　高木道子

佑樹君ぼくも真面目で几帳面
おとといに食べたメニューを妻が聞く
深呼吸しても消せないこの怒り
頑張るぞうまいビールが飲みたくて

神戸市　木村忠義

湯につかり鼻歌うたい孫ばなれ
起きてゲーム夢の中でもまたはじめ
髪切られ鏡をみてはいたずら子
きれいから写したなんて服のこと

神戸市　武田恵美子

スタイルは誰憚ろう親ゆずり
ひと呼吸おいて切り出す下心
庶民派と印象つけて票さぐる
気のおけぬ仲間と交す俺お前

尼崎市　河津正治

木の揺らぎ見て出掛けます恐い風
琵琶湖の蓮風に浮葉の声がする
雷の大きな音に窓しめる
夕暮れに般若心経唱えます

尼崎市　古川正子

意地控え過ぎたら呆けが早く来る
妻のため残る命に咲かす花
役柄の風を吹かせて呼び捨てる
ネクタイを緩めさらりと嘘をつく

尼崎市　桑原東園

雨乞いのまじない信じ待つ畑
耕せば育てる幸をくれる土
よい気候旅誘われてすぐ参加
何だろうワレモノ注意荷が届く

加東市　黒崎美紗子

結婚の孫一号が盆帰る
先ず仏前夫も目元潤ませた
足の怪我刺激もろうて元気出す
聞き耳の範囲狭まる三世代

加東市　岩本　美緒子

健康はいいなクリーム食べてはる
疲れましたおつゆに卵割りましょう
朝顔に今朝の出会いをありがとう
夏休み終ってママさん趣味の会

篠山市　谷田　多美子

もったいない重ねて痩せぬダイエット
親王が紀子妃の笑顔やさしくし
娘が押すと疲れた父の足軽く
預かった孫に感謝の汗流れ

三田市　辻　開子

忍耐も限界ですとざくろはぜ
冗談の中にも本音をまぜており
大空にとばしたいのは花火だけ
ばんざいし昼寝の子供何のゆめ

西宮市　石野　照代

何あった聞きたいほどのいい笑顔
無理頼み神と仏が譲り合い
悩む夜それも眠りに落ちるまで
握手した手の温もりを信じてる

西宮市　藤本　直

予定通りルンルン気分ペダルふむ
涼風が味噌汁の味引きたてる
やっと雨菜園ぐるり生きかえる
涼風が野菜の世話にファイト湧く

兵庫県　永井　かほる

塾通い子供に賭ける親の意地
出張の疲れ癒すは家庭食
夏休み宿題騒ぎ親ゆずり
夏休み昆虫たちは逃げまわる

生駒市　小西　稔

広告に秋の味覚がこぼれそう
松茸は無理です栗は届くはず
赤トンボ私の色は決められず
夫婦にもグレーゾーンの時がある

和歌山市　坂部　かずみ

豆台風財布のヒモは締め切れず
夏バテにゴーヤパワーが効いてきた
抱きしめた孫の写真に見つめられ
連休の終わり近くでコリが消え

海南市　小谷　小雪

好奇心あふれる子らの水遊び
肩ほぐす友と温泉血が通う
価値観のサイズが違う親子です
ひとり言と独居の暮し今を生き

鳥取市　岡田　信恵

鳥取市　山口千代子

野球戦観る人する人滝の汗（高校野球）
満月に話しかけます我が憂さを
甘い演歌聞けば気分が若くなり
後ろ姿はどちらが婿か嫁さんか

鳥取市　谷岡清子

ひまわりは一斉に空あおぎ見る
古里を偲べば稲穂こがね色
他人の児もかわい無心に笑みかける
涸れた脳出そうにもなく辞書を繰る

鳥取市　近藤秋星

食欲の秋は秋刀魚がよく似合う
敬老日一杯飲めるので待たれ
収穫の喜びを知る幼稚園
秋晴れの空の彼方へ冬の影

倉吉市　福光京子

浴びるほど水分摂って夏太り
庭の木樹スリムにされてしゃべり出す
内臓脂肪減らす努力も捗らぬ
医療費の上がらぬうちにチェックする

境港市　中井虎尾

笑ってた仮面はがしてノッペラボー
監視するカメラ見つけてVサイン
正確さ生きてる証し腹時計
美しい女が化粧をする不思議

米子市　小塩智加恵

一人居が丁度暮らせる年金だ
敬老会新会員に名を連ね
嘘見抜く六感未だ冴えてます
十円玉千円貯まり切手買う

鳥取県　小飼和代

豊作へ笑みをたたえて案山子立つ
幸せの舞い込む扉開けて待つ
夏ばてへ追い打ちかける蝉しぐれ
飲み放題人間の欲さらけ出す

鳥取県　岩崎和子

光り物避けてビーズの軽さ愛で
玉葱の邪気が私を泣かせてる
薄い髪守ってくれた夏帽子
爪だけが忘れず伸びて夏終る

鳥取県　大田勝誉

汗かいた金は大事にへそくろう
梨娘昔も今もみずみずし
苦しまず施設の母はいい顔だ
価値観があなたと私離れすぎ

鳥取県　橋谷静江

派手に持つ旅行帰りの紙袋
料理下手達人という鍋を買い
道端で話したりずに電話くる
腹八分言葉も八分して暮す

暗い世に明るいニュースおめでとう
ふるさとは稲穂実りの顔で待つ
笑顔あるふるさとだから疲れとぶ
換気扇匂いだけですお裾分け

松江市　山根邦代

お弁当湿気を吸った新聞紙
花びらは百円玉にたんとある
将来の伴侶をさがす子供達
願いごとしたあと瞳輝いて

松江市　相見柳歩

愚痴一つ残して帰る見舞客
ほのぼのと景気のきざし聞くニュース
ほのぼのと温い人柄見せる友
手を合せ祈る姿で無心する

出雲市　川島和歌子

試着室財布の中も確かめる
さわやかな朝だ朝顔咲き誇る
丸い背を叱咤して来る影法師
柿の種あればビールが欲しくなる

府中市　岩本雅代

下向いて眼鏡拭いてる断る気
八十路すぎまだ捨てきれぬ夢がある
てにをはを間違え椅子がきしみだす
カラオケで知る感覚と時代の差

宇部市　高山清子

誉められて笑顔が割れておさまらず
口だけがやたら達者なバスの中
柿の種思い出し出しビール飲む
胃カメラが私の秘密映し出す

東かがわ市　赤澤貞月

笑ってる亡母の遺影に語りかけ
月給日まあるい声の妻が待つ
さらさらと指間を通る砂の山
上弦の月に家族の無事祈る

東かがわ市　中塚寿々女

どっこいしょ交互に立てて老い深む
草を抜く油断をすれば草が知る
向かい風追い風ありてこそ自然
行こうかと問いかける妻日曜日

唐津市　岩崎實

人の波山鹿灯籠よいの町
若人がどっと繰り出す夏祭
孫が来て祭りに浴衣男前
散歩道秋の気配を見つけたり

山鹿市　阿部ミツ子

第26回　川柳塔鹿野みか月川柳大会

日　時　12月3日（日）　**前夜祭**　12月2日（土）

場　所　国民宿舎「山紫苑」

詳細は次号、御参加お待ちしております。

愛染帖

新家　完司　選

取手市　葛西　清

妻の背を見ながら酒をサッと足す

（評）高等テクニック。スリル満点のトリックプレー。しかし、そんなことはとっくにお見通しで、大目に見てくれているのかも。

和歌山市　柏原　夕胡

旅人の風情で立っている案山子

（評）語り合う連れもなく、秋風に吹かれ悄然とたたずむ案山子。行き暮れて「さて、今夜の宿は何処へ」と思案している。

豊中市　水野　黒兎

のら猫も旅情のひとつ無人駅

（評）日常の暮らしから解き放たれた旅先では、無人駅にうずくまる野良猫にさえ様々な想いを重ね、センチメンタルになってしまう。

東大阪市　谷口　義

付き合いは挨拶程度昼の月

（評）深い付き合いではない。「やあ、そこにおられましたか」と目礼を交わす程度。お互いに認め合った君子と君子の交わり。

豊中市　谷川　勇治

DDTかけられたからしぶといぞ

（評）頭から腹から背中まで真っ白にされた世代、粗衣粗食に耐えてきた世代は、簡単にはくたばらぬ。平均寿命世界一は当分続く。

寝屋川市　籠島　恵子

夫のいない所ですこし若がえる

（評）夫の前では「いまさら」で、若返ることすら照れくさい。夫も同じで、妻のいない所で若返っているのだろう。「少し」だけだが。

堺　市　奥　時雄

おばちゃんが淑女になって尾瀬巡る

和歌山県　三宅　保州

パソコンのヘルプが余計わからない

安来市　原　煩悩児

仏前で酒盛りをする帰省客

東かがわ市　池内かおり

新米がとれて古米が疎まれる

再検査お祭りすんでからにする

尾崎市　春城武庫坊

九月の風に猫も元気に走り出す

平凡な広告文が買いやすい

和歌山市　木本　朱夏

どくだみを抜いてどくだみ臭い指

ペットボトルばかり溜まって夏が逝く

三田市　北野　哲男

人並の嘘の数ですエンマ様

うたた寝に右岸の月はもう左岸

交野市　田岡　九好

マスメディア断って己を取り戻す

三田市　石原　歳子

夏物をしまわぬうちに虫の声

和歌山市　楠見　章子

ボールペンぐるぐる書いて雨の午後

用意したお世辞が喉にからみつく

大洲市　花岡　順子

こうるさい人が私のパートナー

震度3ほどの喧嘩もして暮れる

唐津市　山口　高明

覗き見の快感煽る週刊誌

激震に忘れて逃げた保存食

橿原市　居谷真理子

道化者十五で泣いたあの日から

時々はゲンコでなぐる抱き枕

鳥取市　福西　茶子

子に強いる果たせなかった親の夢

イメチェンにショートカットとハイヒール

八尾市　田邊　浩三

酒断ってビールの泡を舐めてます

引き際も見事でしたと言わせたい

和歌山市　たむらあきこ

有名もヒト科のなかでだけのこと

生きている限りわたしも発光器

尾崎市　春城　年代

ぎょうさんに貰う薬を断れず

きょう一日で内科リハビリ歯科こなす

吊り革に憧れている男の子　西宮市　緒方美津子
笑点の笑うとこだけ合う夫婦　宇部市　平田　実男
いつからか私の椅子へ子が座り　大阪市　岩崎　玲子
外国の人には甘い喉自慢　鳥取市　倉益　一瑶
答えないただそれだけの雨の音　海南市　小谷　小雪
動くたびポキポキポキと骨うたう　紀の川市　辻内　次根
チョイワルを演じピエロになるジイジ　箕面市　出口セツ子
差し掛けた傘が破れていた日暮れ　富田林市　大橋　鐘造
起きようかまだ寝てようか夫留守　和歌山市　古久保和子
お迎えが来るまで何をしておこう　東京都　岸野あやめ
卑しくも昭和の骨で起っている　茨木市　藤井　正雄
投函を済ますと脳が軽くなる　四條畷市　吉岡　修
伝えたい人には伝わらない愛　藤井寺市　若松　雅枝
生きるのに少し疲れてくる初秋　海南市　堂上　泰女
三回忌やっと時計が動き出す　大阪市　前　たもつ
お見事と言う他はなしポックリ死　泉佐野市　備後三代子
Uターンの友の胡瓜は曲がってる　吹田市　早泉　早人
整形も高いが総義歯も高い　藤井寺市　鴨谷瑠美子

新幹線窓を叩いて見送られ　横浜市　金森　徳三
薬より寝てろ寝てろという名医　香芝市　大内　朝子
ミニ薔薇にミニ青虫が十匹も　富田林市　古田　千華
秋の風乗せて降ろして地域バス　寝屋川市　森　茜
いい顔になったと妻に煽てられ　高槻市　乙倉　武史
母の背も少し伸びたか美人の湯　和歌山市　田中　みね
秋祭り卒寿の父と二人連れ　芦屋市　黒田　能子
右の肩濡らした好きな傘たたむ　大阪市　伏見　雅明
銀行は年金だけのお付き合い　河内長野市　坂上　淳司
意地悪なおひと長生きしそうやな　鳥取市　谷口　次男
イガイガが剥けたらきっと好い女　美作市　小林　妻子
情熱が途切れぬうちに怒っとく　倉吉市　米田　幸子
貧乏性何時も出口に座席取る　三田市　阪本　藤朗
芋蔓式に程度の低い句が生まれ　松江市　松浦登志子
私にだけ笑いかけてる阿弥陀さま　豊中市　吉田あずき
暗雲が漂うあたり妻がいる　堺　市　加島　由一
飼い主を連れて散歩に出るお犬　吹田市　穴吹　尚士
ネコと犬入退院を繰り返す　八王子市　川名　洋子
介護認定してもらいたい犬が居る　熊本県　岩切　康子
ペットにもペットとしての尊厳死　鳥取県　竹信　照彦
訳言わずただ泣く孫の手が温い
売りに出た実家を買いにひた走る
新人の絵の具思わぬ色がある
つばめセミ消えて松茸栗ごはん
本人は得意で書いている色紙
五十年共に老いてた師と生徒
お便りの昔のことが記憶ない
薬など飲まぬと自慢して転ける

伴奏も楽譜もいらぬ子守唄　鳥取市　岸本　宏章

捗らぬ作業で意見ぶっつかる　弘前市　櫻庭　順風

喜怒哀楽怒ばかり目立つ浮世です　高槻市　傍島　克治

六十年耐えて楽しくならぬ国　大阪市　板東　倫子

テポドンのことはさて置き昼寝する　池田市　上嶋　幸雀

テポドンでいっそ竹島沈めたら　シドニー　森本クックバラ

幸せは世界遺産のテレビ旅　倉吉市　松本よしえ

遠い恥いまだ失恋レストラン　松江市　川本　畔

言い訳も理屈もだめな妻である　西宮市　坪井　孝一

冷や飯がなんだレンジがあるじゃない　八王子市　播本　充子

若い友の知恵を借りたい日暮れなり　米子市　青戸　田鶴

お日様が沈むと月はよく光る　弘前市　福士　慕情

月の冴え執着心が消えました　尼崎市　長浜　美籠

身体ごと堪忍袋だった母　池田市　北出　北朗

言うことは言ってゆっくり首洗う　弘前市　高瀬　霜石

叩くものなくてゴキブリ踏んでおく　鳥取市　岸本　孝子

翔ぶのならあえて正気は捨てなさい　堺　市　和田つづや

日本海の魚引越ししてるらし　大阪市　古今堂蕉子

電話口いつもテストの十七歳　八尾市　髙杉　千歩

秒針の音聞きながら待ちぼうけ　米子市　政岡日枝子

夏祭りの日だけは猛暑許します　羽曳野市　吉村久仁雄

ローヤルゼリー飲んで密かなる自信　和歌山県　森下よりこ

送り主不明そーっと振ってみる　大阪市　井丸　昌紀

姑と綱引きできる妻になり　黒石市　相馬　一花

秋祭り男が男らしくみえ　奈良市　尾畑なを江

欲いっぱい細胞はまだまだ若い　鳥取市　徳田ひろこ

胸底にあるのは花の雨だった　美祢市　安平次弘道

育て方間違え花は咲かぬまま　寝屋川市　冨山ルイ子

振り向くな後ろに夢は何もない　富田林市　片岡智恵子

水引の結び目ほどの淡い縁　松江市　三島　淞丘

メールほど器用に出来ぬ独楽まわし　堺　市　西村りつえ

病室の窓でトンボが覗いてる　高槻市　瀧本きよし

気の抜けたビールゆすって泡立てる　大阪市　岩崎　公誠

ふる里の名のラーメンに手がのびる　橿原市　安土　理恵

神さまが無駄と言うまで竹を踏む　京都市　都倉　求芽

勝ち組になろうと縋るクモの糸　高知市　小川てるみ

こっそりと貯めて離婚日決めてある　紀の川市　木村　徑子

配役で犯人当てる妻の勘　札幌市　三浦　強一

ふと脳裏よぎった友にハタと遇い　シドニー　坂上のり子

ちょっとした情けに涙ぐむ歳に　尼崎市　田辺　鹿太

転がった穴で拾った柿の種　長岡京市　山田　葉子

尻天に上げたのもいるとうがらし　鳥取市　武田　帆雀

西予市　黒田　茂代
好きな道ばかりわたしの描く地図

堺　市　村上　玄也
迷ったを熟慮をしたと言い開き

尼崎市　小池　幸子
バイキング相応しくない歳になる

大阪市　津村志華子
グルメ旅その半分も食べ切れず

米子市　白根　ふみ
言い訳が上手に言えたまずい飯

唐津市　坂本　蜂朗
鰻屋の前で歩幅が狭くなる

豊中市　安藤寿美子
十人中五人シングルばあさん会

姫路市　古川　奮水
ふる里の風農薬の臭いする

三田市　上垣キヨミ
風鈴もじっとしている今日一人

和歌山市　福本　英子
クールビズバスも電車も寒すぎる

八尾市　西川　義明
よその子は見えても我が子見えてない

鳥取市　永原　昌鼓
夫病んでスケジュールみな狂わせる

大阪市　川原　章久
英語より乱れた国語直したら

出雲市　園山多賀子
絵手紙の南瓜はみ出し夏終る

和歌山市　田中　すず
もやしの根もきっちり取って料理好き

三田市　堀　正和
前向きに生きて年金足りません

加東市　黒崎美紗子
リハビリへとても嬉しいほめ言葉

唐津市　市丸　晴翠
鼻眼鏡看板に祖父店守る

鳥取市　山宮　愛恵
ホットな話だけのチャンネルあるといい

松江市　相見　柳歩
投げキッス夢の中でもしています

大阪市　奥村　五月
この歳で恋の火種がまだ燻る

大阪府　籾山　隆盛
紅葉の寺へデートに誘う仲

交野市　山川日出子
初恋を語り合ってるバラのお茶

今治市　渡邊伊津志
横切った髪の匂いを深く吸い

藤井寺市　太田扶美代
老いてまだまつり太鼓を待っている

東大阪市　北村　賢子
憧れた都星無く夢も無く

京都市　中野　六助
ぐずぐずと秋になっても四月馬鹿

米子市　小塩智加恵
法律を知らない母に一理あり

神戸市　田中　章子
旅先で自分に宛てるエアメール

枚方市　海老池　洋
妻の留守妻の嫌いなものを食べ

西宮市　門谷たず子
友も病んでどちらが勝つか駆けくらべ

唐津市　井上　勝視
法師蝉を耐えて待ってる老いの骨

鳥取市　有沢せつ子
引越しの地図へ寄るには遠すぎる

和泉市　西岡　洛酔
私利私欲ちょっぴり持って坂登る

八尾市　村上ミツ子
都合よくがらがらのバスやってくる

奈良県　渡辺　富子
花野めざし手押し車の母達者

堺　市　羽田野洋介
うっかりも笑い話のいい仲間

大阪市　三浦千津子
生き下手の本音綴った日記帳

西宮市　片山　忠
幸せですかとふいに聞かれたクラス会

倉吉市　山中　康子
予防して介護負担をかるくする

高槻市　左右田泰雄
水撒けば植木もしゃんと若返る

大阪市　小泉ひさ乃
好奇心追うて帰らぬ竹とんぼ

第12回 川柳塔まつり

同人総会

平成18（06）年第41期川柳塔社同人総会は、10月8日午前10時からホテル・アウィーナ大阪で開かれた。村上玄也常任理事司会で開会、河内天笑主幹があいさつ、同氏を議長に選出して議案審議に入った。

一号議案の事業活動は、鴨谷瑠美子常任理事が、「川柳塔社役員等に関する規定」の改正と「主幹・理事長の選任に関する規則」の制定を行い立候補を募り、参与以上の役員による投票で選任した旨と共に、別項のとおり報告した。

誌友拡大プロジェクトチームの活動については長浜美籠常任理事から対策を報告した。

「誌友拡大対策」

①誌友対象者へ勧誘贈呈の近刊川柳塔誌は各地川柳会代表者の申込で無償供与する。（本社事務所受付。送料は申込者負担。）

②各地川柳会会員の誌友／未加入の確認は本社事務所で受け付けている。

③各地川柳会の句会に、本社からの応援の要望があれば、積極的に対応する。

④『川柳しませんか』は大好評で増刷した。

「誌友定着対策」

①初歩教室の未掲載者に役員が添削指導し投句者に返送する。

②初歩教室の月度推薦句から年間賞を選定し、誌上発表の上本社句会で表彰する。

③新誌友に川柳塔社柳箋一冊贈呈し、水煙抄等への投句を勧誘する。

二号議案では、坊農柳弘常任理事から2006年度の活動計画について、誌友同人の拡大に取り組み、川柳塔を元気にすることを重点として、誌友（水煙抄）の投句者を増やす工夫や、二賞への応募をし易くする工夫をする、1月号から「各地句会だより」を不定期ではあるが掲載する、との提案を行った。また籠島恵子常任理事が予算案を提案した。

質疑応答では仁部四郎氏から各賞選考規程での文書の不備の指摘があった。

三号議案は、板尾理事長から、主幹・理事長の選挙結果の報告と共に、留任・新任の役員選出について提案した。

全議案が拍手で承認された。

退任役員を代表して、板尾岳人新相談役から「新役員による新生川柳塔頑張れ」とのエールがあった。新役員を代表し、河内天笑主幹は「楽しい、レベルの高い川柳塔にすべく努力したい」と述べ、西出楓楽新理事長が閉会のあいさつを行った。（尚士記）

■事業活動報告

〔事　業〕

2005（平成17）年

10月10日　第11回川柳塔まつり（ホテルアウィーナ大阪・参加者233名）

11月12日　川柳塔碑合祀法要（高野山大霊園・参加者48名）

2006（平成18）年

2月18日　川柳塔社各地川柳会代表者会（ホテルアウィーナ大阪・参加者28名）

6月25日　いずも川柳会80周年記念川柳大会（ホテル武志山荘・参加者123名）

7月　『川柳塔』950号誌上川柳大会（参加者730名）

7月7日　路郎忌本社句会（ホテルアウィーナ大阪・131名参加）

〔主な受賞・表彰〕

山本希久子　本社句会月間賞永久保持者

田中　正坊　全日本川柳協会功労者顕彰（平成柳多留刊行の功）

〔出版・句集の刊行〕

池　森子　『森』（句集）
山岡冨美子　『賛歌』（朝日なにわ柳壇百句）
中澤　伽羅　『その笑顔』（遺句集）
福島　万年　『百花園』（句集）
正畑　半覚　『父の一言』（句集）
藤井　則彦　『心に響く最後の言葉』（出版）
川柳ささ百合　『川柳ささ百合』（合同句集）
中村れんげ　『えにしつれづれ』（句集）
奥田みつ子　『遠き人へ』（句集）

〔句碑建立〕

伊勢八重子（東かがわ市白鳥中央公園内）
原　賢（同　　）
川崎ひかり（同　　）

〔物故者〕（9名）

岡本吉太郎　平成17年11月7日没　85歳
亀井　皎月　同　12月24日没　81歳
本吉　宗光　同　12月27日没　82歳
中後　清史　平成18年1月1日没　77歳
久保まさお　同　2月16日没　88歳
野村太茂津　同　2月27日没　91歳
本間満津子　同　4月10日没　90歳
田口　虹汀　同　5月27日没　96歳
岩屋　美明　同　7月2日没　82歳

同人総会　役員席

■主幹・理事長選任（「主幹・理事長の選任に関する規則」制定に伴う選挙による）

主　幹　河内　天笑
理事長　西出　楓楽

■新任役員（留任は含まず）

相談役　板尾　岳人・仁部　四郎
参　与　大内　朝子・米田　恭昌
理　事　柿花　和夫・古今堂蕉子
　　古久保和子・松本　文子
　　水野　黒兎・山口　光久

■新同人（27名）

森元ふみよ（岸和田市）林力子（岸和田市）
中村れんげ（大阪市）米田水昇（東大阪市）
堀正和（三田市）奥時雄（堺市）升成好（大阪市）田中章子（神戸市）石原歳子（三田市）
佐々木満作（東大阪市）福岡末吉（大阪市）
佐甲昭二（高槻市）片山忠（西宮市）山田婦美子（神戸市）吉田幸子（犬山市）伊達郁夫（枚方市）金子美千代（犬山市）大崎侑子（高槻市）池上清治（大阪市）杉本義昭（高槻市）関本かつ子（犬山市）河野桃葉（柏市）
長谷川康子（東京都）野崎勝（国分寺市）池田岩夫（岸和田市）永峰宣子（柏市）堤楢代（岸和田市）

〔同人総会出席者〕（順不同・96名）

前たもつ　仁部四郎　板尾岳人　奥田みつ子
河井庸佑　穴吹尚士　村上玄也　宮本三喜夫
西内朋月　阿萬萬的　坪井孝一　鴨谷瑠美子
伊達郁夫　杉本義昭　村上直樹　久保田千代
柿花和夫　井丸昌紀　小島蘭幸　西口いわゑ
井伊東吉　川端一歩　福岡末吉　瀧本きよし
長浜美籠　河内天笑　吉村一風　山岡冨美子
田中章子　石原歳子　福士慕情　中村れんげ
籠島恵子　櫻庭順風　水野黒兎　山本希久子
新家完司　米澤俶子　小島笑司　森元ふみよ
川上大輪　池上清治　安土理恵　岩佐ダン吉
鶴田遠野　西出楓楽　小谷集一　佐々木満作
坊農柳弘　岩崎公誠　山口光久　出口セツ子
石森利昭　玉置重人　松原寿子　古今堂蕉子
鈴木公弘　森本弘風　米田恭昌　冨山ルイ子
大橋鐘造　早川盛夫　奥村五月　榎本日の出
山本義子　佐甲昭二　江見見清　宮崎シマ子
木本朱夏　都倉求芽　三宅保州　古久保和子
榎本舞夢　石堂潤子　渡辺富子　齋藤さくら
若松雅枝　藤井正雄　黒田能子　居谷真理子
中井アキ　矢倉五月　高島啓子　飛永ふりこ
亀岡哲子　谷口義　片山忠　太田扶美代
堀正和　塩満敏　今愁女　土橋螢　太田昭
堤楢代　吉岡修　森茂美

■おはなし（要旨）

さぷりせんりゅう

（川柳はこころの常備薬）

新家　完司

「さぷりせんりゅう」という変な演題にしましたが、「さぷり」というのはご推察の通り「サプリメント」を勝手に略したものです。サプリメントとは、補足とか付録という意味ですが、最近ではもっぱら「栄養補助剤」という意味でつかわれています。健康志向の波に乗って大流行、いろいろなメーカーから、たくさんの種類が発売されています。私も若い頃から「野菜不足」という強迫観念のようなものが沁み込んでいまして、「青汁ゴーヤ」というようなものを購入しています。

このように、身体の栄養補助剤は、嫌と言うほど出ていますが、「こころ」に対しては如何でしょうか。こころも身体と同じように、疲労し傷も受けます。対人関係とか仕事上のトラブルなど、忙しく活動している人ほど、疲れて傷付きます。そのような時、私たちは無意識に、或いは意識して、こころを癒す行動をとっているようです。

新家　完司氏

例えば、絵画が好きな人は美術館で静かなひとときを過ごす。音楽の好きな人は、ひとりになって好きな音楽を聴く、或いは演奏会へ出かける。映画の好きな人は、映画館で至福のひとときを過ごす。等など、積極的にこころを癒す行動に出ます。また、何もせず、ひたすら「時の流れ」に身を置いて静かに回復を待つ場合もあります。

このように、「時の流れ」を含めて、こころを癒してくれるものは総て、「こころのサプリメント」或いは「こころの常備薬」と言えるでしょう。そして、幸いにも「川柳」に携わっている私たちは、優れた川柳を効果的な「こころの薬」とすることができます。

本日は、今までに、私のこころを癒してくれた句、いわば「私のこころのサプリメント」の数々をご紹介したいと思います。もとより、人それぞれ感性が異なりますので、私が感動した句がどなたのこころにも響くとは限りませんが、一つでも「ああ、いい句だなあ」と受け止めていただければ幸いです。

先ず、山陰の大先輩、柴田午朗さんの有名な句。終戦直後の荒廃した街のラジオから流れてきた琴の音を詠った、

敗けた国宮城道雄の琴が鳴る

それまでの私は、ただ漫然と時間潰しの趣味位の気持で川柳をやっていました。この句に出会って、「川柳というのは、僅か十七音で凄いことが言えるものだ」と感銘を受けました。そして、「川柳という文芸は、一生をかけて取り組む値打のあるものだ」と、こころを新たにさせてくれた句でもあります。また、

男ひとり住み糸長き針を持つ

という句は、奥さんに先立たれ一人住まいをされていた午朗さんが、平成五年にその境遇を詠われたものですが、不器用な男の暮らしぶり、その侘しさがそくそくと伝わってきます。このようなしんみりとした味の句ばかりではなく、ユーモアのある句もまた、こころを癒してくれます。（以下、川柳塔社同人の句を中心に、36句ほど紹介させて頂きました）

おはなしに聴き入る

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から、喜田准一・森田明子・天笑主幹・米澤俶子・伊藤玲子、後列右から、坂上のり子代理・居谷真理子・大橋鐘造・鍛原千里

晴れの受賞者

さわやかな晴天に恵まれた10月8日、同人総会を終えて定刻一時、222名の出席者を迎え第12回川柳塔まつりの川柳大会が開催された。

司会は松原寿子・村上玄也。開会の辞は板尾岳人新相談役、河内天笑主幹の挨拶、祝電披露に続き六賞の表彰式が行われた。例年通り主幹から賞状と楯が授与され、所属吟社から花束が贈られた。なお檸檬賞の永田俊子さん（熊本市）、川柳塔賞準賞第一席の田中すずさん（和歌山市）は都合により欠席。

次いで松原寿子同人部長代理から新同人27名の紹介があり、出席者に記念品が手渡された。おはなしは鳥取県の新家完司さん。「さぷりせんりゅう」と題して川柳塔同人、誌友の作品を交え癒しの川柳の数々を紹介、会場は和やかな笑いの渦に包まれた。（前頁参照）

新相談役の仁部四郎氏の閉会の辞で、予定通り無事大会を終了した。月間賞は神戸市の山口光久さんに輝く。

脇取り（朱夏・恵子・真理子）・清記（直樹）・撮影（公誠）　（朱夏記）

兼題「やわらかい」　長浜　美龍選

紫香さんと握手した掌を撫でている　美代子
好きやねん大阪弁はやわらかい　喜代子
怒鳴られる覚悟へ言葉やわらかい　かりん
やわらかい笑顔に騙されまい総理　利昭
やわらかい語尾に油断をしてしまう　恵子
新聞に心やわらぐ記事がない　(奥)五月　無限
ばあちゃんの女心はやわらかい　無限
太陽を吸った気持ちのいい布団　正雄
やわらかにコスモス揺れて君恋し　忠子
豆腐粥只今入歯修理中　克己
やわらかい物腰につい騙される　香代
やわらかい空気になったありがとう　美千代
八十路なおでんぐり返るしなやかさ　八千代
やわらかに脳のしこりをほぐす辞書　久峰
マシュマロの様な女がいた昔　(沢)和子
トカゲから言えばわたくしやわらかい　生枝
やわらかい男の手には身構える　ルイ子
勧誘はソフト財布がゆるみそう　まみ子
やわらかく貸して厳しく取り立てる　東吉
考えておくとやんわり断わられ　好
マシュマロの肌にキスするママとパパ　肇
逢いにゆく雨柔らかくやわらかく　アキ
やわらかい口調で芯のある主張　玄也
柔らかく拭う人生の汚点　久子
発想を変えると鉄もとけてくる　光久
湯豆腐の掬えぬ人を好きになる　六助
やわらかい話に心許し合う　梓
やわらかくなって仏壇から下げる　きみえ
どう言えばやわらかくなる癌告知　(矢)五月　慕情
湯豆腐がふつふつ今日を締め括る　さくら
やわらかい手にも古傷たんとあり　ダン吉
頼りない男だやわらかい頭　冨美子
ひら仮名で話す民話が温かい　大輪
やわらかい言葉が添えてある余白　孝一
鶴折るとみんな和らぐ顔になる　扶美代
魂をやわらかくする志功の絵　泰子
男性をふにゃふにゃにする好きやねん

パステルカラー母子像なんとやわらかい　理恵
やわらかい目で悩みごと聞いてくれ　天笑
寿の箸やわらかくする笑顔　寿子
マシュマロよ君がすきなら僕も食う　ばっは
やわらかい声がすべてを許してる　美花
やわらかな掌になりました闘病誌　潤子
やんわりと山を動かすこともある　いわゑ
やわらかな口調で正座崩さない　(古)和子
やわらかい罠だゆらゆら酔芙蓉　朱夏
地を這うてからの五感がやわらかい　森子
もう危機を脱しましたと三分粥　保州
苦い恋してやわらかくなりはった　月子
触れないで過保護の桃が箱の中　(久)千代
やわらかい口調役者が上らしい　楓楽
半熟の卵欲求不満です　見清

佳

やわらかい母の結び目裏切れぬ　毅
秋ですねソフトな恋をしませんか　一歩
ハートごとくにゃくにゃにした孫のチュー　修
やわらかく結び束縛せぬ絆　希久子
ゆとりある時人さまにやわらかい　典呼

人

プッチンプリンをすくうていじめなどはない　惠美子

地

やわらかく生きやわらかく歳をとる　能子

天

メレンゲのつの柔らかく自己主張　葉子

軸

やわらかい雨としみじみ過去未来

兼題「遊ぶ」　坊農　柳弘選

本気ではないが遊びだとも言えず　幸雀
遊びなはれと言う妻が居て怖い　冬葉
夜遊びのピアス待ってる常夜灯　登美代
どの国も核では遊ばないように　みつこ
見て食べて遊ぶ女のフルコース　美代子
遊ばれているメールとは知らず待ち　一風
かりそめの恋の火遊び高くつき　武史
芋の蔓遊びごころで煮含める　恵子
遊ばねばどんどんこころ涸れてゆく　楓楽
火遊びがばれて会社を辞めました　尚士
木登りが得意里山秘密基地　克己
コンビニに遊ぶ夜長のニート達　典呼
いっぱい遊んで優しい大人になりました　美花
パスポート手にした母は若返り　喜代子
定年後遠くへ飛ばす竹とんぼ　葉子
遊んでんのとちゃう仕事無いんです　淳司
星と遊ぶ冥王星を知ってから　舞夢
けだものを遊ばせている森がある　螢
風流と遊び心をポケットに　大八
道楽と言われ続けて受賞され　(矢)五月
一本のペン遊ばせて人を斬る　無限
夜遊びの味を覚えたうちの猫　珠子
美しい国になったら皆遊ぶ　英子
恙無く生きて卒寿の遊び癖　多賀子
棒切れ一本あれば遊べた土の道　(古)和子
大枚を払い大人がする遊び　久子
遊んでも妻の前では貝になる　弘泰
遊びではないとくどかれ嫁になり　見清
吃水線越えた遊びの重い罰　正雄
アイディアは遊び心のひとしずく　則彦
遊びから世渡りのこつ学びとり　天笑
恋疲れ遊び疲れの秋の風　希久子
遊ぶ時も真剣勝負する　月子
釣り支度妻の機嫌が直らない　盛夫
愛してるなんて落書きして遊ぶ　寿子
まだ妻に内緒で遊ぶ若さ持つ　章久
この線を越えたら恋になる遊び　六助
宇宙遊泳したい日もある紙の鶴　美籠
夜遊びの好きな河童で泳げない　慶一
蟻の目に人間さまは遊びすぎ　好
そりゃあんた金に遊ばれてるだけや　真理子
遊びでも手抜きはしない太郎冠者　冨美子
明日の絵に少し遊びも入れておく　セツ子
遊びでは済まぬお腹が三ヵ月　茂雄
遊び好き今日もお医者へ行かはった　直樹
あれ以来鬼と遊んで帰らない　岳人
何だろう核もて遊ぶヒト科とは　ダン吉
遊びたい欲が加齢と反比例　梓
遊びではないと信じている小指　碧
百歳の膝で遊んでいるやしゃご　保州
句読点を打ってネオンの海へでる　慕情
遊ぶだけ遊べばペンが欲しくなり　雅枝

佳

冴え渡る五感は風とよく遊ぶ　森子
修羅忘れ花野で蝶と遊ぶ母　富子
旬すぎてゲームに嵌る魔女である　理恵

亭主関白妻の火遊び見抜けない　智彦
遊ばれておいしくなったハンバーグ　ますみ

人

遊びたーいなんてロボット言いません　ばっは

地

遊び好き芸の肥やしと春団治　千里

天

焼酎にレモンも美女も遊ばせる　恵美子

軸

止まり木に遊び疲れた箸枕

兼題「白」　鈴木公弘選

勝ち組も所詮はかない白昼夢　洋介
白い下着が処刑のように干してある　桂子
愛情もほのおも秘めて白い薔薇　寿子
ステテコで白馬の王子くつろげり　美千代
真っ白な子ら黒い大人に牙をむく　智彦
冗談のわからぬ夫と共白髪　睦子
白手袋はめる黒い手隠すため　桃花
味方にはなれず白票入れました　朋月

披講風景

時々は黒に混じって遊ぶ白　公誠
八時間眠る白紙に戻るため　楓楽
日記帳白いページは泣いた日か　愛論
早朝の白い時間に写経する　日出子
白内障治し気付いたしわとしみ　弘子
幸せな白いご飯を炊いている　雅枝
神楽舞秋もたわわに足袋の白　直樹
日本の品格憂う白い足袋　富子
真っ白なドレスに勝る色はない　集一
白々しい嘘が土産の深夜二時　尚士
正直に生きたい白を白と言う　螢
白を白と言ってはいつも独りぼち　房枝
幾重にも染まり白紙に戻れない　美智子
白旗を上げるにもあるタイミング　庸佑
白い手を汚さぬように握手する　茂雄
燃えるもの包みきれずに白い秋　明子
まっ白な薔薇だって有るのです刺　潤子
敬白と奥さまからの火の封書　ばっは
長いことにんげんでした白い蛇　章峰
前歴はしゃべらぬ白い再生紙　昭二
美しい雷鳥の白雪の白　蘭幸
情報の洪水に酔う白い紙　(沢)和子
白状をすれば芋蔓式になる　公子
炙り出されるまでは白紙という覚悟　森子
メランコリー白いカラスを見た日から　みつ子
白骨が東を向いている凍土　久峰
白々しいお世辞も時にいいもんだ　恭昌
伝えたいことがいっぱいある余白　葉子
百八十個しきたり守る囲碁の白　功

事故現場白いチョークで描く命　和夫
人間の脆さを包み込む白夜　柳弘
灰色は白とみなすという裁き　久子
わたくしであるため白い曼珠沙華　恵子
純粋の白と争いたくはない　扶美代
アリバイに手を貸す友がいてくれる　英子
白いもの白く洗えた日が嬉し　美代子
少し白混ぜて優しくなる個性　登美代
白無垢を真っ黒にしていのち彫る　邦子
ひとつ忘れふたつ忘れる萩の白　惠美子
白旗を用意してから売る喧嘩　昌紀
おもいっきり汚れた白が似合いそう　忠
金積めば少しは白くしてくれる　完司
その下に闇抱く白紙委任状　みつこ
怖いから白紙に戻る位置にいる　和郎

佳

白すぎるから疑いを持っている　夕胡
泣けるだけ泣いても白に戻れない　梓
証拠品出るまで白を切り通し　天笑
上塗りの白からもれてくる事実　ちかし
白波がものいいたげに寄ってくる　宏子

人

神様に白紙委任をして眠る　幸雀

地

美しい人はやっぱり白いまま　月子

天

辞職するための白紙がおいてある　夢草

軸

光秀の下着はたぶん白だった

兼題「奥」　福士　慕情選

てにをはの奥が深くて抜け出せぬ　登美代
少年の心の奥に乱気流　あずき
商談を白紙に戻す奥の咳　由一
この奥は行き止りだと書いておこ　菜月
黒幕が奥で胡座をかいている　恵子
冗談の奥にたっぷり塩胡椒　楓楽
その奥はだあれも知らぬ楽園だ　月子
奥底に喜怒哀楽を眠らせる　森子
引き出しの奥がいちばんバレやすい　理恵
情念を心の奥に飼う阿修羅　郁夫
胃袋の奥まで秋の風を吸う　完司
目の奥に信用せんと書いてある　忠
燃えさかる心の奥を見て欲しい　ルイ子
鏡の奥に女の歴史折りたたむ　いわゑ
奥の間に通され脈があると読む　庸佑
奥の手を出してトカゲは尻尾切る　和郎
毒蛇かも知れぬ奥さん綺麗すぎ　健吾
お役所の奥で裏金貯めている　毅
源流に分け入る登山靴の泥　肇
微笑みの奥に本音を畳み込む　美義
金策も尽きて奥歯が痛み出す　正雄
ポケットにまだ奥の手が一つある　碧
熊に似ている山奥に住んでいる　蘭幸
仏壇に行ってきますと旅の朝　愁女
靖国の奥にかくれている本音　ちかし
骨の髄まで大阪人でシャイである　啓子
奥の手はびっくり箱に隠しとく　美千代
かさぶたの奥にほんとの傷がある　章子
ワイングラス心の奥とたわむれる　舞夢
礼智信心の奥にあるきまり　天笑
談合を取り仕切ってる奥座敷　博泉
飛鳥美人奥まで見せたのが誤算　冨美子
奥の手を先に読まれていた不覚　久峰
奥襟を取られ卑弥呼の言うがまま　直樹
奥の間に空気の抜けたおばあちゃん　公誠
胸の奥にしまっておこう赤い薔薇　シルク
屁理屈をこねる奥歯を治療する　ますみ
奥の奥仰山金のいる八卦　ばっは
入口に立ったときには見えぬ奥　あきこ
戦あかん九条の奥にやさしさ　ダン吉
奥の奥見て来たような評論家　蛙城
ポケットの奥でどんぐり歌い出す　敬子
究極の奥の手惚けた振りしとく　玄也
私を探すと奥に海がある　きみえ
奥の手にチラリ火種を見せておく　寿子
この奥に寝てますうちの粗大ゴミ　里江
この山の奥に松茸出るらしい　美花
さぐるのは止そうあなたの胸の奥　光枝
くにゃくにゃにする奥の手を知っている　重人
踏み込んでみれば案外いいひとだ　夕胡
奥座敷まだ義母のいる声がする　邦子
夕焼けのその奥あたりもう浄土　洋
佳
胸奥に不法駐車の人がいる　寿美
目の奥が乾いて海が見たくなる　無限
奥つ城を父の背洗うように拭く　順風
月あかり胸の奥まで忍び込む　淞丘
つくり笑いのその奥は夜叉だった　典呼
人
繃帯の奥まで沁みてきた夕陽　扶美代
地
昭和史の小骨が喉の奥にある　幸雀
天
美しい国も女も目の奥に　恵美子
軸
みちのくの山の滴が海へでる

兼題「ドラマ」　古久保和子選

最高のドラマあなたと生きている　夕胡
美しい国のドラマと消費税　典呼
ヒロインのサインをもらうエキストラ　保州
まずオギャーおっしゃってからドラマなり　哲子
現実のドラマへおんな体当り　寿子
私にもドラマがあった二十歳の日　忠子
朝ドラを見ないと主婦をしたくない　忠
熟年の離婚男は悲劇なり　淳司
おトイレに途中で立てぬサスペンス　朋月
助手席の髪一本が生む修羅場　幸雀
間違いメールドラマの幕が開く予感　みつ子
ドラマならここで助っ人来るはずだ　昌紀
知らなんだ亡父と亡母とのメロドラマ　倫子
わたくしのドラマわたしが書く傘寿　章峰
最近は芋たこなんきん見ています　義
ある日突然一人芝居になるドラマ　公子
メロドラマよりも喜劇で世を渡る　准一

とりあえず主役以外は殺される　六助
ただ夢中端役で生きた五十年　生枝
いねむりにドラマの急所奪われる　蕉子
政界のドラマのギャラは税ですね　四郎
あほくさとドタバタ喜劇見て帰り　蛙城
夢と現実のギャップにある喜劇　天笑
新しいドラマ夫の割亭着　慕情
泥くさい恋にもドラマありました　俶子
雑踏のひとりひとりにあるドラマ　黒兎
ドラマならとうにハッピーエンドです　月子
黒マグロ築地に来るまでのドラマ　啓子
一滴の水に終りのないドラマ　淞丘
ヒロインを読者の声で死なせない　正雄
ドラマチック過ぎて軽々語れない　(志)千代
みんな主役産まれる時も死ぬ時も　昌枝
同居して大河ドラマの渦の中　冨美子
回転寿司のお皿に乗ってきたドラマ　大輪
これからが私のドラマ翔ぶのです　ばっは
四コマのドラマで終る誕生日　瑠美子
わたくしのドラマは君のことばかり　義昭
皿洗うこれもわたしの行くドラマ　桂子
ドラマにも嫌われ役がひとりいる　無限
花の中で死ねるドラマを考える　文子
お隣のドラマ茶碗の割れる音　雅枝
NGで終った僕のラブドラマ　正美
安田講堂にある団塊のドラマよ　邦子
少年のドラマに冬がやってくる　螢
秋日和昨日のドラマひとつ干す　篤子
ドラマ完結柩の中は花ばかり　夢草

にんげんが好きでドラマも一行詩　光枝
ドラマならここらでトップ転ぶはず　求芽
鍵開けた途端とんでもないドラマ　希久子
ゆく夏がドラマ完熟させて秋　登美代
やがて干し柿になる渋柿のドラマ　美代子
日が昇るドラマチックな風連れて　碧
佳
誤字脱字ドラマにならぬ僕の過去　萬的
ご先祖のドラマ大事に稲を刈る　公弘
蟻が死んだドラマたくさん見せてくれ　ダン吉
短編ドラマ主役交代制である　扶美代
ドラマチックに消えて流石と言わせよう　完司
人
渇く日はドラマの森を出られない　朱夏
地
凡人のドラマがゆったりと進む　あきこ
天
ひらがなのようなドラマになる姉妹　惠美子
軸
億光年今この時に会うドラマ

兼題「まつり」　河内　天笑選

塔まつりあの手この手で育て上げ　智彦
ピーヒャララ聞くと身体が躍り出す　満作
今日だけは大目に見てねまつり酒　雅枝
世話好きの親父酒好き祭り好き　柳弘
白粉の鼻が嬉しい祭の子　あずき
やぐら組む男の顔はもう祭り　恵子
笛太鼓もう腰が浮く祭り好き　愛論

宵宮の雨へ浴衣の二人連れ　千歩
恋泥棒が氾濫をする夏祭り　扶美代
千年のまつり受け継ぐ法螺が鳴る　桂子
頭から足の先までまつり馬鹿　慕情
ふるさとはまつり太鼓で生き返る　博泉
まつりの日しか食べられぬ干し鮑　盛夫
生きている喜びうまいまつり酒　武史
孫ひとり保護者六人雛祭り　毅
毎日がまつりのような人と居る　千里
古里の祭りの匂い懐かしむ　洋介
胎教にまつりばやしを聞かすママ　房枝
おまつりのような法事になっている　義
百歳のお通夜まつりにさせる酒　健吾
マスコミへ祭り売り込む村起こし　集一
靖国の森もきいてる祭り笛　とし子
偽装とは知らず神主地鎮祭　時雄
まつり太鼓渋滞の波ひきつれて　蕉子
合併の波に呑まれた笛太鼓　幸雀
過疎の村祭囃子が消えかかる　章久
まつり好きペットもハッピ着て走り　香代
生きがいがお祭りだった白い足袋　(久)千代
しきたりの生き続けてる村まつり　理恵
古里のまつりに合わすクラス会　梓
初恋と遇う単線のまつり笛　アキ
爺さまが孫にまつりの酒をつぐ　螢
祭り馬鹿そんな男がかわいくて　(矢)五月
商売はほったらかしの祭狂　東吉
おまつりへ何がなんでも取る休暇　まみ子
いつ来ても祭りのような子沢山　俶子

ギャルみこし天神さんも目を細め　菜月
沿道を沸騰させるギャル御輿　弘一
男には裸まつりという戦　朱夏
盆が明け地車囃子燃える街　ダン吉
はるばると見たい逢いたい夏まつり　康子
人口が二倍になった村まつり　茂美
だんじりの屋根で完全燃焼す　楓楽
まつり前線過ぎれば元の虫の秋　和夫
ひとり旅まつりの笛についてゆく　孝一
外に出て祭囃子を聞かせたい　小雪
一年のガス抜きとなる秋まつり　正和
念力で晴天にする秋祭り　啓子
リリリンリンチンチロチンと虫まつり　完司
だんじりの街で育って妻勝ち気　正美

懇親宴　お料理を前に

まつりには帰ってくるさ風来坊　かつ子
そーりゃそりゃいか焼きを手に渦の中　直樹
佳
生前葬祭ばやしで幕が開き　ふりこ
独り居をもっとひとりにする祭り　千恵子
悪ガキが揃い祭りを盛り上げる　無限
婿殿も打ち解けだした村祭り　保州
寸胴もあっけらかんのギャル御輿　淳司
人
やあやあやあ塔のまつりへ羅漢たち　寿美
地
一年をこの日のためのまつりバカ　美千代
天
三代の心は一つピーヒャララ　山口光久
軸

お祭りに恋をしているお兄ちゃん

懇親宴

懇親宴は午後五時から、葛城の間で九六名の参加で開催された。

司会進行は、井伊東吉・鴨谷瑠美子が担当。開会の挨拶は鳥取の土橋螢氏。番傘本社副幹事長森中惠美子さんの乾杯の音頭が続き、お待ち兼ねのアトラクションの幕が開く。

皮切りは剣舞を伴った丹後屋肇氏の本格的な詩吟。続いて小島笑司、吉川寿美、奥村五月諸氏のパフォーマンス。恒例の河内月子氏のフラダンスが出る頃には会場は一気に盛り上がる。本年度路郎賞受賞の米澤俶子さんもフラダンスでご自身の栄誉に花を添える。

喉自慢のお歴々のカラオケは、華やかな現役時代を髣髴とさせるお見事な熱唱。宮崎シマ子さんの「河内男節」が出て、いつか会場一杯踊りの輪になり、鳥取の新家完司氏の巧みな誘導で、「貝殻節」「青い山脈」「星影のワルツ」等の大合唱に。豪華な膳と併せ、心を通わせあった秋の一夜であった。

最後に天根夢草「川柳展望」主幸の音頭で万歳三唱。閉会挨拶は弘前の櫻庭順風氏。来年度の再会を約し宴に幕を下ろした。

冨美子記

祝電拝受（敬称略）川柳塔鹿野みか月

御芳志御礼（敬称略・順不同）

西出楓楽　鶴田遠野　長浜美籠　奥田みつ子
仁部四郎　前たもつ　木本朱夏　鴨谷瑠美子
新家完司　福士慕情　米澤俶子　西尾美与子
小島蘭幸　森山盛桜　川端一歩　山本希久子
中原諷人　河井庸佑　山本義子　瀧本きよし
鈴木公弘　坊農柳弘　鍛原千里　古久保和子
本田智彦　伊藤玲子　都倉求芽　竹治ちかし
山本蛙城　喜田准一　松原寿子　西口いわゑ
天根夢草　籠島恵子　寺井弘子　石倉美佐子
土橋　螢　永田俊子　安永　春　板尾岳人
堺川柳会　京都塔の会　川柳塔鹿野みか月
川柳塔みちのく　川柳塔まつえ吟社
美研アート

参加者の感想（五十音順）

赤松ますみさん（川柳文学コロキュウム）

とても楽しい雰囲気でした。お話「さぶりせんりゅう」は、思わずメモをとりたくなるいいお話でした。川柳塔の前向きな風を感じて、他柳社として出席させていただき元気をいただきました。

板山まみ子さん（同人・可児市）

まつりの参加は二度目です。大会には裏方さんの準備が大変だろうなと思います。句会では奇を衒わない句が抜けることを実感しました。それから川柳界も女性の方の活躍、ウーマンパワーを感じます。私共の小句会も9人中6名が女性です。「川柳茶ばしら」へもお越し下さい。

伊藤玲子さん（同人・出雲市）

何度かまつりに参加しましたが、三年前に出席しました折に薫風先生と、竹治ちかし出雲会長とで撮りました写真のこと思い出しています。この度は路郎賞準賞二席の賞を頂き喜んでおります。まだまだ未熟ですが、よろしくお願い申上げます。

あかあかと塔の灯もえているまつり　玲子

江見見清氏（同人・豊中市）

すべてにスムーズな進行だったと思います。お話「さぶりせんりゅう」に川柳の遊び方を学びました。大変参考になり、誰かに伝えねばと思います。句会では、新顔、遠方の方、他柳社の方と多彩な顔ぶれに出会うことができ、うれしく思いました。

小島笑司氏（同人・岸和田市）

全国の諸先輩が一堂に会してのイベントはさすが圧巻です。私もまつりには四度目の参加ですが、柳友の顔も大分憶えてきました。それに作品の柳格とでも申しましょうか、それぞれの視点、スケールの大きさが徐々に把握できますと余計楽しくなって参りました。継続は力なりと私なりに感じております。

佐甲昭二氏（同人・高槻市）

川柳塔の同人にしていただき喜んでいます。喜ぶばかりでなく、同人に恥じぬよう頑張りますので御指導よろしくお願い致します。

土橋　螢氏（参与・鳥取市）

懐しい友だちに会いたくて、鳥取から新家完司さんの車に乗せてもらって来ました。生きているってこんなうれしいことはない。大会では四句入選、盟友と秀句に出会い、この上ない喜びです。「さぶりせんりゅう」のはなしもとてもおもしろかったです。

生きている証明に来年も出席したいと思っています。

福士慕情氏（理事・弘前市）

大きな会での選は初めてでした。時間に追われ、佳句を見落しているのではと不安です。11年から毎年参加させていただいておりますが、とても楽しい雰囲気です。来年も来たいです。他柳社の方にもお目にかかれてよかったと思います。

松本文子さん（理事・島根県）

早朝より貸切りバスにて出雲を出発。おにぎりや飲み物を口にしながら懐かしい大阪へ。出雲からは伊藤玲子さんが受賞され、いやが上にもお祭り気分は盛り上がりました。

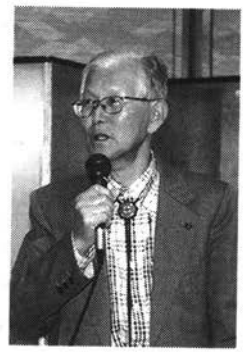
栞先生の頃から出席して十数回になるでしょうか。時代の移り変りをしみじみ思いながら大阪の空気を吸い川柳の和にひたりました。

一つ言いたい事。同人総会に出席できない人達の為に、決定内容例えば「役員改正の内容」等、一言話して頂きたかったと思います。

森中恵美子さん（番傘川柳本社）

川柳塔さんの川柳は根底に家族への愛がある。家庭的なムードが作品にあらわれていてなごやかで温かい。いい雰囲気の大会だった。

（文責　編集部）

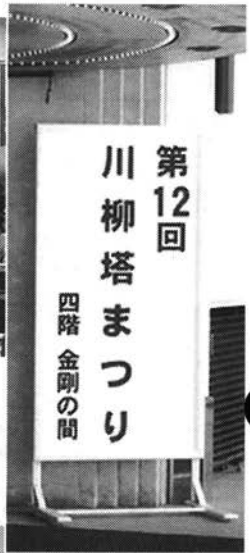


懇親宴閉会の辞
桜庭　順風氏

川柳大会参加者

総数　243名
（順不同・敬称略）

【青　森】今　愁女　櫻庭順風　福士蕉情
【岐　阜】鶴留巳百合　板山まみ子
【愛　知】早川盛夫　関本かつ子
金子美千代
【京　都】稲葉冬葉　都倉求芽　高島啓子
中野六助　桝本宏子　松本甘鬼　山田葉子
【大　阪】浅野房子　安達忠央　赤松ますみ
穴吹尚士　油谷克己　阿萬萬的　伊藤アヤ子
天根夢草　井伊東吉　池　森子　指宿千枝子
池上清治　石堂潤子　石森利昭　榎本日の出
板尾岳人　井丸昌紀　岩崎公誠　岩佐ダン吉
上嶋幸雀　榎本舞夢　海老池洋　太田とし子
江見見清　大川桃花　太田　昭　太田扶美代
大谷篤子　大橋鐘造　奥　時雄　鴨谷瑠美子
岡本久峰　奥村五月　乙倉武史　川久保睦子
柿花和夫　籠島恵子　笠井欣子　桑田ゆきの
笠島惠美　加島由一　河井庸佑　神夏磯典子
河内天笑　河内月子　川端一歩　源田八千代
川原章久　吉川寿美　楠　昭子　古今堂蓿子
栗田久子　熊代菜月　小島笑司　齋藤さくら
小谷集一　坂上高栄　坂上淳司　佐々木満作
佐甲昭二　沢田和子　澤田定子　柴本ばっは
志田千代　杉本義昭　高杉千歩　鈴木いさお
高田博泉　谷川勇治　谷川生枝　神野千恵子
玉置重人　伊達郁夫　谷口　義　瀬戸まさよ
丹後屋肇　堤　楢代　津守柳伸　高田美代子
土橋房枝　鶴田遠野　寺井弘子　瀧本きよし
寺川弘一　富田美義　中岡香代　田中由起子
内藤光枝　中井アキ　長濱賢山　津守なぎさ
中崎深雪　中野健吾　西川更紗　津田シルク
西出楓楽　野田栄呼　坂東倫子　羽田野洋介
福岡末吉　藤井則彦　藤井正雄　平嶋美智子
藤田泰子　本田智彦　前たもつ　津村志華子
前原正美　升成　好　松村里江　長谷川春蘭
水野黒兎　三宅健一　村上玄也　中村れんげ
村上直樹　籾山隆盛　森　茜　冨山ルイ子
森田明子　森　廣子　森本弘風　徳山みつこ
森村美花　矢倉五月　安田忠子　出口セツ子
矢野　梓　山本蛙城　雪本珠子　松尾美智代
吉岡　修　吉川弘泰　吉田富美　松尾柳右子
吉村一風　吉村雅文　米澤俶子　宮崎シマ子
米田水昇　和気慶一　若松雅枝　宮本かりん
森下愛論　森中惠美子　森元ふみよ
山岡冨美子　山川日出子　山本希久子
山本美代子　吉田あずき　吉田喜代子
【兵　庫】石原歳子　伊勢田毅　足立千惠子
片山　忠　亀岡哲子　北野哲男　奥田みつ子
黒田能子　田中章子　田辺鹿太　久保田千代
坪井孝一　中井大八　長浜美籠　七反田順子
西内朋月　萩原典呼　古川奮水　西口いわゑ
堀　正和　本田律子　丸山一之　牧渕富喜子
山口光久　山本義子　両川無限　松下比ろ志
【奈　良】安土理恵　鍛原千里　居谷真理子
河合茂雄　坊農柳弘　米田恭昌　飛永ふりこ
渡辺富子
【和歌山】榎原公子　柏原夕胡　上地登美代
川上大輪　喜田准一　木本朱夏　古久保和子
楠見章子　小谷小雪　武本　碧　宮本三喜夫
田中輝子　堂上泰女　福本英子　松尾和香
松原寿子　三宅保州　たむらあきこ
【鳥　取】安達　功　糀谷和郎　土橋　螢
斉尾邦子　新家完司　鈴木公弘
【島　根】伊藤寿美　伊藤玲子　小豆澤歌子
岸　桂子　城　多喜　銭山昌枝　園山多賀子
原　章峰　松本文子　三島淞丘　多久和敬子
森　茂美　竹治ちかし　吉岡きみえ
【広　島】小島蘭幸
【佐　賀】仁部四郎
【熊　本】岩切康子



川柳塔まつり開会の辞

満席の会場

受付風景→

受賞風景

森中恵美子さんを囲んで

ずらり並んだ新同人

懇親宴開会挨拶

誹風柳多留一一篇研究 15

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭
清　博美

90　**どらが居たならとまくりを母のませ**

小栗　まくりは、海人草。煎じて回虫・蟯虫の駆除薬に用い、また、甘草。大黄を加えて、新生児の胎毒を下すのにも用いる。（「日」）

息子の嫁が赤ん坊を産んだので、「あのどら息子がここにいれば…」と嘆きながら、赤ん坊に胎毒除去のまくりを飲ませている母親。妊娠している女房に見向きもせず遊び歩いて、家に寄りつかぬ困った息子なのである。

清　賛。勘当は考えられないか。

91　**げたつ物語て当る村だんぎ**

小栗　解脱物語は、一念発起して、煩悩の束縛を解き、生死の苦迷を脱したという昔物語。演劇にも『大蛇解脱物語』または『解脱の景清』などがある。（「辞彙」）

談義は、仏教の法義や宗旨について解き明かすこと。説法をすること。（「日」）

句意は、田舎のお寺で行われる談義で、解脱物語が大いに人気を博したということ。まともな教義の話よりも講釈まがいの話の方が、田舎の人には喜ばれると言いたいのだろう。ここで「解脱物語」は、談義僧は浄土教関係が多かった（『世界大百科事典』）ことや参考句を考え合わせると、浄土宗布教の説教として語られていたとされる、祐天上人霊異譚のいわゆる『累（かさね）解脱物語』に特定してもいいように思われる。

村談義累解脱でゑらく当テ　六九10

増田　賛。「げだつ物、語って」と訓めませんか。

清　賛。小生も増田氏流に訓んでいた。確かめたところ。三省堂の索引は「げだつ物語で」となっていて小栗氏式の訓み。この索引も、もともとは小生がカードを作って訓んだもの。ヤレヤレ！

92　**鈴の音がやむと友成たびへたち**

小栗　友成は、謡曲『高砂』のワキ阿蘇の宮の神主。

能の上演順序を詠んだ句で、『翁』が終わると一番目物（脇能）である『高砂』が始まることを、このように表現したもの。

『翁』は「能にして能にあらず」といわれる一種の祝儀の舞で、将軍宣下祝賀能や勧進能など公式の催しの冒頭に演じられるが、最終「鈴の段」で「三番三（さんばそう）」が鈴を持って舞い、終わりとなる。「鈴の音が止む」と続いて脇能となるが、代表的な『高砂』では、ワキ「そもそもこれは九州肥後の国、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候ふほどに、このたび思ひ立ち都に上り候」とあって、「友成旅へ発つ」なのである。

なおこの句雨譚注に、

「国家老　非　三番叟から高砂」と記されている。

清　賛。

93　**山公事も甲斐と駿河ハきついはれ**

小栗　山公事は、山林に関する訴訟。（「日」）

晴れは、晴れがましいこと。表立ってはなやかなこと。さえぎるものがなく、広々とした所。（「日」）

同じ山公事でも、甲斐と駿河で日本一の富士山の境界を争うとなると、これは大変に晴れがましい、どでかい話だということ（万句合の前句「よいけしきなり」）。実際、富士山の境界争いは何度かあったようで、『富士吉田市史』によれば明和九年に富士山頂上国境について争いが起こり、安永八年に裁許された事件があったようで、主題句は、意外に時事性の強い句かも知れない。

伊吹　賛。実際にあった話とは知りませんでした。

清　今でも山梨県と静岡県で山頂の領地争いが続けられている。なお、最近山頂が国の管理から富士宮浅間神社の私有地として正式に移管された。

94　**能娘もってあらくれ武士に成**

小栗　荒くれは、気質や動作の荒々しいこと。（「日」）

「妾が兄」ならぬ「妾が親」。殿様の妾になった娘のお陰で、父が取り立てられて荒くれ武士になったということ。戦場で武勇を奮う荒くれ武士ならば頼もしいが、こちらはもっぱらがさつなだけであることはいうまでもない。

娘ゆへ生れもつかぬ武士になり　七五22
おやにて候ものへ御ふちをねだり　一五12

清　賛。

95　**真ッさきのむれ田楽の字に当り**

小栗　当たるは、正しくあてはまる。（「日」）

ここで真崎は真崎稲荷のこと。橋場の隅田川縁にあり、甲子屋など豆腐田楽の茶屋が有名だが、川柳では、ここから吉原へ繰り込むことになっている。

句意は、これを踏まえて、真崎稲荷に群れている連中は、まさにここの名物である「田楽」の字にぴったり、つまり吉原田圃で楽しむ輩だ。ということ。

田楽ハ田でたのしむのよみがあり　九11

清　賛。

96　**永ィ日がすむと跡からお春なが**

小栗　永日は、日中のながいこと。多く春の日にいう（「日」）。＝春の日の長い時。日ながにゆっくり再会しようの意の挨拶語（大久保・『江戸語辞典』）。＝年末に、人と別れるときのあいさつ語。新春の日永になって、ゆっくりお目にかかりましょうの意（「江」）。

春永は、昼間の長い春の季節。多く年の初めを末永く祝っていう語。（「日」）

この句、先人の解があり、柳雨「年中行事」には「男の礼がすむと女の廻礼」と頭注、また「辞彙」の「永日」の項では「男礼者の次に女礼者」と脚注がある。想像するに、年礼で「永日」と挨拶するのは男性であり、「お春永」と挨拶するのは女性だということを前提にしての解説であろう。

永日の時を期さぬハのむ礼者　二七15
娵の礼おはるみじかに成て出る　二六22

増田　賛。明治の人には、こういう語感は普通だったのでしょうね。

清　賛。

相談役 黒川紫香氏を悼む

平成18年9月23日没
壽覚増栄信士　享年百歳

後生の一大事

土橋　螢

紫香先生逝去の報に接し謹んで哀悼の意を表します。

秋分の日午前十時頃親戚の土橋善明さんから「紫香先生がお浄土へ参られた」と聞いてびっくり。そして仏壇に香を焚いて、その夜に川柳塔社編集部から「追悼文を用意せよ」と電話がありました。紫香先生は川柳塔社の路郎・生々庵・栞・薫風・天笑先生五代を補佐してこられました。九月号に「黒川紫香相談役は8月12日に満99歳の白寿を迎えられた」と載っており、後に続けと呼びかけていました。

時々は看護師さんに叱られる　川柳塔929号

待望の食事許され元気つく

17年7月橘高薫風先生追悼川柳大会の翌日、武庫町の介護施設を新家完司さんとお見舞いにお伺いした時はとてもお元気そうでした。

そして昨年の川柳塔まつり（10月10日）にはヘルパーさんに付添われて車椅子でお元気な顔を見せられた。

美しい顔してうそをついている　川柳塔948号

病院を出られず雨の音を聞く

言う事が言えない口のもどかしさ

退院の見込みがないと言われても

窓越しに聞き馴れた声がする

されば、人間のはかない事は老少不定のさかい誰も明日の日がわからない。紫香先生の教えを守り、私も川柳塔鹿野みか月の相談役をして川柳を続けています。土橋善明さんとご一緒して、葬儀にも参列したかったが、鳥取県川柳作家協会の理事会などで失礼いたしました。

紫香先生のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

合　掌

紫香先生の思い出

永田俊子

二十三日夜紫香先生御他界のお電話を頂き一瞬言葉もなく、お見舞にも参上できませんでしたことを後悔し、百歳の御笑顔を拝見できないことを残念に思います。

ふり返りますれば私が入会させて頂きましてから、ずっと永い間大変お世話様になりました。殊に私たちの川柳の師田中辰二先生と路郎先生がお友達というご縁で熊本の会を可愛がっていただき、紫香先生に唐津大会のあと何度も熊本にお出でいただきましたこと昨日のことのように思い出されます。

また本当にお優しい先生で大阪での川柳大会に出席の度毎に、駅までわざわざお出迎えいただき、お心遣いしていただきました。

尼崎大会の翌日は宝塚劇場を見物させて頂き、川沿いの道を先生と歩きましたことなつかしく、その足で明石の大橋までお連れ頂きました。

大変お元気で車中でもいろいろご説明して頂き、楽しい旅をさせて下さいましたこと、なつかしく当時の先生のお写真をみてお偲び

しています。
あちこちの川柳会にお出かけの時など、旅先から絵葉書をお送り頂いたものを、お元気なお姿が見えるようで、何度も読み返しています。
今年の夏は殊の外暑く、暑中見舞を差し上げましたが、お返事がなくて心配していました。その数ヶ月前に、唯今入院していますという簡単なお葉書をいただき、最後のお便りになりました。
それから私事で恐縮でございますが、昨年長期入院しましてから、足腰が弱り、杖をつくようになりましたので、お葬式にもお伺い出来ませず申し訳なく思っています。
本当に永い間お世話になりまして有難うございました。ご冥福をお祈り致します。合掌

二十四年間の絆に感謝して

中原　諷人

黒川紫香（増太郎）先生には、昭和五十七年七月の〝水煙抄〟初投句以来ずっと温かい絆として親切・丁寧に二十四年間を可愛がって頂くことが出来ました。
それは八月の茗人忌の折、浜村温泉からの前夜祭が初対面の機会となり、本社ご一行の大先輩と共に親しく御紹介くださいました。大会のある度に「来ませんか」の声を頂き、新阪急ホテルを予約され、新春一月十五日の「本社おめでとう会」など列車で参加の折には梅田駅まで迎えに出られるなど絆に加えて優しさも教えられた思いがします。その都度に各地の先輩を御紹介頂いたことも現在の〝みか月〟の力になっております。
ある年の朝、新阪急ホテルのラウンジから突然「嫁さんが欲しいのや…」と言われたものだから「誰が…先生が寂しいの…」へ対して「阪急電鉄の枕木材購入時の際に山陰の地の人情深さを憶えたので孫に…」と白羽の矢を当地へ射向けられたことでした。
幸せなことに、京都の大学を卒業された女性とのご縁があり、大阪と鳥取（鹿野）を繋げる曾孫さんを鶴が運んでくれ大喜びです。
春から秋の「川柳塔まつり」になり心斎橋「大成閣」を上六の「アウィーナ大阪」へと会場を移し、賑やかな大会に育ちました。
畏友の新家完司さんの車に便乗し、高速道の走法など教えて貰い、マイカーの家族参加をさせて頂くまでに育ちました。
その頃から私より妻みさ子・母の汲香の方が多く可愛がられたかも知れません…。何せ宝塚歌劇の寮父も勤められた先生です。「スミレの花咲く頃」・「モン・パリ」など女の情がお好きでした…温泉大好きの先生は蟹が嫌いな方でした…続編を書かねばならぬほど長い人情物語になります…。
この度の訃報に接し、愕然と芯柱の折れた大きな音と揺れを感じます。　合掌

好好爺紫香さんを偲んで

阿萬　萬的

広辞苑によると「好好爺」とは、人のよい老人、にこにこした優しそうな老人とある。全く紫香さんのことを言っているようです。
私も紫香さんと川柳を通じて七十余年お付き合いをいただきましたが、一度だって怒った顔を見たことがないのです。
潮花、水客さんとの句集「三人」の序文に路郎先生、葭乃奥さん等四人の「紫香を語る」の座談会の模様が書かれていますが、どなたも口を揃えて、彼は頼まれると嫌と言った事がなく、口数の少ない実直な人だと称えています。またその中に三十年もの間一度も本社句会を欠かさず句会係の裏方を務められたそうです。

紫香さんが川柳をはじめたのは、当時大阪鉄道局で福田山雨楼さんの指導で始まった川雑大鉄局支部の一員であり紫香さんの親戚に当る正本水客さんの手引きによるのです。

世話好きな紫香さんは川雑岡町支部、北大阪支部、玉出支部などの小句会を発足させています。そして潮花や水客さんを表に、自分は裏方に回っていたのです。

紫香さんの句にはその人柄が現われ温かい人間味があり、少しも派手さやハッタリのない句が並んでいます。

奥さんもまた紫香さんに輪をかけたようなお人好しでしたが、昭和二十三年突如なくなられ、紫香さんは大変なショックだったようです。その時一番に駆けつけてくれたのが路郎先生だったとは、彼が誰からも愛されていた証拠かも知れませんね。当時の句に

父と子の暮しへひよこ一つ買い

家計簿が二月で切れた寂しさよ

雨の駅妻が迎えに来てそうな

まだまだ思い出もありますが、紙面の関係もあり五月号の彼の自選句で締め括ります。

病院を出られず雨の音を聞く

言う事が言えない口のもどかしさ

退院の見込みがないと言われても

美しい顔してうそをついている

追悼紫香先生

桜井千秀

初めて西宮北口句会へ投句させて頂いたのが、昭和59年10月。以来出席は数える程度で誠に申し訳ないのですが、投句は一度も休まずこのたびの右目（黄班変性症）を患うまで続けていました。

中でも西宮北口句会と本社句会日が重なれば、張り切って、句会の梯子となり、とても懐かしい思い出です。

その都度、紫香先生は梅田の駅の雑踏で慣れぬ私を気遣って「こっち、こっち」と手招きして下さいましたのは、先生が今の私と同年輩の頃だったような気がします。

梅田の構内をわが庭のように歩かれて、丼物はこの店が一番、にぎり寿司ならここと、通人ぶりを発揮されました。

中でも忘れられないのが「今日は私のおごりだから特上にぎり、遠慮せず腹いっぱい食べなさい」と、こじんまりした横丁の寿司屋へ連れて行かれました。

カウンターで店主とはツーカーらしく「この人は和歌山で一番会員の多い句会の主幹で生真面目なええ人やでー」と紹介して下さいました。

先生の好物の上にぎりも味音痴の私には通じず、疲れ気味の私は、さっさと店を出て行かれた先生の後から、支払いをすませ追っかけました。

先生との懐かしい思い出のひとこまです。

先生にひょっと逢えそう梅田駅

ご冥福をお祈りいたします。

紫香先生を偲んで

春城武庫坊

九月二十三日朝のこと黒川紫香先生のお宅から「今朝父が亡くなりました」とのお電話を受けて五月三十一日にお見舞いした時の先生のお元気なお顔が思い浮びました。当日はお彼岸の中日できっと極楽へ旅立たれたことでしょう。

昭和五十九年八月十七日尼崎市内の三句会合同で紫香先生喜寿祝賀会を開催、その日に

亡妻に齢貰うて喜寿の箸をとる　紫香

の句を発表されました。昭和六十三年十一月先生は尼崎市文化功労賞を受賞され、翌年平成元年三月受賞お祝い句集発刊記念川柳大会

を開催、出席投句参加者四三四名の盛会で先生は大変お喜び下さいました。

その後西尾栞主幹からお祝いに句碑を作ってあげよと言われ、尼崎市南武庫之荘大井戸公園の古墳の前に句碑を建立。

春夏秋冬古墳の謎を秘める蔦

と紫香先生の文字が刻まれています。

平成四年四月二十三日句碑建立記念川柳大会を開催、その折の先生のお元気で晴々としたお顔は忘れられません。

先生は尼崎市文芸祭の選者を長年にわたり担当され、尼崎、西宮の川柳会に夫々大いなる貢献をなされました。

私共夫婦を川柳人として育てて頂いたことに厚くお礼申し上げます。

安らかにお眠りされますようお祈り致します。

師の言葉胸に刻んで生きてゆく

尼崎市立大井戸公園に
建立された句碑

温かい句柄

奥田　みつ子

〝校門を出ると一年生走る〟の句のようにとても温かい句柄。そして、いつも怒りとは無縁のやさしいお顔。二十年以上、西宮北口川柳会の会長として、いろいろお教え頂き、導いてくださいました黒川紫香先生とお別れする日がきてしまいました。

昭和八年、正本水客氏・丸尾潮花氏と共に麻生路郎先生に師事されて以来、七十年余り川柳を作り続けていらしたわけです。その間句会部長、副主幹、相談役など川柳塔のために尽力され、地方の句会にも度々足を運ばれて皆さんと親交を深められました。

また、旅好きの先生は北は利尻、礼文島から、南は沖縄、西表島まで各地を旅行されました。国内だけでなく、海外もタイ、シンガポール、香港、台湾、ハワイなどへ足をのばされ、その旅行吟、国内五四七句、海外約五十句は川柳句文集『むらさき』に掲載されています。国内五四七句の一句一句に地名と簡単な状況説明をつけられ、紫香先生らしい親しみのもてる旅の様子が窺えます。

平成六年の西宮北口川柳会二十周年記念・黒川紫香会長米寿祝賀川柳大会には、先生の令孫、宝塚歌劇団出身の歌手・美代かほりさんとデュエットをされ、兼題「八」の選者吟には〝米寿がなんだ八艘跳びをしてやろう〟と若い者顔負けの気迫に頭が下がりました。

西宮北口句会には毎月お元気にご出席でしたが、三年程前からヘルパーさんが付添ってこられるようになりました。その後、入退院を繰り返されましたが、病院へお見舞いに伺うと「お風呂へ入れてもらいました」と、とても入院患者とは思えないような、つやつやとピンク色のお顔で笑っておられました。

そして「句集を作りたいから手伝って欲しい」とのことで、お会いする度に句をまとめられましたかとお尋ねしていました。今年三月、有料老人ホーム我孫子へ入所されてからも、伺う度に句集のことお話はしていましたが、とうとうそのままに…。

七月末、西口いわゑさんと二人で西宮北口川柳会から、心ばかりの〝白寿御祝〟を持って伺った時は、いつものにこやかなお顔で喜んでくださいました。来年は〝百寿御祝〟とお約束したのですが。

紫香先生、長い間有難うございました。

（掲載順不同）

弔吟

順不同

百歳を静かなる幕かわやなぎ　本田　智彦
東門のひらく日選び旅立たれ　河内　天笑
あやかりたい人集い来る葬儀場　西出　楓楽
秋彼岸　白寿紫雲にのり給う　奥田みつ子
若い句をまねして僕も百めざす　前　たもつ
九十九歳の誕生日に会えた握手をしましたね　小島　蘭幸
川柳を宇宙の果てへ道連れに　板尾　岳人
紫香師の声が生きてる松浦浜　仁部　四郎
秋分の日が命日をわすれない　小林由多香
シコーセンセーイ！ふんわり丸い秋の雲　新家　完司
穏やかな顔残照にまだ残る　森山　盛桜
死ぬために生きる恩師の影を追い　土橋　螢
校門の傍で紫香の碑と語る　中原　汲香
満月にさらわれちゃった宝もの　中原みさ子
紫香忘をしのんで炎える曼珠沙華　中原　諷人
むらさきの句集に偲ぶ恩師の香　牛尾　緑良
百歳は冥土で迎えられ給う　三宅　保州
天寿全うして紫の雲に乗り　川上　大輪
むらさきの雲たなびきて白寿逝く　田中　正坊
一世紀の歩み見事に果たされた　柴本ばっは
一世紀劃し長老惜しまれる　山本憲太郎
芒ぼうぼう菊に埋れて黄泉の旅　吉村　雅文

百歳の笑顔隠した彼岸花　木本　朱夏
そうだんなあと師が微笑み給う　長浜　美籠
長生きの秘薬やっぱり水だった　川端　一歩
われもまた大先輩を見習わん　井伊　東吉
極楽の塔賑わせに百寿翁　穴吹　尚士
激動のまほろばを生き一世紀　西内　朋月
師の影の列にならべば友がいる　籠島　恵子
赤まむし飲んで秘密という長寿　鶴田　遠野
弥陀の前三人揃って句を作る　阿萬　萬的
あたたかい笑顔しのんでただ涙　松本　文子
面影を偲び静かに手を合わす　吉岡きみえ
まなうらに温顔しのび掌を合わす　園山多賀子
師を偲ぶ面影いつも笑み給う　高野　宵草
おもかげを偲び無常の風に泣く　永田　俊子
百歳のパワーと握手まだ温い　岩切　康子
極楽の句座へみんなに迎えられ　冨山ルイ子
気まぐれな秋と帰らぬ雲の峰　宮西　弥生
百尺の塔の宝輪濃紫　北野　哲男
天命は白寿を待っておりてくる　高田　博泉
秋冷に優しく光る天の星　古川　奮水
紫香の名不滅巨匠は弥陀の手に　中塚　礎石
御教えの声もう聞けぬ巨星逝く　村木　信子
むらさきの雲に白寿の羽やすめ　西口いわゑ
恩愛の深さにお礼言いそびれ　春城　年代
慈顔今黒枠に在りいと哀し　田辺　鹿太
あたたかい句のそのままのお人柄　黒田　能子
温顔な恩師御遺徳しのばれる　河井　庸佑

天寿全う実りの秋に発ち給う　秋元　てる
リュック背の師を思い出す掌を合す　牧渕富喜子
澄み渡る秋晴れの空逝き給う　亀岡　哲子
ふくよかな握手いただく彼岸花　山本　義子
薫風先生呼んでられます紫香さーん　山崎　君子
句会へと誘うお葉書たまわりし　木村貴代子
天国の句座へしずしず虫の声　津守　柳伸
御長寿を祝ったあとにくる涙　浅野　房子
歳も句も追いつけぬ人仏さま　奥村　五月
上壽の師やさしい教えいつまでも　坪井　孝一
ご尊顔を拝すことなく掌を合す　富田　美義
雲の峰　塔の五傑の揃い踏み　吉川　寿美
温顔の光が消えて黙祷す　川原　章久
百翁の即吟に舌まきました　吉岡　修
彼岸花天寿まっとう巨星逝く　津守なぎさ
天国で私を横に坐らせて　太田とし子
弥陀の手に抱かれて恩師雲の峰　津村志華子
曼珠沙華かなしきものに男の背　吉内　福世
またひとつ川柳塔誌の灯が召され　森本　弘風
お名前とお噂だけは・・・合掌　井丸　昌紀
ずっとずっと紫の残照のなか　山田　葉子
初句会笑みくださった師に感謝　田中　章子
お迎えの紫雲へにっこりと乗られ　高島　啓子
パワーもらった御手の温もり忘れない　三宅　満子
紫のかなた白寿に光る星　都倉　求芽
紫香る愛は尽きずに天寿満つ　藤村　亜成

紫香句抄

戸を開ける音さえ違う長女次女
鏡台へ来て女の子静かなり
いい夢はみんなに話してしまう
つつましく住んで表札名刺なり
父と子の暮しへひよこ一つ飼い
朝さむし今日から減った米をとぐ
分担を決めて父と子の暮し
通学と通勤遺骨だけ残し
人妻ときれいな話して別れ
一人ずつ客を見に来る子沢山
子を一人女風呂から届けられ
ちっぽけな相談耳だけ貸して済み
ふとのぞく夜中の月が美しい
どたん場で女の知恵が恐ろしい
また名所おんなじとこを写される
天の声まだまだ君の席はない
十円を拾うて寒い道になる
亡き妻に逢える鐘なら続けよう
屋上へ出て大阪をみせておく
妻の忌にふと歳月をふりかえる
どの辻を折れても京に寺がある
校門を出ると一年生走る
花のある切手で女の文が来る
別々な事考えていて夫婦
過ぎ去れば思い出多い八十二
いいことがあり二ン月の風を切る
いい話だけ病人にして上げる
平成へひばりの唄はまだ消えず
故郷の辻を曲がれば母が立つ
王様の財布小銭が入れてない
方便の嘘に時々縛られる
手を振れば手を振り返す川下り
三世代住んで貸し借りせぬ所帯
二十一世紀へつなぐ私の句碑が出来
下町は屋根から笑い声がする
エビとカニ嫌いと言うと不思議がる
引き立てる役に徹したカスミ草
いい花へ蝶もダブルでやって来る
ドドンドカン判らぬままに跳ね起きる
会う度に地震の恐さ語り合う
半壊の屋根におぼろな月明かり
冬に来て流石と思う日本海
脇役でいて長持ちをしています
さくらさくら日本全国春にする
代案がないから早く済む会議
いい目覚め朝のスープはお喋りで
鬼ごっこ句碑の周りも春になり
ふたりだけで歩く二人の星明かり

『むらさき』『地球の塵』より編集部選出

略　歴

明治40年8月12日　大阪市北区で生まれる。
昭和8年　正本水客・丸尾潮花と共に麻生路郎先生に師事し不朽洞会員となる。
昭和60年10月　川柳塔社副主幹となり後相談役。その他　西宮北口川柳会、尼崎いくしま、尼崎尾浜川柳会他の役員を務める。

賞

昭和38年5月　産業功労賞（大阪府）
昭和63年11月　文化功労賞（尼崎市）
平成9年9月　高齢者特別功労賞（兵庫県）

句集・句碑

昭和33年水客、潮花と合同句集『三人』発刊
平成元年　句文集『むらさき』発刊
平成4年　尼崎市立大井戸公園に句碑を建立
平成11年　川柳句文集『地球の塵』発刊
平成12年　『坂道のある港町』発刊
平成13年　鹿野町川柳街道に句碑を建立

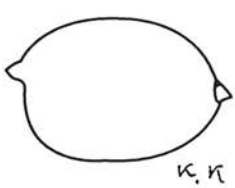
弔　電（敬称略・順不同）

川柳塔社・川柳塔わかやま吟社・川柳塔唐津
熊本川柳会・甲子園川柳社・大原川柳社・川柳ねやがわ・三幸川柳教室・鳥取県川柳協会
小林由多香・川柳塔鹿野みか月　森山盛桜・いずも川柳会　竹治ちかし・高槻川柳サークル卯の花・豊中もくせい川柳会　江見見清・尼崎尾浜川柳会・竹原川柳会　小島蘭幸・土橋　螢・桜井千秀・松原寿子

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「シングル」　川上大輪選

シングルを夢見たクラブ錆びたまま　四條畷市　吉岡　修
シングルと分かってしまうシャツを着る　鳥取市　田村　邦昭
招待券二枚貰って困る僕　岸和田市　森元ふみよ
シングルで虹を渡っていくつもり　出雲市　小豆沢歌子
シングルで気兼ねのいらぬ鼾かく　岸和田市　井伊　東吉
シングル盤好きな歌だけ聴けばいい　京都市　都倉　求芽
シングルでいいから子供産めなんて　東京都　岸野あやめ
シングルがコンビニで買う母の味　松江市　相見　柳歩
何時までもシングルでいる親の脛　大阪市　小糸　昭子
シングルが増えて日本がちぢみだす　柏　市　永峰　宣子
シングルベッド背負っていますカタツムリ　豊中市　谷川　勇治
妻の球片手で捕って叱られる　大阪市　伏見　雅明
シングルベッドいつも片足ぶら下がる　和歌山市　上地登美代
独り暮らしへコンビニという命綱　枚方市　海老池　洋
シングルの準備している妻と僕　堺　市　柿花　和夫
シングルのはずがハブラシ二本ある　三田市　堀　正和

「シングル」　松本文子選

シングルで虹を渡っていくつもり　出雲市　小豆沢歌子
シングルになって世間の風当り　鳥取市　西川　和子
シングルで来て植物園の広さ知る　尼崎市　春城武庫坊
シングルの十年お経うまくなる　豊中市　安藤寿美子
鼾かくのでシングルを予約する　鳥取市　土橋　螢
シングルベッドよりも我が家の古畳　大阪市　小泉ひさ乃
シングルになって人生やり直す　東大阪市　佐々木満作
シングルに秋が深まる時刻表　熊本市　永田　俊子
シングルの渕から夢が落っこちる　和歌山市　武本　碧
乱世を単細胞が泳ぎきる　八王子市　播本　充子
シングルの部屋でも今日は笑い声　藤井寺市　若松　雅枝
シングルライフひらひらひらと回遊魚　和歌山県　森下よりこ
シングルの旅へ残照従いてくる　紀ノ川市　宇野　幹子
シングルの男が回す洗濯機　唐津市　久保　正剣
シングルになると翔びたくなってくる　大洲市　花岡　順子
転がった箸一本が見当らぬ　西宮市　亀岡　哲子

単身赴任ひと雨毎に慣れてくる　鳥取市　中村　金祥
笑っても泣いても独り負けへんで　箕面市　出口セツ子
シングルライフひらひらひらと回遊魚　和歌山県　森下よりこ
満月に吠える独身最後の日　堺　市　加島　由一
シングルとシングルすぐに飲む話　寝屋川市　江口　度
乱世を単細胞が泳ぎきる　八王子市　播本　充子
お柩はすべてシングル仕様です　和歌山県　三宅　保州
シングルベッドよりも我が家の古畳　大阪市　小泉ひさ乃
放された単身赴任金が無い　犬山市　金子美千代
独身の貴族に夜のひとりごと　日立市　加藤　権悟
ペアルックシングルになる謀反劇　東大阪市　森下　愛論
シングルで飛びたい時に飛んでいる　和歌山市　福本　英子
猫を飼う独りがつらくないように　藤井寺市　太田扶美代
土俵上日本人は行司だけ　シドニー　森本クックバラ
ほっといてほしい独身主義者です　和歌山市　柏原　夕胡
シングルを謳歌しているきりぎりす　高槻市　瀧本きよし
シングルで敵ダブルスでコンビ組む　茨木市　藤井　正雄
シングルになる自由さと不自由さ　東かがわ市　川崎ひかり
シングルライフ何時でも鍵は開けてある　松江市　三島　淞丘

秀　句

シングルになって肩凝り忘れてる　豊中市　神野宇乃子
表札は昔のまんまです　ひとり　弘前市　髙瀬　霜石
ラブソングひとりになったとき歌う　和歌山市　楠見　章子

軸　吟

ひとり旅明日の天気は気にしない

シングルもダブルも好きな露天風呂　黒石市　相馬　一花
助っ人はテレビ独りの布団干す　和歌山市　松原　寿子
童謡のシングル盤に傷がある　三田市　堀　正和
生まれる日も一人召される日も一人　西予市　黒田　茂代
シングルになり羊の群れを追いたがる　米子市　白根　ふみ
シングルの自由な夢はむらさきに　出雲市　伊藤　玲子
シングルの悲哀を知っている夕陽　松原市　玉置　重人
シングルにエールをくれるお月さま　鳥取市　録沢　風花
シングルの音符が好きな笛を吹く　府中市　馬場　利子
シングルで頑張る母の底力　出雲市　城　多喜
一人住む花の言葉がよくわかる　西宮市　緒方美津子
シングルで飛びたい時に飛んでいる　和歌山市　福本　英子
シングルにコトコトひびく茹で卵　和歌山市　楠見　章子
シングルマザー父の心も持って生き　堺　市　村上　玄也
猫じゃらし一人暮しも悪くない　東大阪市　谷口　義
シングルの群れると寒い日本地図　和歌山市　田中　すず
シングルライフ何時でも鍵は開けてある　松江市　三島　淞丘
シングルへ大人になれぬ夢つづく　篠山市　遠山　可住
万華鏡我がシングルの華の刻　米子市　政岡日枝子

秀　句

シングルになってみないとわからない　松江市　川本　畔
カップメンひとりぼっちの音がする　弘前市　髙瀬　霜石
命ある限りを生きるひとりの灯　西宮市　牧渕富喜子

軸　吟

神さまもシングルわたくしも同じ

鼻

銭山　昌枝選

松茸は鼻で味わうことにする　(安)泰　子
とても高い理想抱いてるダンゴ鼻　泰　女
ダンゴ鼻臭い話も嗅いでいる　きみえ
鼻息の荒い嫁さんやって来た　那珂子
鼻歌で妻の財布についてゆく　賢　山
鼻だけが人間らしい位置にある　六　助
鼻柱の強さも同じ双生児　シマ子
鼻少し削れば話信じるわ　(福)洋
人生の裏を見て来た赤い鼻　修
父譲り少し長目の鼻の下　勝　視
うごめいた鼻人の目にぶっつかり　四　郎
鼻の差が退職時には二馬身差　水　笑
ネット化で祖父の自慢の鼻が折れ　雅　枝
鼻唄がでた日は何もかもが好き　(岩)玲　子
朝方の鼻にかかった声が好き　柳　歩
食肉のランクは知らぬ気の鼻輪　充　子
鼻柱強いが情けには弱い　正　雄
鼻の利くひとを味方に引き入れる　ミツ子
議事堂へ行くとピノキオ鼻が伸び　北　朗
俄雨土の匂いを叩き出す　高　栄
低くてもいいさ息する鼻だから　昌　鼓
うちの娘でなくて良かった鼻ピアス　セツ子
上を向くちんちろりんの鼻の穴　和　枝
鼻先にいて面倒をみてくれる　螢
ミス重ね鼻っ柱の行き場無し　クックバラ
鼻唄が出て主夫業が板につく　久仁雄
おっとりとまあるい鼻が口火切る　ヒサ子
天下り権力に利く鼻薬　章　久
鼻薬効いたか風がやわらかい　ひかり
天狗の面とれば憎めぬ低い鼻　志　洋
天狗の鼻より高い自信過剰　活　恵
鼻ペチャがチャームポイントなの私　幸　子
鼻薬効いた書類に判がふえ　正　剣
鼻高くなって疑い深くなり　のり子
善人と信じ込ませる丸い鼻　時　雄
鼻に掛けるほどの知識は持ってない　善　信
目も鼻も口も跳んでる福笑い　慕　情

佳

どの鼻になさいますかとクリニック　みつこ
諫言が天狗の鼻に届かない　岳　水
丸い鼻すんなり生きた訳じゃない　美　義
新蕎麦を鼻から先に食べに行く　霜　石
鼻梁高き女で少し不倖せ　扶美代

人

子を産まぬつもりで受ける隆鼻術　富　子

地

接待で飲まされていた鼻ぐすり　遠　野

天

ともだちをいっぱい持ったまるい鼻　大内朝子

軸

ノッペラボーへ目鼻をつけて嫁に来た

チャイム

左右田泰雄選

一回もチャイムの鳴らぬ日の孤独　徑　子
言い訳を考えながら押すチャイム　正　雄
五時からの男が待っているチャイム　千　里
着メロへ目が突き刺さるコンサート　美千代
答案の余白埋まらずチャイム鳴る　ゆきの
お隣のチャイムに返事してしまい　みつこ
チャイムにも人それぞれに癖があり　(安)泰　子
退社時のチャイムは心地よく響く　幹　子
突然のチャイムに焦るバスタオル　扶美代
躊躇して押したチャイムのでかい音　時　雄
車椅子チャイム押す手が届かない　(矢)五　月
やれやれと脱いだ途端にドアチャイム　哲　男
御当地の曲でお昼のチャイム聞く　茶　子
玄関のチャイムの音に身構える　一　花
表札が二つチャイムは別に付け　美　義
家の中母のチャイムでまわってる　(岩)玲　子
都合よくチャイムで切った長電話　昌　鼓
それぞれに自分のチャイム使い分け　一　粋
セールスが土足で鳴らすドアチャイム　賢　子
三度目のチャイムで開ける猜疑心　鐘　造
迷わずに押す天国のドアチャイム　充　子
チャイム鳴るポラショえんやらどっこいしょ　あやめ

中世の夢を奏でるオルゴール　隆盛
クロネコのチャイムを待っている判子　北朗
死神はチャイムを押したことがない　霜石
終業のチャイム待ってるコンパクト　岳水
欝の日の胸のチャイムは電池切れ　シマ子
腕白がいたずらチャイム押して去り　権悟
下校時のチャイムはいつも茜色　六助
高原のチャイム音色もすきとおり　(田)章子
幸せを二人で鳴らすミサチャイム　三代子
虚と実のチャイム鳴らして神頼み　公誠
真夏日の夢かき乱すチャイム鳴る　愁女
ゴミ出しのチャイムが僕を走らせる　孝一
いいことがありそうチャイム弾んでる　ミツ子
ホームレス駅のチャイムで寝起きする　(槌)輝夫
玄関のチャイムを撫でる秋の風　和枝

佳

性格が解るチャイムの鳴らし方　武史
街角のチャイムに合わせ銀杏散る　黒兎
チャイム聞きながら心に描く夢　ルイ子
赤ちゃんの頬をチャイムのようにつく　日の出
母さんのふるさと便を待つチャイム　志華子

人

チャイム押す指が自信に満ちている　茂代

地

銀河へと旅立つ母の鐘が鳴る　富子

天

夕映えのチャイムへ明日を予約する　遠山可住

軸

テレビ付チャイムで器用に受け答え

痛い

有沢せつ子選

痛い足さすって登る喜寿の坂　昌鼓
小さいがとっても痛い目のホコリ　(奥)五月
高齢と医者の一言耳痛い　伊津志
美しくなるなら痛さ我慢する　智加恵
躓いた痛みは伏せて糧にする　活恵
不器用に剥くとリンゴが痛そうだ　愛論
甘えたら少し痛みが楽になり　典子
親友の忠告ぐさり的を射る　富子

碧

青春の痛みが胸の奥に棲む　次男
先生の頭痛のタネを推理する　照彦
痛恨の一言妻が物言わぬ　茂代
日にち薬優しい神の痛み止め　(伊)玲子
手を当てて胸の痛さを和らげる　ルイ子
倒産の痛手友から手が伸びる　隆盛
痛いとことこん突いてする和解　康子
六十歳初めて知った歯の痛み　(矢)五月
腰痛を口実に行く温泉地　千里
後悔が心の奥で痛みだす　岳水
鳩尾が疼く中間管理職　喜子
熱帯夜家計に痛い電気代　章久
酒煙草禁止と医者の痛い罰　正剣
痛い星落してかすむ綱の夢　サヨナラがとっても痛いバスボール　権悟
口喧嘩でも古傷にゃさわらない　(槌)輝夫
痛風になって気付いた酒の量　盛夫
節介のたびに頭痛の種ひろう　茶子
資金繰り頭がいたい町工場　高明
サバイバルお互いさまに胃が痛む　恭昌
膝も歯も頭も財布まで痛い　みつこ
痛かったあの一言で立ち直る　鐘造
世界地図子が痛いとこ聞いてくる　英子
痛風もなんのビールを浴びている　一花
痛いところ言った者勝ち老いふたり　登美代
ライバルへ痛む姿は見せられぬ　雄々
傷つけて以来続いている痛み　セツ子
痛いとこみんな持ってる待合所　善信
ミスしても何も言われぬのが痛い　圭一郎

佳

痛恨の極み心の友が逝く　正雄
足が痛い腰が痛いと怠け癖　螢
リハビリに耐えた涙は忘れない　一知
インタビューマイクに痛みえぐられる　(安)泰子
名人は痛いところをちょっと突く　霜石

人

母叱るたびにきりりと痛む胸　扶美代

地

不登校頭痛腹痛からだった　(志)千代

天

痛むけど歩けるうちは未だましか　富田美義

軸

いつまでも痛むこころにうけた傷

初歩教室

題 ― 柿

三宅保州

【ワンポイント・アドバイス】

見かけでは甘い顔した渋い奴　紀雄

この一句のみ読むと題の「柿」の句とは言い切れません。出来上がったときに題のわかる句になっているか気をつけましょう。

添削例～渋柿の甘いマスクに騙される

しぶ柿と知ってカラスも寄りつかず　光子

一見上手く作られているようですが、発想の平凡さは免れません。例えば強調して、

添削例～渋柿といちばん知っているカラス

里の柿我が成長と共にあり　実千代

悪くはないのですが大上段に振りかぶった堅い感がします。肩の力を抜きましょう。

添削例～私と共に育った庭の柿

いさぎよく今年不作の柿を切る　清

柿の身になり「詫びながら」としませんか。

【同想句】

佳い句ですが同想句があり相討ちということが句会等ではしばしばあります。

［隣の柿を詠んだ同想句］

お隣りの柿がわが家で食べ頃に　章司

美味しそう隣の柿が垣根越え　松風

垣根越し隣家の柿の旨いこと　寿々女

［縁起物の串柿を詠んだ句］

二つ六つ仲睦まじく祝い串　和子

串柿の仲睦まじくニコニコと　雅代

【添削・批評句】

原 吊し柿乾かぬうちに数の減る　冷子

添 つまみ食い誰がするのか吊し柿

原 木守柿ぽつりと一とつ暮秋　ミヨノ

添 秋の深まりを知ってる木守柿

原 寺近く無人の店が柿を置く　乃りこ

添 寺近し柿吊る無人販売所

原 朝市は不揃いの柿籠に盛り　藤朗

添 不揃いの柿でも売れる朝の市

原 マラソンを柿もニコニコ応援す　孝明

リズム感の良い句を心掛けましょう。

添 沿道の柿も応援するレース

原 柿の葉の栞昔が蘇る　萠

具体的な想い出にして栞を生かしましょう。

添 あの人の想い出柿の葉の栞

原 のどこしにつるっと入るよずくし柿　綾乃

添 喉越しを味わっている熟し柿

原 飽食に取り残された柿の実が　(河)洋子

添 飽食に取り残された柿たわわ

原 庭の柿沢山実りジャムにする　忠子

ジャムにしたら若い者も食べることにして

添 ジャムにしたら孫も食べます庭の柿

原 吉野山柿の葉すしの待つ店に　福世

柿の葉すしを強調して

添 お目当ては柿の葉すしの吉野山

原 熟れ加減柿みるカンはカラス並　キヨミ

勘の良いのは誰か詠み込みましょう。

添 柿を見る勘ならカラス並みの父

原 柿のれん手間ひまかけて化粧する　京子

添 手間暇をかけて化粧の柿のれん

原 奈良の都子規が見た柿何処へやら　順子

有名句の本歌取りで法隆寺に限定して

添 法隆寺子規が見た柿何処へやら

原 縁側に干柿ならぶ亡母をみる　玲子

添 縁側に干柿吊るし母偲ぶ

原 柿の木の梢で三ケ月かくれんぼ　節子

添 柿の木を背に三日月のかくれんぼ

原 柿届く父の思いも共に食う　夢

添 柿届く父の思いも噛み締める

原 柿一ツ亡母に供えてたのむ日々　那珂子

供えてで亡母とわかりますから「母」で

添 柿一つ母に供えて願い事

原 柿の葉でサプリを作り自然食　開子

添 柿の葉でサプリメントの自然食

原 干し柿が日向に並びうとうとと　賢治

添 干し柿が並ぶ日向で舟を漕ぐ　利子
原 鈴なりの柿をそっぽむくカラス
添 鈴なりの柿にそっぽを向くカラス

【少し工夫すると佳くなる句】

原 柿を剥く皮の長さを競いつつ　智加恵
　誰と競うかを詠み込みましょう。
添 柿を剥く母と長さを競いつつ
原 吊るし柿ほんのり甘く恋実る　イセ
添 ほんのりと恋も実った吊し柿
原 アルコールが薬渋柿甘くなる　幸
添 アルコール好きな渋柿甘くなり
原 柿右門私の筆はとどかない　映子
添 私の筆は届かぬ柿右衛門
原 年数え柿植えること熟慮する　像山
添 柿植えること熟慮する歳となり
原 柿膾おぼえています亡母の味　美はる
添 亡母の味忘れていない柿膾
原 和歌山の種なし柿を送ります　(白)信子
添 名産の種なし柿を送ります
原 記念樹の柿も豊作子沢山　かずみ
添 亡父植えた柿も豊作子沢山
原 庭先で八年待たず実を結ぶ　雅明
添 亡父植えて八年待たず実を結ぶ
原 記念樹の柿も実って皆元気　貞月
添 記念樹の柿もたわわに皆元気
原 亡父手植え柿はいまだに彩褪せず　(村)信子
添 亡父植えた柿は未だに彩褪せず
原 柿の木のてっぺん残せモズの分　たん吉
添 柿の木の天辺百舌に捧げます
原 隣家へと延びてる柿はプレゼント　宣子
添 お隣りへ延びてる柿はプレゼント
原 柿八年句読点打ち振り向かぬ　道子
添 柿八年振り向いてみる句読点
原 干し柿もドライフルーツと教えられ　宇乃子
添 干し柿もドライフルーツなどと言い
原 鈴なりの柿は今年も地に返す　徑子
添 鈴なりの柿を今年も地に還す
原 熟るる日を待ちわびている青い柿　みさと
添 熟れる日を待ちわびている青い柿
原 柿ひとつ盆に飾ればそこに郷　クックバラ
添 柿ひとつ盆に飾ればそこは里

【佳　句】

柿の葉は吉野の里で寿司を抱く　昇
柿好きが今年の柿の出来を聞き　秋星
カニの知恵借りたい柿の種当たり　みち代
バス降りて西へ柿の木三本目　孔一
甘い世に選って渋柿育ててる　ただよし
柿一つ分け合い食べた友が逝き　満子
柿の種さえ甘くなる恋最中　柳歩
柿を手に寅さんなりの冬支度　寅次郎
冨有柿の堅いのが好き冬が好き　サキ子
ピーポーの音におどろき柿落ちる　きぬ子
はじめての絵手紙に描く柿の色　ヒロ
熟女です柿しぶ抜いた甘さです　俊子
柿くれぬ隣家にカラス差し向ける　六助
枝つきの柿は食べずに壺に挿し　賢山
干し柿を入れたなますが私流　亜希子
亡母の秋もう来たのかと柿に問う　はじむ
渋柿が変身誓い吊るされる　さとえ
鈴なりの柿に見とれて回り道　(高)洋子

【今月の推せん句】

人拒みつづけて柿は渋くなる　宇野　幹子
妥協や怠惰を赦さず信念を貫く正義感が柿の信条であり、作者は畏敬しているのです。

ねんごろに両手で受ける熟し柿　中上千代子
まるで赤ん坊を受け止めるように、「ねんごろに両手で受ける」様が彷彿とします。

渋柿を噛んでおどけた渋い恋　田邊　浩三
シャイな少年が少女の前でおどけて見せる恋心が手に取るように詠まれています。

冨有柿褒めて帰りの荷が重い　土屋起世子
その重さはきっと心地よい重さでしょう。

【私の句】

柿を盗る餓鬼大将も見かけない
古里の柿は皇室御献上

秀句鑑賞

同人吟　安藤　寿美子
―10月号から

川柳をはじめて何年ぐらいですか?と、聞かれると、とても困るのです。忘れるぐらい古いので、心中忸怩たるものがあります。その上私の句は、日常会話の一部だったり、ひとり言だったりして、良い句とはとても言えません。だけど私は川柳が好きなのです。

俳句は止めましたが、川柳にはしがみついています。いつまで経ってもうまくなりませんし、句数も少ないのですが、川柳がなかったら、私はもっともっとつまらない生き方をしていたと思います。

十月号の句は、八月つまりお盆の月に作られた句が多いのでしょうか、ご自身の来し方行く末をじっくりと考え、更に次の世を意識したりして、ご自分をしっかり見つめていらっしゃいます。年齢にかかわらず、時節に応じて、反省や感慨を持てるのは、川柳の一つの効能だと思います。私は八十歳をすぎてから体力気力が衰え、どうしてもひとさまの老境を詠まれた句に心をひかれました。どうか私の偏見をお赦し下さい。

年寄りになり過ぎぬよう気をつける
北野　哲男

巻頭からいきなり背中をどやされました。何かと言えば年齢やからと言って逃げる私を叱って頂きました。でも年齢は年齢です。

アルプスが同窓会の甲子園
加島　由一

出身高校が甲子園の晴れ舞台に来ました。アルプスの風景「君何期や?三十期は前の右の方や、ファールボールに気いつけや。二十期以上は上やで!皆しっかり声出してや!」

価値観の違う夫婦でよく揉める
小川　てるみ

私とつれ合いもこうでした。私はいつも引込んでメソメソと俯いていました。ホントです。高知の女性はしゃんと顔を上げて、御主人を論破なさるでしょう。羨しいです。

価値観が古いまんまで共白髪
菊地　政勝

古くても新しくても価値観が等しいのは何よりと存じます。おだやかな老後です。

二三日履けばそのうち靴に合う
前　たもつ

水は方円の器に従い、足はかっこいい靴にしたがう。ご自分より靴に花をもたせていると見せて、相手を立てながらの、上手な生き方に頭を下げます。

留守番を進んで買って昼の酒
藤井　正雄

「では行っておいで」とドアをしめ、次に冷蔵庫を開け、冷えたビールの缶を手にしてプシューッと開ける音が聞えます。この日の昼寝の夢はさぞ素敵だったことでしょう。

化けて出るなんて余程の事だろう
播本　充子

余程気になる事って、愛憎のもつれか、隠し金か。うちのは、化けて出てこれを説明しなさいよ、と言っても全く出て来ません。ヤツは逃げているのです。アホメが!

老友と会えば一期の別れ言う
松下　比ろ志

老人の心境です。でも毎年一期の別れを言いましょう。ずっとずっといつまでも。

一途って良いなあ胸がキュンとなる
木本　朱夏

このたるんだ世の中にキラキラするような恋一途学問一途に出会った感動です。

口あいた方が飲ませている薬

原　さよ子

小さい頃、祖母がこうでした。匙をつきつけて口をあき、カミカミまでやって見せるのです。その上ゴックンまで……。

笑わない幼な子母の痛み知る

森　茜

この母と子をとり巻く環境を思えば、誰もが居ても立ってもいられない想いにかられます。他人はハラハラ見ているだけで、手の出せない家族だけの問題でしょうか。我々庶民の家庭ばかりとは限りません。上つ方でも。

極楽行きのバスが只今出たばかり

門谷　たず子

次のバスにもたず子さんのお席はありません。その次もその次も、たず子さんのお席があるのは句会行きのバスだけです。ゆっくりご静養なさりながらバスを待って下さい。

温暖化地球静かに狂いおり

田岡　九好

CO2を沢山出している国が、京都議定書にサインしませんでした。近年温暖化が次第に進んでいます。氷山も氷河も溶け、ツンドラも泥になりそうです。偏西風が蛇行し、海水温が上り、豪雨地域と旱魃地域、南太平洋のツバル国はいつか海に沈むそうです。地球を狂わしているのは、地球に住む我々ヒト科の作り出した文明なのです。

あっけなくさよならをする夏の恋

大内　朝子

バシバシと美しい火花を散らす線香花火もジジーッと赤い火の玉となり、ポトリと土に落ちて終ります。夏の恋は線香花火の恋なんですね。

老いの恋これはニキビじゃないかしら

居谷　真理子

ニキビですとも。ニキビは命取りにはなりません。しばらくは赤い痕が残っても、それが消えた頃には、またもや若いハンサムボーイが目につき、私の胸をハラハラドキドキさせてくれるのです。

八十路坂明るい彩を身につける

光井　玲子

敬老の日に嫁が黄緑色のシャツをプレゼントしてくれました。それを着て歩くと、本当にいつも痛い膝が痛くないのです。

老老介護する側すでに先が見え

八田　敏

痛いとは言えず老老介護する

岸本　孝子

老老介護の御苦労は想像を絶します。日常よく話合ってルールを決めましょう。言う事きかない時は、おしりペンペンだからねと。

ひらめきのあるうち遺書を書いておく

佐伯　やえ

きっと誰方かのために素晴らしい事を思い付かれたのでしょう。文章にして残しておきましょう。

書き出しがなかなか出ない遺言書

坂上　淳司

一筆啓上でも拝啓でもなし、心静かにペンを握って瞑想にふけって居られます。

遺書でも書こうか雨の日の無聊

宮尾　みのり

さりげなく、気楽に気楽に、厄介なことをなるべく平明になさいます。

葬送は河内音頭と書き遺す

稲川　惠勇

生駒トンネルを作る際の犠牲者を弔った歌が、河内音頭だと聞いた事があります。洒脱な方ですね。尊敬します。

大山が呼んでる秋の深いそら

山本　正光

私はこの句が一番好きになりました。いつか隠岐への旅の途中見た、大山の秋空に聳える美しい稜線を思い出しています。

—水煙抄

秀句鑑賞

—10月号から

柿花和夫

八月の雲忘れずに赤とんぼ

土屋　起世子

日本最大のとんぼ、鬼やんまは体長十センチ。それに比べて体長四センチの秋茜は晩夏の蟠雲に護られるように、山から平地へ移動。作者に会いに帰ってきたように

随筆はわたし好みの彩で編む

塩路　よしみ

生きている証として、心の底に澱のように溜まるストレスをペンの力で発散させる。非現実的な彩りであっても、他に害を及ぼさない限り著者の自由であります。

血のくさり孫の仕草をあきず見る

脇　俊子

血のくさりとは言い得て妙。ドキッとしましたがDNAではもの足りません。子育ての経験豊かな作者の自信と余裕と愛情から生まれた一句です。

明日なき日今日かも知れぬ遠花火

備後　三代子

日本沈没となれば明日はありませんが、ここでは誰もがやがて行く道のことを明日なきと詠んでおられるのでしょう。一方、誰もが一年後どころか十年後のことも予定して生きております。それでいいのです。たとえ花火のような儚い存在であるとしても

無器用でいつも本気の恋をする

三浦　強一

歌の文句じゃありませんが、恋はいつでも初恋で本気。無器用な人に大人の恋ができましょうや？　どうか安全運転で大人の恋をエンジョイして下さい。

物想う哲学猫のいる窓辺

坂上　のり子

哲学者然としているのは梟と相場が決まっておりますが、少し歳をとった大柄な猫はネズミなど追っかけず、ひたすら飼主を癒してくれるのです。この猫を哲学者と見た作者もまた哲人であります。

検診のまたまた背丈小さくなり

菅田　かつ子

人の椎骨は三十二から三十四個。間が一ミリ縮んでも三センチ以上は背が低くなります。いざ背筋を伸ばし、おしゃれしましょう。

嫁姑酒酌み交わし笑み交わし

阿部　ミツ子

身内の大切な方の告別式が無事済んだ夜。嫁と姑が協力して故人を介護し見送った安堵と寂しさがしみじみ伝わってきます。

物忘れ手柄のように話す老い

岩本　雅代

物忘れを自慢すれば相手も取って置きの物忘れ自慢談をしてくれます。これでお互いホッとしますね。ただし物忘れしたことも忘れるようでは、こんな会話もできないと肝に銘じておきましょう。

スムーズに老化してると医者の弁

岡本　勲

私、腰痛で病院へ行くと老化です、と軽く言われました。覚悟はしていたものの、がっくりです。「スムーズな老化」とは名医の言。納得も安心もできます。

木石を大胆にするサングラス

上嶋　幸雀

照れ屋の好漢が勇気を出してサングラス。積極的はよろしいが人格まで変えないよう。

利き酒に杜氏寡黙に控え居り

神野　宇乃子

北国出身の杜氏の長（おさ）の自信と緊張が下五の「控え居り」で伝わってきます。

私のふるさと

閑人閑話

田中正坊

ふるさとは昭和初年の大阪市　正坊

私は大阪市で生れ、育った。いま中央区となっている東区の伏見町である。薬種問屋が軒を並べる道修町（どしょうまち）の一つ北の町で、街並みは木造の住宅と商家だったが、洋館もあり、平均的な船場（せんば）の町と言えよう。冒頭の句に「昭和初年」としたのは、現在は町の姿が全く変わったからである。

街路はすべて舗装されていたが、荷車か馬車が通るくらいで、子どもの遊び場として開放されていた。学校から帰ると、ランドセルを投げ出し、道端へ繰り出した。誰が誘うともなく集まって、その日その日の思いつきで遊びが決まる。ゴムまりでキャッチボールや三角ベースボール、竹馬、縄とび、探偵ごっこなどさまざま。当時、流行したローラースケートに興じ、付近の街路を滑るだけでは物足りず、御堂筋にまで遠征した。

当時のメインストリートは、路面電車とバスが走る堺筋で、完成したばかりの御堂筋はほとんど人も車も通らず、ガラガラに空いていた。地下鉄が開通したのもその頃で、梅田―心斎橋間をたしか三両連結で走っていたと思う。姉が心斎橋の近くに嫁いでいたので、利用する機会が多かったが、乗客も車両も少なかったためか、夏はヒンヤリと涼しく、冬は暖かかったことを記憶している。

町の樹木は、それぞれの家の前栽（せんざい）にしかなく、緑は乏しかったが、初夏には燕が地面スレスレに飛び交い、青空をバックに赤トンボがスイスイ。夕暮れになると、気味悪い蝙蝠（こうもり）がどこからか姿を現した。ささやかな四季の風物詩で、虫や鳥にもやさしい町であった。

小学校は、今橋にあった集英小学校。市立であったが、道修町の薬屋や北浜の株屋など地元の寄付で建てられた、とびきりモダンでぜいたくな校舎。校庭には木（もく）煉瓦が敷き詰められ、音楽・美術の特別教室から地下室・エレベーターまであり、講堂の窓には、ステンドグラスがはめられていた。それが十数年前に廃校となり、愛日小学校と合併して開平小学校となっている。

その頃の大阪市は、東京市に次ぐ二番目の大都市として隆盛を誇っていた。政治の東京に対する経済の大阪として、いわゆる大企業の本社はほとんど大阪に置かれていた。第四師団司令部が大阪城内にあり、付近一帯が軍用地であったが、市民の醵金で天守閣を再建することとなり、現在の鉄筋コンクリートの建物が完成した。その用地の代償として醵金のほぼ二分の一を割き、司令部庁舎を建てたというエピソードもある。

前記の御堂筋、地下鉄、天守閣に民間のビルと、建設ラッシュに加えて近畿以西各地から続々と市内に流入する人が多く、ますます膨れ上がった。学校などの式典には、君が代とともに大阪市歌が斉唱され、大阪市民であることが、子どもにとっても誇りであった。

終わりに「神農さん」に触れておきたい。薬の町―道修町の氏神である少彦名神を祀る神社の例祭で、十一月二十三日に行われる。派手な祭りではないが、武田・田辺・塩野はじめすべての店が参加し、街路の両側に延々と屋台が並び、人でごった返した。神社では参詣者に張子の虎を括りつけた笹を授與し、それが評判であった。いつだったか、思いついて出かけてみて後悔した。やはり私のふるさとは、私の胸の中にしかなかった。

エッセー

私の畑へいちどいらっしゃい

太田　扶美代

その日も自転車を止めて、三段階になっている畑の柵を開けた。こうしてこの入口の辺に立って惚れ惚れ自分の畑を眺めるのが、私の日課、二、三分の時もあるが、もう少し長い時もある。まあまあわたしの好きな時間でもある。

梅雨の明ける前で、土がふっくらといい按配に湿っていた。ボンヤリ立っていたら、我が家のものではない、小さな西瓜が私の畑に転がっているのが見えた。同じようにキューリも二、三本散らかっている。

西瓜には深く爪を立てた跡があり、キューリはどれもみな少し齧って捨ててある。

ハッと気が付いて、大切にしていたトマトの方を見たが、別段変わった事もなく、私の大好きなトマトには触れていない。

畝と畝との間を猫ではない、三本爪の動物が歩き回ったらしく、湿っている土にくっきりと爪の跡が残っていた。ちょっとワクワクしてきた。

目の前の小さな小さな森からやって来たのだろう。遂に私の畑にも現われた。（というより、来てくれた）

狸がこの森に住んでいる事は前々から聞いてはいたが、周囲に高いネットを張ってあるので多分今まで入る事ができなかったのだろう。我が菜園に、来てくれない狸にいささか淋しいものを感じていた。

ハハーンこの子トマトは嫌いなんだなと思うと、それがまた愉快で、意味もなく可愛くなってきて、親近感さえ覚える。

その日以来、足跡を見るだけの楽しみが続いた。最初はまぎれもなく一頭だったのに、今では複数になってきている。

近くにある農業用貯水池から、毎朝決まって四羽の鴨も来てくれる、別にさほど悪いこともしないので柵は開けたままにしておく。

ガアガアガアと、それはそれは賑やかな一行で、喋りながらパトロールを始める。縦一列の列が崩れることはまずない。「まわれ、右」の形で賑やかに帰っていく。

ジョギングの人や、犬の散歩をさせる人達がひっきりなしに通る。普段、街で会っても知らん顔の人も、ここで会うと挨拶を交して通り過ぎて行く。

そして此処には名も知らぬ大きな鳥や、地ひびきをさせて哭くオンビキ蛙や、喧嘩したり会議をしたり、私達、畑の住民を見て嘲笑う妙なカラス達もいる。

家族からは嫌がられている早起きだけれどこれが私の一日のスタートだ。でも待てよ。もしかしたらこんな些細なことに満足をしたり喜びを感じているという事は、老いてきた証拠なのかも知れない。でもまあ、それならそれでいいか。趣味の川柳にも少し役立っていることだし、ネタに困った時は土や畑の句をよく書く。拙い句だけれど、この畑からこの土から生まれてきた句ばかりである。

情熱が枯れたら土と戯れる
小松菜も主婦も一雨待っている
雑草を抜けば私のパラダイス
嬉しくてカブラの種を蒔きすぎた
正直に咲いてカンナは地に還る

エッセーと称し、思いつくまま気の向くまま思いっ切り自由に書かせていただいた。

第48回豊中市民川柳大会

とき 11月23日（祝）正午開場
ところ 豊中市立中央公民館１Ｆホール
（阪急宝塚線曽根駅東100ｍ）
会費 1,500円（軽食記念品発表誌呈）
挨拶 豊中川柳会　会長　石川　勝
祝辞 豊中市立中央公民館長　西田伸作氏
落語 桂　三若
宿題 各題２句　締切１時

「やがて」	吉道航太郎	選
「リズム」	井上　一筒	選
「本　心」	上野多惠子	選
「まさか」	岡　良三	選
「ユーモア」	吉川　卓	選
「ちぐはぐ」	壷内　半酔	選
「糸　口」	西出　楓楽	選

賞 豊中市長賞ほか　各題に賞進呈
主催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館
連絡先 〒560-0015　豊中市赤坂1-6-9
TEL・FAX 06-6854-1990　石川　勝
又はTEL・FAX 06-6303-7297　本田　智彦

第97回 大阪川柳の会

日時 12月12日（火）17時開場18時締切
会場 北区梅田駅前第２ビル５階第一研修室
宿題 △高い・天根夢草△大根・森中惠美子
△見てる・河内天笑△取引・礒野いさむ　各２句
会費 千円　欠席投句　12月11日迄

原稿募集

○エッセー本文たて20字×70行（１４００字）同人に限ります。
○ひとこと本文たて15字×20行（３００字）この欄誌友も歓迎。
ただし原稿の採否、掲載号、掲載順については編集部に一任して下さい。
編集部

第21回 井笠川柳会誌上大会

蘖（ひこばえ）

課題
「謎」
斎藤　大雄（北海道）
村上　氷筆（兵庫県）
矢沢　和女（兵庫県）
共選
「腹」
森本　芳月（京都府）
高畑　俊正（愛媛県）
岡田　千茶（岡山県）
共選

応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句（計４句）を列記し、郵便番号・住所・氏名・柳名・電話番号所属柳社名を明記し応募料と共に送付下さい。
応募料 1000円（定額小為替）発表誌送付
締め切り 12月８日（金）消印有効
投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会TEL・FAX 0865-62-6200
呈賞 各題共、天位の中から総合成績により句碑贈呈。その他三才入選句に賞呈
主催 井笠川柳会（日川協加盟）

第25回鳥取県没句川柳供養大会

作者の分身の没句を迷わず成仏させてやりましょう（数珠持参のこと）
施主挨拶―両川洋々　祝辞―鈴木公弘
弔辞―日置和紙の里川柳会　読経―藤木大善
焼香―各川柳会会長・参加者全員
とき 12月10日(日)　９時受付・開場
ところ 全労済ビル（JR鳥取駅南、徒歩１分）
（TEL　２２―８２３４）
参加費 精進落しの宴　4500円（昼食・懇親会・句誌）
川柳大会のみ参加　2500円（昼食・句誌）
兼題と選者「敗者復活吟」（この１年間の没句）坪内照光・「出口」大島忠成・「マドンナ」土橋螢「線香」武田帆雀・「どっこいしょ」吉田孔美子・「人類」早川玲坊・「ギリギリ」松川行男「天罰」三原白兎
席題 なし　各題２句　締め切り11時
表彰 総合10位（出席者優先１句１点）
欠席投句 1000円（切手可、作品集呈）12月５日締切
投句先 〒680-0033　鳥取市二階町3-102
植田　一京　宛

全日本川柳誌上大会のご案内
（平成柳多留第12集）

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」（平成柳多留第12集）を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ㈳全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人　**全日本川柳協会**
会長　今　川　乱　魚

課題と共選者（各題２句・連記）

「国　　境」	石井　有人	―― 国吉司図子	共選
「癌（がん）」	髙瀬　輝男	―― 浦　　眞	共選
「　花　」	西　恵美子	―― 仲俣　新一	共選
「移　　る」	野村　秋花	―― 池　　森子	共選
「アメリカ」	渡辺　貞勇	―― 小林　映汎	共選

第二次選者　竹本瓢太郎　大野　風柳　大木　俊秀
河内　天笑　木野由紀子

参加費　２０００円（投句料・『平成柳多留』第12集代金含む）

賞　平成柳多留賞・川柳大賞・ＮＨＫ会長賞
㈳日本青少年育成協会会長賞・㈳全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞・秀作賞（予定）

締切　**平成19年１月31日（水）〈当日消印有効〉**

発表・表彰　第31回全日本川柳栃木大会（平成19年６月）

参加方法　参加用紙（雑詠１句）と出句用紙（２通１組）に記入し、参加費２０００円（振替又は小為替）とともに下記へご送付ください。

〒530-0041　大阪市北区天神橋二丁目北１－11－905
社団法人　**全日本川柳協会**
電　話　(06) ６３５２－２２１０
ＦＡＸ　(06) ６３５２－２４３３
振替口座　００９７０－９－３５７５

花地図

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

川柳塔のぞみ　播本　充子報

バランスの悪い椅子だが捨てられぬ　千里
母さんに小鳩のような胸隠す　乃りこ
もう一杯飲んで割勘元を取り　つよし
スナックの味を覚えた鳩ぽっぽ　哲代
バランスのとれた食事で元気過ぎ　宣子
一泊の留守へ気になる義母の事　方子
偉そうにすればかーるいにんげん味　朝子
バランスはとれてはいるが頼りない　東吉
バランスがとれる薄氷踏んでから　遊花
鳩派でも強行突破する政治　勝
一泊が手頃　老人会旅行　やすお
年金になり関白の座を降りる　尚士
子を産める女性は偉いなと思う　由一
自分では偉いと思う粗大ゴミ　きよし
サマワ撤退平和の鳩は飛ばないが　あやめ
これ以上頑張らないでオバアチャン　リツ
天下取る手相の夫に出すサイン　哲男
一泊へ母はそわそわ美容院　一歩
一泊でも家事から逃れ旅楽し　シマ子
頂点のチーム三拍子が揃い　権悟
バランスを崩さぬほどの嘘もつき　たず子
一泊もしたら出かける諭吉様　保州
偉業まだ探求の道あると言う　賀世子
陰口も噂も全部聞き流す　康子
ふところのバランス崩す夏休み　美代子
つんのめりながらも王道を歩く　充子
偉い人時々狡いことをやる　扶美代
神社にも自由に行けぬ偉い人　那珂子

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

カラフルにプール賑やか夏休み　公美枝
静けさを好み孤独で泳いでる　智恵子
川泳ぐ良かった時代遠くなり　久子
水泳の事故へ冷えびえする酷暑　鈴枝
泳ぎ切る力を持って今日も行く　和代
すいすいと泳ぐ姿へ応援歌　弘子
人並に泳ぐ人生悔いは無い　静江
雑魚なりに権利固持して泳ぐ意地　正光
人を呑む海を忘れず泳ごうよ　雄々

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

健康法薬より効く万歩計　萬的
控え目といういい薬忘れてる　孝一
手加減はせぬと妻から脅かされ　宵草
手加減をするから余計付け上がる　庸佑
躾にも手加減のいる現世相　稲子
いつのまにか孫に手加減されている　葉子
手加減をするから部下になめられる　郁夫
厳しさの中に手加減にじませる　泰雄
手加減はしないと税をまた上げる　尚士
曖昧なジャッジにファン皆唖然　義一
曖昧な返事相続もめにもめ　高栄
曖昧な返事で結ばれ喜寿となる　治三郎
取りようで良くも悪くもなる言葉　秀夫
どちらまでちょっとそこまでほないずれ　公子
あいまいな風に見切りをつけた凧　求芽
どっちつかずの返事好きなのかも知れぬ　きよし
がっかりをした子に今は看取られる　かおり
そのまんま撮れた写真にがっかりだ　宏章
やわらかい言葉で毒を飲まされる　重人
鑑定の家宝掛け軸偽と知れ　武史
逢わないでおけばよかった声美人　幸雀
一生を自分好みに塗りつぶす　活恵
明日に勝つきれいな色に塗り替える　昭
子に託す夢は幸せ色に塗る　勲弘
傷に塗る酒が今夜も足りません　美義
避けられているなと思う誉め言葉　典子
職離れ男のメッキ剥げてくる　とし子
京五山送り火映えて夏はゆく　祐作
暮らしにも夫婦の味が滲みでる　比ろ志
各停の旅でまあるい風に逢う　美籠

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

物溢れ人の心が飢えてゆく　ひかり
意中の人来ると空気が揺らぎだす　かおり
瀬戸の浜見下ろす丘に句碑が建つ　あきら
愛憎の全てを抱え燃え尽くす　賢

敗戦忌語る昭和も遠くなり　八重子
六十路坂竹馬の友の電話増え　寿々女
重宝にされつつ今日も無事に過ぎ　貞月
ゆっくりと今日一日を締めくくる　いさむ
三十五度うだる暑さに身を余し　放任
天からの命さずかり陽が昇る　初恵
砂浜に座り余生の夢を追う　文仙
理屈だけこねてする事空回り　よしみ

東大阪市川柳会　森下愛論報

さそり座の女に触れたふかい傷　シマ子
触れないで私いまにも倒れそう　敏子
名曲に触れて胎児は健やかに　秀夫
昭和史の闇の部分に触れたがる　克己
丸丸と太って悩んでいると言う　和代
硝煙が絶えぬ地球は丸いのに　ダン吉
車座が四角になっていく不安　緑
地球儀を回しこの国揉めている　太郎
丸顔の人を選んで道を聞く　三重子
バス停で見初めた妻と半世紀　太一
バスツアー後援会の票集め　柳弘
造成地バス停が出来嫁が来る　雅文
扇子帯に子連れ女の意志たかし　美子
百均の扇子の風も風は風　風子
舞の手は扇子に多く語らせる　八郎
町娘仲人口を袖にする　高尚
お針子の帰り待ってるお汁粉屋　和子
玉の輿乗る美しい町娘　美弥子
本条小町白いうなじが初初し　良子
町娘め組のまとい追いかける　あや子
大奥で若君産んだ町娘　湖風
カルチャーへ明日追う夢の町娘　愛論

川柳塔唐津　仁部四郎報

鼻欠けの内裏も持ってお嫁入り　晴翠
無学でも数珠揉む祖母の般若経　勝視
陽が落ちて先にあがった夕支度　實
笑うこと大盛りにしてダイヤ婚　正剣
ママの香を夜風に飛ばしただいまあー　蜂朗
辛抱は母と妻にはかなわない　水笑
職退いてノンフィクションを重く読む　四郎
褒め上手歯の浮くような話する　輝夫
中学のむすめお風呂場鍵をかけ　高明

竹原川柳会　時広一路報

ソプラノもアルトもバスもいる蛙　蘭幸
棚田風蛙ピョコピョコ踊ってる　房子
蛙の子それでも夢を忘れない　民恵
飛行雲蛙が見てるボクも見る　力
蓮に座しモネは来ぬかと待つ蛙　慶子
人間のこころ問うてる虫の声　節夫
一つずつ大人になっていく私　千枝
ブランコが揺れると思い出す昨日　史子
並んだら僕が引き立て役になる　菁居
宝クジ初日に並ぶその心理　汎美
箸を並べて残業の夫待つ　笑子
並んだら名もない花も美しい　栄恵
孫ならぶなんと見事な食べっぷり　敬子

佳句地十選（10月号から）

石堂潤子

無作法もよし本堂に椅子がある　宏章
割り箸を出されて実家遠くなる　みつ江
あとへ引く事もおぼえた独楽の芯　百合子
ちゃんとして行って下さい近所の目　福子
シンプルなセンス背筋が伸びている　和子
生き方もそれぞれ今日という音色　保州
木の椅子に掛けると幸せに気付く　美代子
ぼやくのはよそう歩幅が狭くなる　重人
帰ったら褒めようセットに妻が行く　求芽
定年にとっても長い日が昇る　たもつ

愛犬と並んで夕陽見ています　比呂子
無人市はだかの野菜呼びとめる　幸子
バスタオル逃げる二歳が捕まらぬ　輝恵
裸一貫口で言うほど軽くない　節生
筋骨隆々仁王は脱いだ方がいい　静風
裸での付き合いだからゆるがない　笹舟
丸裸ゆっくりこの世渡ろうか　規代
裸一貫何もないのが魅力です　千代美
裸銭汗と泪の裏話　淑子
太陽のように裸で笑えるか　半覚
一糸まとわず五百羅漢の中に居る　厚子
神の配慮か生まれる時はみな裸　一路

川柳ふうもん吟社　夏目一粋報

罪一つ海は無言のまま許す　洋々

切腹をさせたい人が一三人　一瑶
八月忌亡霊達は涙雨　諏訪男
も一人の自分が裁くペナルティー　無限
見せる気はないが見られていた素顔　孝男
寅さんのはちろっぺには筋がある　金祥
別びんの亡霊ならば歓迎だ　圭一郎
切腹用刀を今日も研いでいる　毅
百本の薔薇に言葉はいらないよ　節子
ペナルティーもみ消す銭を積んでいる　昌鼓
二三人亡霊が出る魔のカーブ　義徳
水ばかり呉れて綺麗に咲けと言う　美恵子
禁断の実を食べてからペナルティー　美雪
川柳の亡霊集め没句会　秀夫
亡霊に逢えばこんばんわと言おう　雅女
はちろっぺ放いて馬脚の裏が割れ　志げ緒
はちろっぺの仲人さんに騙された　益子
亡霊にせきたてられて田んぼ鋤く　蟹郎
切腹をするコントなら出来そうだ　寿子
切腹の辞世が詠めず生きている　富士雄
色いろとあって浄土はまだ遠い　暢夫
亡霊が肩叩きそう古戦場　春名
惨敗がなんだ切腹無用です　善夫
切腹の美学に男酔っていた　一京
草刈機が切腹させた青蛙　重忠
亡霊は柳の下で夕涼み　行男
切腹の勇気ないのに人殺す　はつ江
亡霊にしがみ憑かれている背中　茂登子
亡霊を呼んで夜な夜な酒を酌む　喜子
はちろっぺではない歩みカタツムリ　一粋

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

輪の中で今日も笑いの種をまき　ちよえ
出世した狸は山を捨てて行き　かつ子
味噌汁の匂いをきいて朝にする　伸子
出世にはなおほど遠い棒グラフ　聖子
イメージの裏にあったは蟻地獄　はるみ
我は吾気ままな旅のかたつむり　恵美子
出世にもいろいろあるよ鳴く鴉　好栄
玉手箱出世をしたら開けてみる　博利
大正のイメージ反骨だけ残り　清泉

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

公民館わいわい子らの夏休み　保子
大騒ぎうばった椅子にある踏絵　彩子
ひと言に心の波が大騒ぎ　永子
大騒ぎしても冥王星はある　芳光
永田町大物小物大騒ぎ　稔
ピロリ菌胃中でもしか大騒ぎ　菊乃
大騒ぎする野次馬がいて困る　八重
ここだけの話が招く大騒ぎ　実満
目の線を合わせて諭すやさしい眼　みどり
置き忘れ行ったり来たりする眼鏡　睦子
ラーメンを食べつつふっと句が浮かぶ　房子
ラーメンはどうも御飯と別のもの　武子
招かざる客にラーメン腰を伸す　公子
ラーメンに主婦の休憩ゆずられる　富久江
ハンカチ王子が今日も拭いてる大騒ぎ　汲香
大騒ぎすることもなく老い二人　久枝

孫台風来るは帰るは大騒ぎ　節子
停電にオール電化の大騒ぎ　弘子
大騒ぎする子うかつに叱れない　幸枝
初孫が立った歩いた走ったよ　かおる
わめいても泣いても山は動かない　ひろこ
蟷螂の雌が見事に雄を喰う　照彦
盆栽よその瘤々が賞となる　孔美子
又奴が見事な法螺を吹きまくる　はるお
難問を見事にクリアした自信　和子
秋の天見事狂わすきつね雨　きみ子
方哉の生きざま見事とも思う　忠良
それは見事に負け組へ嵌められる　諷人
知らぬ間に荒れ地見事な門構え　くに子
大輪の菊三輪が見栄をはる　螢

川柳ささやま　遠山可住報

今だから言える真相語り出す　精一
激動期の昔を生きた乙女です　美緒子
もう歳か若い娘の胸気にならず　章
酒飲んでいないとどうも踊れない　二英
蝉の声胸に沁み入る原爆忌　文子
思い出の曲流れてる店が好き　美紗子
いいムード歌声皆を揺れさせる　靖子
初恋の昔が疼く北斗星　多美子
思い出の故郷今はダムの底　照代
ムードよい心に残る旅でした　かほる
青リンゴちょっぴり淡い恋によう　つや子
長命のムード先祖へ感謝する　冨子
胸痛む誰だ呪いの五寸釘　哲男

ふるさとの子供に還る百二歳　可住

むらくも川柳会　毛利幸報

北鮮は土足で拉致を踏みにじる　彰
人の目を忍んで土足猫上がる　定子
じっくりと土足で大地確かめる　幸
レントゲン土足のままでいいですよ　安男
心まで土足ではいる人もいる　信夫
乗取屋土足のままで入りこむ　宣雄
髪型が胸の思いを語ってる　蘭水
夕顔のロマン涼しく月に浮く　瑞枝
検診を控えて酒を少なめる　俊夫
分別を包み袋の痴呆症　秀夫
新仏ふたり仲良く香の中　嘉寿子
敗戦の年あぶり出す蝉の声　愛子
山並みの新緑こころ洗う色　恵美子
いきいきと元気いっぱい今朝の道　ます美
温情にふれて静かに握るペン　秀子
ワープロが打てない私鉛筆派　喜美
衣替え着なれた服に再会し　美保
同窓会八十路の友と賑やかに　寿

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

心澄まし水琴窟に涼を聞く　宏一
川風も料理と共に京の床　幸子
歳重ね向い風なる税おもし　実
役柄の風を吹かせて呼び捨てる　東園
ばあちゃん子風呂お祈りもみな一緒　昭三
馬券買い祈る気持で手を合わす　(矢)薫
流れ星祈る間も無く西の空　寛之
炎天下むくげの花はしたたかに　千恵
ゆく夏の疲れも見えぬ紅カンナ　久子
川筋の数ほど揚がる遠花火　勝巳
灼熱に耐えた甲斐あり生ビール　純
やさしさで手強い相手包みこむ　紀乃
躓いた石は蹴らずに投げ捨てる　武庫坊
近雷の音にびっくり一人は恐い　正子
夏草やわけありと聞く売れぬ土地　年代
深き渕一輪ずつに朝顔は　薫

川柳塔なら　坊農柳弘報

泣きぬれて過去を流しに雨の宿　美はる
絶壁の下が見たくて這うて見る　蘭香
夏の夜は冒険の虫這うて出る　カズ子
宿題の勝負はいつも徳俵　博一
かちわりのしずくで凌ぐ熱中症　ふりこ
油虫這い出す頃に打つメール　千梢
方円の水のパワーを思い知る　順啓
アンカーのパワーへ風も加勢する　春雄
地方色失せてしまった宿のめし　弘風
這ってでも家に帰ると泥酔者　東吉
かちわり溶ける雫の中に僕がいる　孝子
鬼宿と闘う宿命に涙する　桜竜
蛍とぶ宿ですいつかご一緒に　真理子
生かされて宿の海から相聞歌　洋子
東になる女へ妻の力瘤　完次
パワフルに泣いた笑った母の四季　六助
肩で息パワーの受ける勝ち名乗り　一風
かちわりがカラフルになるかけた蜜　章久
かちわりと遊ぶ茶房の待ちぼうけ　國治
宿縁へ傘さしかけたにわか雨　富子
どたん場で女のパワー見せられる　寿美
這うてでも行きます孫の披露宴　和夫
這い上がる時もともだちの手が温い　美千子
百歳へつなぐパワーに水をやる　隆盛
いのち生むパワー全開玉の汗　朝子
脳天を貫くカチワリの一気　ダン吉
悪がきに戻って欲しい水枕　良一
人間に戻ろう宿に星が降る　のりこ
ありがとう最後のパワーで締めくくる　理恵
転んでも這っても母の手がのびる　とし子

京都塔の会　都倉求芽報

猫一匹居ついて雨が降り止まず　篤子
小泉が庶民いじめた五年間　正坊
直角に曲がれるうちはまだ若い　啓子
なでられて仏になっただの石　宏子
無駄なのに暑い暑いが口癖に　鹿太
欲一つ捨てて波間の静かなり　ふりこ
少子化を恨む大学マンモス化　則彦
掌にマンモスを飼う夏休み　藤重
昨日の波けろりと忘れ今日は凪　庸佑
波長合う会話は時を忘れさせ　英旺
寄せる波返す波あり生きている　弘之
さざ波なら今も立ちます真珠婚　牛延
波に乗るパートナーいて美しく　輝美
少々は狂うが夏には夏の花　典子

歳とれば体のどこか狂います　益子
温暖化狂い咲きする花もある　萬的
狂い咲きでも一命終える花の意地　満子
伴奏がテンポ合わせたのど自慢　昌乃
俎板のリズムが狂う倦怠期　百合子
定年でやっと落とした足の泥　とし子
手の平で土足の夫飼っている　きよし
セクハラの上司　土足と気がつかず　福子
立ち食いの昼は農繁期の土足　欣之
土足厳禁わての胸にも不発弾　美義
土足でもよろしおすかと伺うて　春
踏みにじる土足の国が許せない　和友
ダンボール怒りで運び出す土足　求芽

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

うろうろと生き過ぎ道にまだ迷う　柳子
失敗を重ねて出来た秘伝のタレ　誠子
戒めに叱る言葉に誉め言葉　あすなろ
本心を重ね合わせて杭を打つ　ヒサ子
学校帰り母さん呼んでるケイタイで　てる
餌さがし熊がうろうろ町に来る　隼人
どか雪と重ねて捨てる億の金　順風
ケイタイもカードも持たず旅に出る　ふさゑ
ケイタイの通話料増え哭く財布　花匠
産声をただうろうろと待つ廊下　愁女
田ん圃から風呂のさいそくメール打つ　一呑
札束を重ねて買えぬ子が欲しい　井蛙
若者のケイタイにないしつけ糸　黙人
天空でまだうろうろの母らしい　和香子
ケイタイを切って小さな仲違い　岳水
ケイタイに切り取り線はついてない　花峯
徘徊の草履を探す夜の街　慕情
向日葵の迷路に迷う児と母と　五楽庵

西宮北口川柳会　黒田　能子報

メルヘンの街風船と遊ぶ雲　紀乃
待っていた昨日今日から秋の雲　昭三
挑戦へ勇気もらった夏の雲　直
自由画で雲はゆったり旅をする　順子
朝やけの雲に希望とかいてある　貴代子
ご近所に親戚以上の友をもつ　開子
墨すると亡父が身近に感じられ　章子
お迎えが近い近いと飲んでいる　朋月
嫁ぐ日の近い娘を仕込む母　五月
そのうちに近いうちにと決まらない　房子
近くにはいつもはげます妻の声　新太郎
近くても灯台下にある暗さ　折杭
眠れない夜と格闘させる恋　忠
秋がきて夜道なごます虫の声　江美
正論を通した夜も眠られず　嘉代子
夜が明けるいつもの音が回り出す　美代子
性善説の色を怪しく梅田の灯　晴美
ナイターのない日平和にテレビ見る　正和
失敗は肝に銘じてすぐ忘れ　二英
弱い足鍛えて今日もスニーカー　松煙
風鈴に師にほめられた一句吊る　哲男
御風と白秋校歌が競う甲子園　いたる
電子辞書遊び心が入りまじり　歳子
おしゃべりが呆け防止とは有難い　てる
ひと声をかけて安堵の旅に出る　光子
一歩二歩前で待っててくれますか　和子
目に触れぬ筋交い棒に自負がある　光久
襖絵の隅に巨匠の貌がある　奮水
本心がなかなか言えぬ片思い　春蘭
お茶ですと言えば返事をする狸　曙蝶

川柳藤井寺　高田美代子報

たかが豆腐されど豆腐と足のばし　シルク
荒縄でくくれる豆腐探し当て　武義
相方を立てて豆腐は我を張らず　淳司
脇役も主役もつとめます豆腐　みつこ
豆腐よりおからが好きなど根性　井竿
豆腐売るラッパへ古都がたそがれる　惠勇
冷ヤッコ入れ歯でちゃんと噛んでいる　昭子
冷やっこあれば言うことないビール　史郎
大原めぐり二人並んで嵯峨豆腐　耕策
豆腐屋のラッパ途絶えた茜雲　喜代子
鍋持って走った豆腐屋のラッパ　進
留守三日まず鉢植えの顔を見る　婦美枝
お付き合い鉢の花から深くなる　扶美代
すり鉢と擂り粉木ペアを組む自信　美代子
ポケットに面白い夢詰め込んだ　政男
少し波立てて老後を楽しもう　栄一
面白い人と暮らすと疲れます　アヤ子
面白い人やですんだ得なひと　瑠美子
面白い話題に手話の手が躍る　いさお
生き甲斐は人を笑わす策を練る　かつみ

終点へまだ仕上がらぬコンパクト　絹歌
毒少し入れた話が面白い　鐘造
仮面かも知れぬがピエロ面白い　悦子
面白いとこで水差すコマーシャル　志洋
始まるぞ隣家の茶碗割れる音　六点
面白い話に耳が寄ってくる　ヨシ枝
プライドを捨てて世の中面白い　雅枝
靖国のことが今年もさわがしい　静子
あんみつの底に残ったさくらんぼ　春蘭
百歳の舌にやさしくなる豆腐　重人

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

貸す金は出世払いで何時の事　よし子
バイトまでして買った犬です命です　里江
生きるって結構辛い蟻の列　美代子
貸本で脳活性化した戦後　亀与子
屋上で夏の終りをつげた蝉　イサミ
買ったことない素麺を今日も食い　昭三
きびしさをちょっぴり覗くアルバイト　耕治
痛がらず休まぬロボット俺の敵　五月
六十歳単身赴任の初体験　宏一
貸す金はないけど知恵は持っている　朋月
正直に花は季節を連れて来る　正治
貸す方が悪者になるこの不思議　孝一
ふり返りあの日の空とコッペパン　義方
露きらり一期一会の一滴　比ろ志
保護色の男に油断召されるな　鹿太
お貸しした書籍古本屋で見つけ　きよし
ガラス越しそっと覗いた子のバイト　桃花
空腹に耐えて至福の時を待つ　全彦
相合傘そのまま持たす俄雨　江美
真直ぐに育てと慈しむ添え木　美籠

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

一休さん橋の真ん中危険です　契子
どんどんと父の座子等に押しやられ　いさむ
気分よく湯煙の中岩まくら　長一
二重橋明るいニュースに揺れた朝　禮子
日の丸を振りたい気分孫生まる　勇治
起きぬけの地震あわててまたもぐる　柳童
気分よく鈴虫を飲む月見酒　肋骨
予定表どんどん埋める寂しがり　春代
嘘よりも多い浪華の恋の橋　黒兎
どんどんと隣の子供釣り上げる　信男
優勝のエースの涙胸を打つ　雪子
もういくつ橋を渡れば浄土かな　桂子
キッチンに妻のハミング今日は晴　昭子
三途の川の橋が流れてもちなおす　見清
談合劇逐一承知橋無言　勝

長柳会　村上　直樹報

住む鬼にまた火をつけたコップ酒　直樹
小さい秋うまく見付ける虫の声　三和子
閉じるドア無理に割り込み靴落す　明信
里山の暮しすっかり板につく　靖子
瓜二つどこが目印祖父迷う　マサ
あの夜に摘んだ恋花いつ活ける　明子
鳩尾の奥に住んでる人ひとり　一慧
昨日から味方が一人二人減り　正博
満月がきれい田舎に母一人　正子
豊作に田圃のかかし得意顔　敬二
瓜畑サクランボほど狙われず　幸雄
住みついた心の鬼を持て余す　英美
立て替えた二世帯住宅孫の声　不二雄
芸術の秋においしい団子食べ　正一
秋桜が人なごませて咲き乱れ　よしお
愛されて尽してみたい良い男　靖博
古民家を移築して住む異邦人　登美子
豪邸に独り住まいは味気ない　たけし
食欲の秋に我慢の血糖値　和代
名月に銚子一本追加され　武男
病癒えすっかり夫は丸くなる　史
虫の秋少年恋を知り初めし　芳野
ほろ苦いゴーヤ料理よ夏の果て　冨美子
瓜の山無人販売道の駅　けい子
完璧に家事こなしてる赤い爪　輝子
希少価値西瓜のような妊産婦　淳司
クラシック聞いてたこやき食べている　もこ
猫舌でスープの冷める距離に住み　美代子
ネールアート仕上げ私は魔女になる　和子

倉吉川柳会　竹信　照彦報

少年期僕等のヒーロー餓鬼大将　満
国会でヒーロー選び過熱する　よしえ
王さんはずっとヒーロー我が世代　瑞子
ヒーローは青の汗ふき持っていた　玲坊
若者に花を持たせてじげ起し　秋草

今ヒーロー斎藤君のあの笑顔　龍枝
酒女絶って男に影がない　和枝
悲しみを絶ち切る数珠を繰っている　幸子
子が親の親が子どもの命絶つ　鬼一
断絶は出来ぬ絆の親子像　(前)喜美子
何ひとつ絶たず私は生きのびる　和子
酒煙草絶って立派な蔵を建て　泰輔
私利私欲絶っても金がたまらない　かつみ
天の声今のお前で丁度良い　晨一
昇天の合図の鐘がまだ鳴らぬ　螢
志高くたかくと天の声　萩江
天井に巣掛ける蜘蛛をじっと見る　風露
蝉は鳴く一週間の天下取り　玲子
孫が乗るハングライダー天に舞う　重忠
天井の二間梯子も用が無い　睦子
打吹の天女猛暑で夕涼み　祐子
揉めごとはあの婆さんの推理から　次男
腹減って今夜のおかず推理する　完司
朝青龍おまえ源義経か　石花菜
コマーシャル推理ドラマに穴があく　賀寿恵
叩く音で熟れ具合を見る西瓜　京子
井戸端で噂の推理花が咲く　日出子
ミステリーヒステリー共ぞくぞく感　悠子
アメリカの馬鹿な推理でイラク戦　酔芙蓉
靖国の神はヒーローたちですか　照彦

川柳茶ばしら　板山まみ子報

駅前にデザイン競うビルが建つ　文男
ニガウリのジュース僕の健康法　盛夫
穫るはずのいちじく鳥に持ってかれ　百合
台風へ急げ急げのコンバイン　美千代
先ず一歩ニートをやめた靴のひも　かつ子
新米のほかほか苦労すっ飛んだ　幸子
またチャイム午後の読書は邪魔をされ　秀水
呆け防止始めた趣味へムキになり　八木
手あぶりに植えた稲にも秋の色　まみ子

岸和田川柳会　原　さよ子報

妻がだす猫撫で声に罠がある　香代
高額を払ったエステ罠だった　和美
皿洗う夫ととけ合う古稀の坂　力子
有難う心を洗う良い言葉　寿海
ユニホーム洗う涙と汗のあと　守
生かされる感謝へ今日も米洗う　ゆい
おみくじは吉が出るまでひきなおす　楢代
トランプで占う恋が実るまで　房枝
占い師頭傾げてばかりいる　ダン吉
鶯の初音今いち愛嬌あり　幸子
今いちと買った株なの嬉し泣き　浅子
撃ち合いをやめぬヒト科に地球病む　蛙城
お互いの弱味は聞かない事にする　俊昭
お互いに本音言えずに無駄話　珠子
天下り互助共済というパイプ　洋
お互いに信じていたいあの世でも　ふみよ
お互いにゴメンと言えばすむものを　清
お互いの足らず補い老を生き　淳風
お互いに阿呆になっとこ嫁姑　岩夫
お互いに脚は弱れど口達者　泰弘
お互いにアノコレソノで分かる老い　笑司
お互いに半歩ゆずれば平和だよ　弘子
八月の雲が互いを諌め合う　仁緑
お互いの短所に触れぬ思いやり　東吉

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

馬の市親子の絆断ち切られ　アヤ子
ハイセイコー種を残して消えてゆく　かつみ
土壇場で信じられない馬力出る　庸佑
夏やせに馬肥える秋待っている　真一
ハルウララ勝たないけれど有名に　静子
青テント馬に貢いだ成れの果て　泰子
万馬券馬は人参貰うだけ　志洋
結ばれた糸がもつれた時もあり　昭平
糸切り歯笑った顔がチャーミング　フジ
もつれ糸解いて未来の幸探る　吐来
蜘蛛の糸きっと私もぶら下がる　ヨシ枝
針と糸キミとわたしの間柄　美代子
目に見えぬ糸吐き合ってああ夫婦　みつこ
すり減った靴糸口を見つけ出し　重人
しんしんと胸迫りくる原爆忌　久仁子
興味しんしん形勢を読んでいる　ダン吉
しんしんと冷めた心を癒す鍋　りつえ
しんしんと降る雪に過去消していく　喜久子
雪しんしんこたつで妻と酒を酌む　敏
コーヒー好き姑に和解の声をかけ　美喜
モカの香に空気が和む会議室　耕策
一杯のコーヒーにある安堵感　章司
コーヒーのおいしい店で待ちぼうけ　一壺

コーヒーが縮める恋の車間距離　一知
一杯のコーヒーストレス吐いて出る　獏沓
欠けてきたねとしみじみ対のマグカップ　恵勇
案内は要らぬひとりで行く冥土　いさお

うぶみ川柳会　小谷美ッ千報

限度知り盃伏せて歌うだけ　天人
喧嘩した昔を偲ぶ共白髪　黙光
毎日が喧嘩だボスが決まるまで　天雀
嫁ばなし断る言葉親の知恵　くにお
万歩計歩け歩けと喧しい　かつみ
あれこれと練ったプランはみんな夢　美知江
最初から喧嘩腰ではまとまらぬ　京子
電話口セールス言葉すぐぴしゃり　和子
あれこれと言っている間にミサイルが　龍枝
縁談を断ってから惜しくなり　よしえ
あれこれと余生を刻む不眠症　和枝
賑やかに耳の奥まで蝉しぐれ　美ッ千
あれこれと悩むなかれよ十三夜　ひろこ
断ってみたいもんだねお誘いを　幸恵
喧嘩して皆吐き出して仲直り　芳江
酔っぱらいふらふら喧嘩売っている　和
きっぱりと断りあとを濁さない　あづま
ストレスもあれこれあって行く屋台　きみ子
お迎えを断るために手を合わす　孔美子
あれこれと試食してからサヨウナラ　重忠
あれこれと言ってる内に蟇が立つ　芳光
もうすこし痩せたいなあと飯を食う　螢
口喧嘩しても出てくる晩ごはん　完司
ガチャガチャと生きております縁の下　石花菜
あれこれあった思春期の通せんぼ　宣子

八尾市民川柳会　宮西　弥生報

櫛の日の尼僧とシャンプーの香りと　桜竜
晩年の視野に元気という呪文　あかり
ミニトマト主役へ躍り出る化粧　加央里
親殺し子殺し狂うている絆　秋雄
胃と肝臓だまし騙しの五十年　浩三
声なき声ひとつになれば山動く　宏至
千八〇〇回でんぐり返りまだ続く　たもつ
絵日記の孫に宇宙へひとり飛び　一風
ハンカチ王子闘志満々飛躍する　寿鶴
歯で抜いたビールの栓を触れ回る　柳伸
アンテナを低目に暮らす元気者　きらり
少年の一途不可能から可能　欣之
ハンサムな金と力はどないやろ　はじむ
年甲斐を元気ですなとほめられる　春蘭
最高のしあわせ一つある元気　弥生

南大阪川柳会　吉川　寿美報

秋冷えに河内木綿のぬくもりを　弘泰
聞き役の位置で温和な母の笑み　柳弘
居るだけでその場明るくする男　東吉
うちの人出張ですとうれしそう　とし子
自分史に明るい色も置いてある　昌紀
底抜けに明るい友に救われる　朝子
ちょっとした話も逃がさないシャープ　初太郎
カミソリと昔言われた事がある　利昭
半音を上げるところで行きづまる　修
ライバルのシャープにノルマたたかれる　憲太郎
シャープだが時に仲間も斬っている　ダン吉
半音上げ気持ち伝えるありがとう　たもつ
迷路から這い出た空の青いこと　千里
正論に迷路なんかはありません　ただよし
九条の平和へ迷路などはない　志華子
迷路でも花は咲いてる友も居る　集一
人生は迷路ゴールはわからない　直子
ええ加減にせえと叫びたいニュース　重人
行間に叫び聞こえる闘病記　栄子
反戦を叫びつづける黒い雨　柳伸
広島の叫びにブッシュ知らぬ顔　弘風
ふる里が僕を呼んでる祭の灯　萬的
故郷へ山が帰れと叫んでる　郁夫
叫び合い呼び合う修羅の火事現場　雅文
ゴキブリの方がびっくりした叫び　寿美
少年の心の叫び闇となる　楓楽
シャープだと思ったわりに鈍くさい　なぎさ
シャープだと思った人も共に呆け　叡子
俺僕だと叫ぶ昔の戦友の声　章久
叱られる前にシャープに身をかわす　尚士

高知川柳社　川竹　松風報

晩酌へやっと仮面を脱ぎ捨てる　左門
一肌脱いで兄貴になった義侠心　暖
ナース帽脱ぐと女が匂いだす　和広
脱皮した蝶のはかないその命　ただし
脱いでいる気配襖の向うから　快風

野球拳あなたどこまで脱がせる気　功
朝飯が旨い元気に靴を履く　典雄
落ち込んだ日にも新たな朝が来る　和江
朝刊が暗いニュースを抱いて来る　千鳥
朝顔を数え三文徳を積む　美々
もぎたてに朝露のせて無人市　千恵子
魚河岸の朝を動かす競りの声　三郎
女には夏冬もなく朝の音　松風
茶柱が立ってウキウキ朝を出る　良雄
生きている朝へ感謝の母白寿　てるみ

城北川柳　吉岡修報

愛しても愛し切れない灰を抱く　高栄
ぬるま湯の中で狂って来た甘さ　萬的
ポケットに甘い言葉を入れて逢う　典子
ライバルが脇の甘さを突いてくる　たもつ
罰ゲームルール以上にもりあがる　求芽
都合よいルール作ってよく眠る　達子
だいじなのは地球とくらすルールです　修
野良犬が赤信号を守ってる　一歩
秋風にやっと目覚める前頭葉　東吉
甲子園悔しさと砂もちかえり　春蘭
団塊は団子運転した証　弘風
きび団子だけでは誰もついて来ぬ　集一
腕白児だんごになって叱られる　とし子
結局はだんごに決めた旅土産　倫子
きび団子ぐらいでおともなどしない　朝子
幸せな家の柱は団子鼻　正
家族みな家来に母のきび団子　志華子
散骨の灰を鰯にくれてやる　順三
母の鈴灰になっても鳴り止まぬ　千里
灰汁のない言葉で人を恋しがる　柳弘
小言百回ノイローゼかも知れぬ　ルイ子
真夜中の物音嫁に見に行かす　利昭
愛してるこの真実がすぐ変わる　ただよし
耳よりな噂へ色をつけ次へ　和夫
年金が熟年離婚延ばしてる　昭子
誕生日花丸つけるカレンダー　あやめ
平凡に生きる女の妥協ぐせ　はじめ
あめ一つ貰った恩に縛られる　郁夫
よい知らせあって鏡にキスをする　明子
顔洗うかなり人間らしくなる　恵子

サークル檸檬　吉田あずき報

虚と実の自分の影に惑わされ　遠野
何の報いだろう深爪してしまう　楓楽
独り言ってひとりを意識する　房子
不摂生の報いはいつも秋にくる　扶美代
甘んじて過食の報い受けている　昌紀
寿命ってなんと苛酷な秋の風　美籠
返す恩たくさんあって手がつかず　みつ子
割り切れぬ気持引き摺るきのう今日　光久
うわさ話報いを乗せて馳けていく　義子
神様にためされている頑張ろう　あずき
鳩尾が痛むあれこれどの報い　いわゑ
まごころに報いんとする茄子の花　希久子
人生はなるようにしかなりません　正坊
病舎ああ患者の物を患者盗る　棲世
明日よりも今日鮮明に生きてゆく　たもつ
拾われた恩を知ってか忠犬で　千代
ヤスクニの報いか風が吹き荒れる　哲夫

大原川柳社　山本玉恵報

意地張った私を笑う夫の背　真
意地が有るこの子我が家の跡を継ぐ　文代
大家族いつも気になる鍋の底　あやこ
どん底に落ちて人間らしくなる　とめの
笑い袋の底にねむっている悲哀　あすなろ
趣味を持ち視野を広げて老いの道　絹子
天の川今年も逢えぬ涙雨　みさえ
視野広く持って友達多くする　静子
丸木橋渡る農婦の底力　美佐子
片意地も交えて生きた道なんだ　巴子
金持ちは底も知れない術を持つ　喜美子
父の視野届く範囲の中に居る　悦子
寡婦だもの意地も涙もつきまわる　辰江
意地なんか張らなくなった棺の蓋　妻子
相合傘濡らしてる雨ピンク色　南花
腹の底わかってからの垣が取れ　地佳平
視野変えて明日から生きる広い空　さちこ
男です正論曲げぬ意地がある　敏夫
年金の財布の底は知れている　はじ芽
紫陽花が私の視野をとりこにす　みづえ
記憶の底にずしりと遠き日の宴　玉恵

川柳塔おおとり　福田登美報

ライバルがきらきら見える日のあせり　雄々

殺し合いしてもきらきら陽は昇る　以和万津
ヒーローがきらきら光る目をしてる　真一
老いてまたきらきら光る夢もある　道子
きどっても腹の虫には通じない　ヒロ子
鳴く虫と泣かない虫が同居する　由多香
松食いの虫が列島へ広がった　小生
豊作を祝ってくれる虫の声　黙光
理不尽に治まらぬのが腹の虫　幸次郎
仏壇の奥にも虫がいるらしい　螢
負けそうで暑気はね返すビール飲む　和子
涙飲み余生の糧と強くなる　清子
二リットル命の水を飲んでいる　知恵
名水を飲んで心の邪気払う　風花
ごくごくと命の水を飲んでいる　艶子
ひと息で飲む冷水でよみがえる　登美

三幸川柳教室　古久保和子報

回り道しても互角のとこへ出る　かずみ
回転木馬走り続けた半世紀　一歩
人生は回り舞台のようなもの　桂香
皿回る落ちないように生きている　次根
無を積んで回り回って来た至福　さち子
走馬灯くるくる母はどのあたり　朱夏
回るほど独楽はまっすぐ立っている　起世子
睨めっこしてるお城の鯱夫婦　孝義
落ち葉にも色と形の自己主張　宏夫
ダンゴ虫のかたちで夫黙秘権　登美代
考えるかたちで舟を漕いでいる　三千子
グーチョキパー愛のかたちで負けている　イセ

私を包むとわたくしのかたち　章子
良妻賢母と言われかたちは崩せない　かず子
昼寝する孫が埴輪のかたちして　当代
十人十色の個性が出てる握りめし　みね
人間のかたちで鬼の影がある　智三
ほんのりと恋のかたちに桃熟れる　幹子
青空の画布かたちよく雲の筆　義雄
甲子園日焼け気にせぬチアガール　信子
スカウトの目が皿になる甲子園　昇
甲子園の蔦は校歌を聞いて伸び　幸
分校があっと言わせた甲子園　町子
パン焼けて変わらぬ朝がいいと言う　公子
まず犬の機嫌とってる朝帰り　嘉平
山一つ越えて朝日に手を合わす　碧
朝が来るたびにハードル高くなる　准一
ほどほどのゆるみ素敵なシルエット　徑子
朝食を抜く子ありつけない子ども　保州
二度寝する至福を知らぬ母でした　和子

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

退屈な話は猫が聞いている　叮紅
退屈な虫がぞろぞろ歩き出す　多喜
退屈な男へ今日も陽が沈む　房子
ポケットで退屈してる不発弾　多賀子
申し訳ございませんネ欠伸して　繭
退屈がわたしの時間食べに来る　久子
青虫のままで終らぬ夢がある　静恵
腹の虫据えかねている茶番劇　知恵子
生きる街虫も私も大差ない　ちえこ

年老いた虫にまだある意地と知恵　雪代
蟋蟀が熱中症で死んでいる　螢
泣き虫のために裏門開けておく　紫晃
うっかりが今でもついて来て困る　邦代
うっかりと手紙にかくす熱いもの　喜美子
うっかりとこぼしたグチが渦を巻く　たえこ
うっかりと正札付けて町歩く　和歌子
うっかりとはめた指輪がはずれない　たけし
うっかりと夜の仮面を脱ぎ忘れ　淞丘
よろめきを止める手綱を妻が持つ　長吉
よろめいた先につっかい棒がない　柳歩
時としてよろめく人の恋の文　幸
よろめいたふりして一寸よろこばせ　政子
よろめいてみたい男に無視される　昌枝
よろめいて花も季節を間違える　スズコ
憧れは亡母の一生かもしれぬ　桂子
憧れの制帽今もキュン　礼子
担任の先生憧れの人でした　宏
憧れは時代を詠んだ粋な亡母　幸子
憧れは抽出しの奥セピア色　畔
憧れは風に揺られて浮気ぽい　注湖

川柳ねやがわ　森　茜報

断線で冷房切れて生き地獄　勇太郎
原形を相当変えている記憶　九好
記憶にはある顔だけどどちらさん　とし子
記憶から消したい原爆忌が巡る　高栄
クラス会記憶のなかの人探す　麗
織田作の記憶と歩く坂の街　洋

お互いを笑うしかない記憶力　仁清
一番のラッキー君と逢えた事　利昭
戦災を運よくくぐり抜けて古希　鈍甲
手術して転移がないと知るラッキー　弘風
ラッキーな最後にしたい万歩計　かすみ
雑踏で拾った馬券大当たり　寿男
幸運を誘った孫のいい笑顔　一風
正直に届けてくれた落としもの　日出子
ラッキーと思うともだちたんといる　朝子
指先でラッキー探る点字の書　柳弘
責任をかぶる男が雲隠れ　博泉
責任が無いから強いことを言う　庸佑
責任はわたしわたしと恙ない　ルイ子
言うだけで責任とらぬ評論家　集一
拉致問題国の無策が責められる　敬
責任は軽くかわして天下り　一炊
ヨイトマケ蟻も歌った労働歌　ただよし
生首がぽっかり浮かぶ炎天下　亜成
ライバルの一人に僕も名のり出る　修
太陽の恵みが欲しい足の裏　郁夫
一面の向日葵消えていた更地　茜

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

二度三度数え直したゼロの数　欣史子
ゼロ発見それはインドがなしとげた　香住
あれはもうご破算にして出直そう　加津子
男シャープに髭をあたってその後は　シマ子
ゼロ番線銀河鉄道行を待つ　弘直
焦点を少しずらすと情が湧く　喜美子
情に流されしんどい思いしています　能子
親子喧嘩明日に残さぬ情あり　慶子
手を出さぬそんな情もあるのです　あずき
事細かに聞いたりしないのも情け　ますみ

川柳大阪　長井　善純報

ど忘れのあれそれこれで話してる　ひろゑ
恐ろしい意見するどい隅の雑魚　五月
妻の絵と違う構図がおもしろい　重人
頂上ではついバンザイをしてしまう　孝一
平和こそ世界遺産の第一歩　功
七十歳年寄り扱いまだ早い　喜楽
仕舞風呂今日一日をふりかえる　柳昌
おやじなりおやじの意地で今日がある　信酔
告白へ微妙に揺れるイヤリング　まつお
日焼して微妙に白いトコ残る　珠生
モナリザのような返事に悩んでる　利昭
スクラムを組めば微妙に息が合う　宏
一寸だけ妻と姑と違う味　ふみこ
一生涯策のないまま終りそう　芳香
役人が正義面して策を練る　青道
策尽きて度胸を決めた猪口を干す　一風
教育は法律でなく心です　紀雄
同じ事また聞かされる妻も歳　隆司
夕日見て湯船に浸り幸思う　かよこ
真ん中を歩いて今日も夫婦橋　洛酔
赤ちゃんの泣き声止める母の胸　一歩
日めくりがじわりじわりと薄くなる　章久
マニュアルも豪雨が軽く押し流す　鉄心
いけずする心を諭す澄んだ空　美花
三億円当れば心臓止まるかも　彦太
終止符を打たねばテロと核兵器　笑風
治世とは雨に負けない国づくり　勝弘
押すも汗押されるも汗車椅子　春蘭
暑くとも使命を果す赤信号　東吉
微妙に動く胎児に母となる自覚　善純

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

夢をくりかえす熱帯夜の枕　千代
大山のみどりに染まり小半日　日枝子
しとど降る雨に悪態などあびせ　繭
人間らしいことを残して逝きたいな　やえ
駄菓子屋に立てばきまって目が泳ぐ　てい子
くちなしの前でさんざん立ちぱなし　章江
ひらめきもなくなりほんに老いてきた　玲子
松枯れて物騒きわまる世の中に　なみ
あざやかな毛針で鮎と知恵くらべ　恵子
痛いほど眼に差込む真夏の太陽　雪江
むし暑さプラスミサイル眠れぬ夜　初枝
老女とは言わせぬマニキュアしなやかに　寿々子
種袋ふれば明日が踊りだす　千春
いいお酒でした親父の枯れすすき　紫泉
花に囲まれいつか旅立つ日もあろう　亜弥
ストレスのたまらぬように本を買う　田鶴
どこまでも夢を追いつつ夕暮れる　晶子
あの頃を語る仲間は減るばかり　天雀
城趾おとずれ外様自決の跡にいる　ふみ
朝顔が静かな朝を奏で合う　春枝

冷や汗をそっと拭った自己批判　すみえ
山を背にトンボになって空を飛ぶ　瑞枝

川柳さんだ　北野哲男報

しあわせは惚れた家内と共白髪　久敏
痴話喧嘩するうちはまだ惚れている　修
会うよりは会わぬが夢は醒めもせず　聖夜
惚れました但し人ではありません　一泉
シャンソンに聞き惚れ猫と居る夜長　順子
人柄に娘よりわたしが惚れました　光久
けったいな人に惚れたと思う時　哲男
煎餅は鹿へポーズのシャッター料　俊昭
目放ししはしない鹿の子の肉の鍋　キヨミ
鹿せんべい持ってないよと両手見せ　章子
餌づけした鹿は野性に戻れない　忠
豊作の予想古米のこと思い　正和
コロンブスの卵のなんと多いこと　二英
親切な誘い断るのも勇気　歳子
絵手紙が教えてくれた趣味の道　開子
モナリザの視線がうれし応接間　直美
実篤の絵皿も飛んだ妻の乱　正行
合併が敬老会を遠くする　千代子
松茸は今年も額の絵で終り　藤朗

翠洋会　谷口義報

子と帰る小犬の影も長くなる　みつ子
鈍行で風と気ままの長い旅　孝一
長き夜に一人目覚めて老いを知る　志保美
長デンワ奥から姑の声がする　志華子
長所のみ巧みに活かし育ててる　満作
もう十回もまわっているというお寿司　蕉子
抱きしめて君とくるくる踊りたい　昭
飼い主をあごで使っているペット　尚士
どら息子財産使うためにある　舞夢
ロボットに使われそうな予感する　日の出
使うほど艶増す茶器は生きている　水昇
奥の手を使い外野でたたかれる　捷也
バァチャンが座ったままでこき使う　久峰
使い道捨てた後から思いつく　桃花
使うより使われる老い元気です　絹子
エアコンを使いまくって飲むビール　れんげ
怪しくはないがうるさい人である　義
人畜無害なんて侘しい秋の風　美籠
小石投げ静かな湖面乱したい　すみ子
ふる里に息づいている青い恋　富子
命ひとつ燃えた証か夕茜　理恵
子も産まず犬猫抱いて何とする　叡子
ひもとけば道草たんとしてました　千梢

富柳会　池森子報

家路へ急ぐ見守り給うお月様　春
メルヘンの広場はいつも花ざかり　照子
梨ずしりこのひと玉が食べきれぬ　さと美
平和ぼけ箍がゆるんできた日本　恭昌
産室の戦い終る呱々の声　正雄
溢れ出る想いを描けば赤になる　扶美代
海の青あの日を呑んだ鎮魂歌　浩子
次期会長狙われたのはあの履歴　和子
癌ですと宣告された検診日　淳司
偽善者が狙う真っ昼間の宴　紅紫朗
本当の愛を知ってるカスミ草　鐘造
心からありがとうの言える今　高鷲
素直さはレシピの通り粥を炊き　伸雄
鉛筆の先へあの日を滾らせる　佳子
逆点をまだ狙ってるロスタイム　淳一
旅支度幸せ三日買いました　彦次
ギャル神輿顔をそむけて通る彼　冬虹
狙われてからは軸足磨いてる　アキ
いい夢も疎遠になった熱帯夜　澄子
スピードをゆるめて月見草に会う　ダン吉
あの時の白紙委任を悔んでる　深雪
慎重に狙ったはずの手ぶれ誤差　巳代一
少年の捻子食い込んでくる一途　欣之
考えることなく背中かいている　宏至
白紙の答案一番怖いのは教師　泰女
狐雨橋の真ん中から走る　萩乃
五十年私の城にたどりつく　よりこ
こだわりの解けない傘を干しておく　鬼焼
夢を並べるとシャガールも並ぶ　アキラ
風を読み風を掴んだ射程距離　信子
団欒にオレンジ色の笑い声　淳子
曖昧にして大声に呑み込まれ　ひろこ
見栄を張る余裕の裾が綻びる　森子

岩美川柳会　石谷美恵子報

闇の中信念揺らす鐵の音　一瑶
足音を消して大蛸鎗で突く　重忠

ジンクスを知っていたのは地蔵さま　螢
自信だよジンクスなんか考えぬ　はるお
強かな女はジンクスなど平気　一粋
ジンクスを信じ汚れたユニホーム　節子
お袋と始めて呼ばれ照れている　睦子
駛斗袋古い絆が断ち切れぬ　忠良
健康一番笑い袋を持ち歩く　雅女
知恵袋人のためなら惜しまない　かつみ
鼻緒切れ出先ですぐに踵変え　和子
いいことがありそう五円玉拾う　完司
温暖化地球の最後暗示する　圭一郎
この薬きっと効くよと言い聞かす　孝男
青汁が不味いCMまた売れる　よしえ
日本軍勝つと暗示をかけられた　公子
調教のイルカに暗示かけて芸　蟹郎
名医です暗示で出産楽にする　稔
目も耳も悪く暗示が届かない　たぬ
言えぬこと句に窘めておくもよし　幸枝
一呼吸すれば暗示も解けてくる　菖子
さりげない語尾の暗示に助けられ　美恵子

川柳塔打吹　野口節子報

目の検査しゃもじずらしてしかと見る　和子
輪の中に油断のならぬ目があるぞ　美ッ千
妻の顔澄んだ目付きに二度惚れる　紀美恵
苦労話心で泣いて目で笑う　たけ代
重役へ渋い顔して天下る　かつみ
渋い芸心しびれる名演技　孝恵
脇役の渋さで光る主役の座　美知江
渋ちんが気前が良いとご用心　重忠
恋すれば娘渋皮とれてくる　玲子
渋ちんと言われガッポリ溜めて死に　佳女
今日の筆渋って字まで笑ってる　龍枝
渋皮が急にはじける中学生　美代子
糸くずか汗でひついてしわの中　富恵
おが屑の中にぺこぺこかぶと虫　禎元
星屑の海を東へ月の船　公恵
野菜屑集めて土へ還してる　みち子
屑が出ぬように魚は切身買う　和枝
くず野菜集め三分クッキング　善江
屑鉄を叩き直した日本刀　幸子
消しゴムの屑に発破をかけられる　京子
二人住む家に屑入れ五つある　茂夫
缶づめで労使交渉深夜まで　貴恵
缶づめにされたよ戦時中の汽車　芙美子
踏みつぶすぐらいは出来るアルミ缶　照彦
空き缶のマナーを守る山男　勝憲
よくもまあこんなに飲んだ缶ビール　螢
カニ缶ひとつとうとう賞味期限切れ　完司
旦那より猫を選んだグルメ缶　三津子
めし食って息吐く僕も気缶車だ　石花菜
缶詰が敗戦の日に光ってた　芳光

豊中もくせい川柳会　江見見清報

すぐそこの息子が遠い核家族　慶子
生き方にプラス思考の長い道　春
老いの皺人生越えた証だろ　タミ
夢追うに顔が並んだ古写真　郁子
追い風になるまでチャンスじっと待つ　庸佑
追う事を止めて笑顔を取り戻す　啓生
飴玉を持った私のおばちゃん度　重人
人生と聞かれた答こんなもん　宇乃子
森を踏み地球の悩み聞いている　早人
なるようになる人生はあみだくじ　正坊
すぐ死ぬと言う母元気よく食べる　都代子
残りものばかりの暮しひとり膳　満寿巳
人生は大根役者揃い踏み　夢
お前もかすぐに気の合う虎ファン　萬的
貧と鈍追いかけっこが止まらない　肋骨
人生劇場スポットライト浴びぬまま　遠野
おそらくは実現しない夢見てる　求芽
以下同文その人生に感謝する　美義
手料理を二人の時は褒めぬ夫　見清
煩悩と組んず解れつして生きる　幸雀
先人に人生とはと問いかける　竜治
清貧に生きた自分を褒めてやる　寅次郎
徘徊の母追い自分見失う　巴子
美人には弱くていつも一目惚れ　尚士
ハードルを高めに持って追いつけず　知香子
人生の良き旅妻よありがとう　則彦
父つくる梅干むすび無口なり　勇治
ゴミ袋我が家の無駄を知り尽し　(久)千代
人生に神は宿題たんとくれ　玲子
後追うてみたけど風が吹くばかり　寿美子

堺川柳会　河内月子報

浮世絵のぬり絵があっておもしろい　半銭

神様に貰った顔が気に入らぬ　鐘造
菜の花の海がいいんだね黄蝶　潤子
どう見てもどっこいどっこいの夫婦　俶子
いざという時はやっぱりあなたです　みつこ
釣天狗自慢の竿を置いて逝き　なぎさ
よろこんで付いて来たのに回り寿司　さくら
脳外科医蟹の甲羅のように開け　時雄
父さんが帰ると金魚よく喋る　冬虹
スパゲッティ割箸そっと置いてくれ　千代
助っ人になれない人の喋りすぎ　公誠
タイプだと言ってくれたら咲けるのに　好
意地悪をされても私動じない　アキ
延命の処置はするなと書いておく　朋月
欲しい絵は売約済の赤い札　八千代
どっこいしょ言えばリズムに乗る体　梓
遠慮ばかりしている友の背を押す　ルイ子
戦はしない曖昧が好きな脳　美代子
人柄のよさがそのまま目の形　扶美代
喜んでしまえば夢が立ち止る　つづや
作者の名聞かねば気にもとめない絵　玄也
ああそうか父さんあれで嬉しいの　五月
甘えるなとつっかい棒をはずされる　かりん
バッカスに好かれて今夜帰れない　楓
助っ人は毎日のんだ常備薬　日の出
手押し車の母と花見の写真撮る　像山
よろこびが逃げないうちにお裾分け　深雪
押し気味の試合に負けて倍疲れ　雅明
一次パスしたが顔見てはずされる　天笑
つかれてる目でみつめられ疲れだす　月子

わたの花

山本　宏至報

でたらめに描いた数字が大当たり　克美
たんまりの愛が心の穴埋める　君枝
雷鳴を恐れ猛犬小屋の奥　宏
真実の声は瞳も澄んでいる　一風
危機管理逃げ出す用意枕許　幸枝
煩悩は断てぬと悟り酒を酌む　晴美
都心なか子の声消えて高齢化　俊子
料金もリニューアルして店開き　浩三
芸能人お忍びの果てフライデー　たえ子
思い思いに勘違いして盛り上る　妙子
喜びも悩みもペンは知っている　ますみ
決断のもう振り向かぬイヤリング　いつふみ
もう二度と嘘はつかぬと軽い嘘　義明
白い百合見守るような父母の影　ふりこ
都会より田舎暮らしと停退後　知佐子
コスモスが揺れて決意をにぶらせる　民
居眠りが出る会話には毒がない　宏至
祝い膳決心ゆらぎ箸を出す　愛子
約束を反故にしてでも行く食事　和子
にぎやかなお盆が過ぎて静かなり　博子
欲を断つこれが出来れば仏さま　正晴
消毒が出来ればしたい人が居る　はじむ
だんまりは最後にきっとVサイン　ミツ子
年老えば病い抱えて永生きし　荘治
片言の孫に毒気を抜かれてる　美代子

京都塔の会
秋の吟行句会ご案内

日時　11月27日（月）
集合　地下鉄東西線「蹴上」改札前
10時40分（11時に送迎バス乗車）
行程　東山ドライブウエーを、将軍塚展望所で休憩後「東山山荘」へ
昼食・句会場「東山山荘」京都市山科区北花山上稚児が池一番地
℡075—581—3510
兼題　「当日雑感」「天」「儚い」
「相性」　各題3句
解散　午後4時頃「蹴上」にて解散
費用　四千円（当日頂きます）
締切　11月20日
申込　都倉　求芽あて
〒600—8438　京都市下京区
万寿寺通室町西入る210—1203
電話　075—351—4109

☆将軍塚　平安京造営の折王城守護のため、守護神の像に鎧兜に鉄の弓矢を持たせ塚を築く。天下に異変おこればこの塚が鳴動したと伝う。標高二百メートルから京都市街が一望できる。

☆東山山荘　山科側斜面。稚児が池に面し、自然林の中の静寂地。

柳界展望

○第58回西日本川柳大会は9月3日、岡山県久米南町文化センターで開催された。事前投句324名、当日出席289名。同人の天位は次の通り。影はみな淋しいものだ影を踏む　小谷美ッ千

ブルースは乳房の奥で歌うべし　小林　妻子

（久米南町スポーツ文化振興基金会賞）　小谷美ッ千

○第20回NHK学園全国川柳大会は9月9日東京国立ホールにて開催。同人の特選句。

ロボットの手伝いに行く通勤車　北野　哲男

○しまね文芸フェスタ2006川柳大会は9月10日大田市で開催された。同人の天位。

立ち直る一個一個のにぎり飯　原　章峰

○第14回和歌山県川柳大会は201名の参加により9月10日開催された。同人の秀句。

出発へ花一輪の名を知らず　牛尾　緑良

ここからは子の道遮断機を上げる　上地登美代

ガラス張りの市政を願う青い空　玉置　当代

○あかつき川柳会創立五周年記念川柳大会は9月10日国労大阪会館にて開催。出席者127名。投句177名。同人の天位は次の通り。

頑張った結果の老後これですか　森村　美花

突き放してやれば私がよく見える　岩佐ダン吉

○第20回堺市民芸術祭川柳大会は9月10日(日)堺市立栂文化会館に於て155名の出席を得て開催。当日同人秀句。

次の世もあなたとなんてきついギャグ　村上直樹

○川柳文学コロキュウム三周年記念誌上川柳大会での本社関係受賞者は次の通り

一斉に楊枝をつかう鳥獣戯画　木本　朱夏

○第12回五呂八川柳祭全国誌上大会は41都道府県から413名の応募があった。本社関係の特選句は次の通り。

スポットライトの死角で殺す大欠伸　岸　桂子

川の絵とゆっくり進む認知症　播本充子

ストリートチルドレンのみずいろの眼　播本充子

なお播本充子さんは総合成績で第三位であった。

○高瀬霜石氏（理事・弘前市）は、岩淵不浪人を顕彰した不浪人賞を次の句により受賞した。

少年に翼をくれたのは涙

○明日香川柳社主催の第7回石原青竜刀賞特別賞に、木本朱夏さん（常任理事・和歌山市）が受賞。

〈特別賞〉

氷河崩落ドミノ倒しが始まった

○先月号の追加として第7回文学ルート川柳に〈優秀賞〉を松尾和香さんが受賞。

▽同人動向△

○みつ子副主幹は、文芸アート誌『華音』4号誌上で川柳作家やすみりえさんと往復書簡を交わし、川柳にこめられた想いを語り合った。また同誌には「創立者麻生路郎の志は今も生きている」というタイトルで川柳塔の紹介記事が掲載された。

▽お詫びと訂正△

○10月号89頁檸檬賞準賞作品「火の海を駆け抜けた日が懐かしい　小西雄々」を選考規定②「自選集の作者はすべての賞の対象としない」により取消しお詫び致します。

○10月号89頁下段、各賞選考規定を「⑨一路賞・各地柳壇賞はそれぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。」と補足して訂正します。

P123中段18行、銀座区民会→銀座区民館

常任理事会（9月27日(水)）出席17名①まつり準備の確認②係の確認③当日の進行④総会準備⑤その他

次回は10月20日(金)

訃報

黒川紫香氏（相談役・尼崎市）は、9月23日逝去。24、25日、ベルコシティーホール伊丹会館で行われた通夜、告別式には、天笑主幹、みつ子副主幹ほか多数の柳人がお見送りした。

寿賞増栄信士　享年100歳

（追悼記事96～101頁に掲載）

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	14日(火)午後1時から 石・根・いそいそ	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
堺川柳会	15日(水)午後1時から 折句(まいむ)・増える・隙	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
高槻川柳サークル卯の花	16日(木)午後1時半締め切り 意固地・余白・もっぱら 自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3—28—13　神野節子
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半締め切り 現す・嫌がらせ・上の空・親子	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳藤井寺	19日(日)午後2時15分締め切り 七、五、三・包む	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
岬川柳会	19日(日)午後1時半締め切り 素顔・退屈・気軽	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 集める・興味・ばかり・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳クラブわたの花	24日(金)午前9時半から 信頼・泣く・紙・つれづれ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風
東大阪市川柳同好会	25日(土)午後6時から リストラ・笑う・似合う・関所	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	26日(日)午後1時から 銀杏・ひそひそ・マイク 「逃げる」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	26日(日)午後1時より 落日・オーナー・本能	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
南大阪川柳会	27日(月)午後6時半締め切り どくどく・深い・急ぐ・雲	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔みぞくち	27日(月)午後7時半から スキー・薬・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都塔の会	**27日(月) 吟　行** 天・儚い・相性	**11月号 P.128参照　投句今月に限り** 〒600-8438 京都市下京区万寿寺通室町西入長刀切る町210-1-203　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

11月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	2日(木)午前11時半締め切り **秋の吟行** 席題(属目吟)見抜く・茜・すっかり(各3句)	薬園八幡神社 近鉄郡山駅下車徒歩8分　坊農柳弘
川　柳 ねやがわ	3日(金・祝日)午後1時締め切り **市民川柳大会** 世話・癖・介護・安らぎ・計画・返事	寝屋川市立総合センター4F　**本誌10月号 P.124参照** 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
尼　崎 いくしま	3日(金・祝日)午後2時締め切り 止まる・思い出・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	11月　お休み	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
城　北 川柳会	4日(土)午後1時半締め切り 鈴・調べる・デリケート 自由吟	旭区　老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉　吉 川柳会	4日(土)午後1時から 動物・夢中・弱い	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐　津	6日(月)午後1時半から 「初」「寒波」「松」	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
川柳塔 打　吹	11日(土)午後1時から 木・多才・呼ぶ	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から スタミナ・目立つ・めそめそ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1　小寺花峯
川柳塔 ま つ え	11日(土)午後2時締め切り 人並・乱・ペン・寄る	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
八尾市民 川柳会	12日(日)午後1時から タッチ・階段・吹く・雑詠	山本コミュニティーセンター3F　学習室 （近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 霊感・旅・メール 「世界の人名」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から これから・番号・出る・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
尼　崎 尾　浜 川柳会	14日(火)午後1時から ダブル・ぬか漬け・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太

編集後記

☆10月8日の第12回川柳塔まつりには243名の参加をいただき有難うございました。☆六賞の表彰式には八名の方（シドニーののり子さんの代理を含む）が出席、輝かしい受賞をされました。☆次年度こそは、折角のチャンスを逃さぬよう、一人でも多くの方の応募をお待ちしております。☆お気付きのことと思いますが、少しでも多くの句が掲載できるよう愛染帖の頁数を三頁から四頁にさせていただきました。これからもたくさんの投句をお待ちしております。☆川柳塔のおじいちゃんと親しまれた最長老の黒川紫香さんがとうとう逝ってしまわれた。満99歳のお誕生日を一ヶ月余り過ぎた秋分の日の早朝であった。☆今年三月と五月お訪ねした折はとてもお元気で、しきりに川柳塔の柳友の身を案じておられた。☆川柳塔と共に70余年を歩んでこられ、不朽洞時代よりの川柳塔歴史の生き証人の一人であり、路郎師を知る数少ない一人でもあった。☆私が存じ上げているのはそのうちのほんの20年であるが、よくあちこちの旅のお供をした思い出がある。☆誠実で温かいお人柄、誰からも親しまれた紫香さんには、とりわけ、女性ファンが多かった。私もその一人だが……。よく握手を求められたその手は、とても柔らかく、温かい独特の感触であった。八月入院先をお訪ねして、握手をさせて頂いたのが最後となった。

合　掌

（希）

ひとこと

ありんこ「少年柳壇」

川柳好きの小さなグループの冊子「ありんこ」に、小さな子ども達が仲間入りして一年半経つ。約束は五・七・五。好きな句を二句選ぶ二十日締切の投句。

ねらいは、日本語の大切さを見直し、日本語のもつ味わい、思考力の深さ、美しいリズムに触れる良い機会と呼びかけた。

川柳が目的ではありません。少年達は思った事、感動した事など気軽にのびのび作る。時にはハッとさせられたり、ほほえましく思い、温かく見守りながら刺激を受け、互いに作句に勤しむ。

子ども達にとって一時ですが、「幼い頃川柳を作った」思い出が、将来その人生を正しい日本語が支えてくれると信じ、楽しみにしている。

（吉田　幸子）

○ネギがほしいと思ったときベランダでネギが取れる今日この頃である。茄子を植えても、シシトウを植えてもちっとも実がつかないとこぼしていたとき、ネギならと言って下さる方がおられ植えたところ、これが大当たり。一日に3センチも、4センチも伸び、あっという間に収穫となった。みそ汁、納豆に入れるくらいなら十分である。

○ちなみにネギを調べてみると、ユリ科の多年生葉菜とある。種類もかなりあるらしい。玉葱、わけぎ、あさつき、長ネギ、等等。お目にかかってないネギの方が多い。そんな事を考えるうち最近思う事の一つに、食べ物には賞味期限がもうけられているが、人間が賞味出来るものは人生、残される時間が短くなればなるほど少なくなるのではないかと、ハタと気がついた。

○二、三年前、葡萄の種類は何十種類もあると聞いてデラウエアばかりじゃなんだか損をしている気がしてきた。たまに食べる巨峰に負けない葡萄がワンサとあるではないか。今日買ってきたのはナイアガラ、今後はアレキサンドリアにしようと思っている。

○名前もまた楽しいではありませんか。

（恵）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（1月号）地名

都道府県市　姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「家　族」　（11月15日締切）

1月号発表

松本　文子　選 ――共選―― 川上　大輪　選

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

本社11月句会

とき　11月7日㈫ 午後1時開場・2時半締切り
―開催時間が変わりましたのでご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし　藤井則彦

兼題　「文化」　板東倫子選
「どっぷり」　宮西弥生選
「増える」　米田恭昌選
「テスト」　木本朱夏選
「着せる」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

本社12月句会
8日(金) 午後1時から

兼題「ちょっと」「風呂」「騒ぐ」
「薔薇」「転機」

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄（2句）　「家族」（川上大輪共選）
「初」　米澤俶子選
「寒波」　菊地政勝選
「松」　土橋螢選
一路集（3句）
初歩教室　「詣る」（3句）三宅保州担当

2月号
檸檬抄　「花粉」
一路集　「飼う」「雪」「ぎりぎり」
初歩教室　「指」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第25年度 夜市川柳募集

第6回「力」春城武庫坊 選
ハガキに3句　11月30日締切

投句先　〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇六年（平成十八年）十一月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十八年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九五四号 川柳塔 十一月号
定価 八百円（送料 八十四円）

いのちある句を創ろう

川柳塔のぞみ 三周年記念誌上川柳大会

題と選者

「ひらく」
赤松 ますみ（大阪府）
五十嵐 修（神奈川県）
三宅 保州（和歌山県）
河内 天笑（大阪府）

「雑詠」
前田 芙巳代（兵庫県）
岡崎 たけ子（北海道）
坂根 寛哉（京都府）
新家 完司（鳥取県）

投句料 一、〇〇〇円（発表誌呈）

投句 各題二句詠・規定用紙または便箋に、〒・住所氏名（雅号）・TELを明記

投句締め切り 平成十九年二月十日（当日消印有効）

賞 各選者秀句に呈賞

投句先 〒193－0832
八王子市散田町2－31－3
川柳塔のぞみ 播本 充子
TEL 042－665－3172

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

雑誌 05703－11